其頃京都の所司代は名に負へる徳川家の重職たる松倉伊賀守勝重 承はつて相勤め禁裏の御守護洛中の取締り五畿内五ヶ國近江伊勢伊賀丹波丹後但馬播磨の境まで徳川殿の御代官と成て總ての政治を沙汰し行なひ關東の本多佐渡守親子と並び立て東西の兩柱と呼ばれたり此所司代より金春太夫が許へ專使を立てられたる趣意は來年（慶長十一年）二月には將軍家（家康公）右大將家（秀忠公）御上洛ありて大禮を行はせらるべき間その節は金春太夫こと猿樂相勤め申さるべし右に付き太夫には脇師門弟その外然るべきもの人選いたして召連れ早々上京いたすべしとの事なりければ金春太夫は『承はり畏る』旨の御請を成て使を返し、『扨誰誰をか召連べき、藤之丞其方の見立は如何と』第一に善七に相談して後に他の門弟等へ謀り地謠囃子に至るまで夫々の人數を定め同勢二十餘人が十二月初旬に奈良を發て京都に出で所司代へ伺候したり

所司代板倉伊賀守は金春太夫に對顏して『其方へは使者を以て申入たる如く來年二月には德川殿御親子の御上洛 重き大禮を行はるゝに付き更めて猿樂相勤むるやう其方へ仰付らるゝ、尤も關東にては是まで觀世の一流のみであつたが今度よりして金春をも觀世同樣に召抱へられ御宛行下されうとの御賢慮、しかし夫も藝能見屆の上との御内意、是に由て此伊賀守まづ下見分の致す間だ其用意の仕つて然るべし、但し舞臺は二條御城の御舞臺を用ふるに付き用意整ひ次第日限を申出らるべし』

と嚴かに言渡したり。金春太夫は悦び勇みて旅宿に歸り善七其外を集めて番組を定め急ぎ用意を整へ伊賀守へ屆出で愈々十二月十日を以て二條御城の御舞臺にて所司代下見分の能を催したり

其日の番組は七番の能にて善七の藤之丞は熊坂をぞ勤めたる。見物は伊賀守を初め先着の諸大名奉行 番頭の諸役人其外下司の輩に至るまで皆席に列なりて見たりけるが。流石は金春の能とて七番ともに秘曲を盡したる業なれば諸人みな感に堪へで面白かりけれと評し合ひたるに、伊賀守は打諾きて七番の能畢りての後に藤之丞を呼出し更に仕舞を所望し融と船辨慶を舞はせたり、是以て殊の外に見事の出來にてありけり。翌日には金春を所司代邸へ招きて伊賀守は昨日の勞を犒ひて『扨も其方が藝能は伊賀守感心いたいた、德川殿御着駕の上は早々言上仕らん、定めて御滿足あつて結構に仰付らるべし、但し立山藤之丞と申すものは伊賀存ずる旨のあれば向後御舞臺へは召連るゝこと相成らぬ、叶ふべくは其方門弟の列を除き候ふ樣に致せ』と申渡したり。金春は意外の思を爲して『彼藤之丞こそ私し秘藏の門弟にて藝能は拔群で候ふに其御沙汰は如何』と尋ぬれば、伊賀守『されば調眼の配り體の擧動頗る殺氣を含みたれば、仕舞をさせて試たるに融とても其通り矧て知盛の氣合働 常人とは思はれず個樣の役者は上手にまれ名人にまれ恐ながら禁裏樣の御前へ召され龍顏近う

で舞はせらるべきもので無い、伊賀が御舞茎へ相成らぬと申した由は此故である、但し當人へは申聞ぬ樣に致せ』とは申されたり

されども金春太夫は餘りの口惜さに旅宿へ歸りて伊賀守が申したる言を殘りなく善七に告げて『是と云ふも畢竟は其方が改名もせずして我等門弟に成り藝道上達の事をば彼の觀世が何方よりか傳へ聞て手を廻し伊賀殿へ讒言させたるにこそあるべけれ、何に伊賀殿が賢者とて四相を悟る聖人では無し殺氣を含むの何のと云ふこと御存知の筈が無い……』と愚痴の餘りに何をも知らぬ觀世までを思はずも惣身ぞつと仕たりけり

第五十一回

車善七は心中にて個樣には覺つたれども今春太夫へは斯と告べきにあらざれば故と打萎れたる體にて

『其仰せを窺ひますれば誠に以て私の不幸この上も無い儀に御座りまする。是と申すも强ちに觀世殿讒言と云ふでも御座りますまいが畢竟は私し微運の致す所で詮術も無い次第……太夫樣には私しを不便に思召し此上とても南都へ差置れうとの御意は私し身に取り有がたうは御座りますれど殺氣を含むで居るとか何とか板倉殿の意に適はぬ私しが御側に附添ひ居ましては此後太夫樣關東へ御召出しの妨害にも相成うかと心痛の仕りまする……兎角は左樣の評判の者は御遠ざけらるゝが始終の御爲、就ては私しこと唯今より御暇を願ひ當分の中は中國地を遊歷いたし火氣の消まする頃に再び歸參いたし度存じますれば此儀御聞濟を願ひ上まする』と程よく言捌へ金春太夫が名殘を惜めるを跡にして京都を立出で伏見より乘船して大坂へぞ着したりける

心に大望を懷く身が朝暮に諂ひつ舞つしてヤアハアの間に工夫を凝して他事なかりしは何の爲、これを手蔓に德川殿に近寄らん爲、それを早くも板倉に殺氣ありと見咎られ舞茎を止られし上は最早詮なしと思切たる善七なれば體よく金春太夫に別れて先づ大坂へ下りけるが大坂の秀賴殿には已に十五歲の年齡に近づかれたれば故太閤の天下をば德川殿より取返さんとの思し立ち頻りに其噂あり我は素より豐臣家に心を寄る者ならねば其邸下に屬せんは敢て好む所にあらざれども德川殿を恨む念は一ツなり、大坂城中の景況まこと末賴もしき體にてあらば之に加擔して事謀らんも惡うはあ

らじと心に思ひ大坂に著きてより天王寺の邊りに宿りて大坂の諸士へ出入を求め樣子を窺ふに淀殿の擧動大野父子が專横すべて埒も無き景況にて關東と合戰に及び德川家に打勝たんこと思ひ寄さる事と覺つたれば大に望を失ひいざ去らば是より中國に下り安藝の福島秋の毛利こそ士氣を察し猶も九州に渡りて肥後の加藤肥前の鍋島薩摩の島津たれ殿にもあれ然るべき大將にて叛逆の志あらん人に心を寄せんものをと思ひ立て大坂を出て山陽道より九州に渡り處々方々と遍歷して國々の樣子を視察したるに、何も關ケ原の一戰に懲てや德川殿には敵し難しと覺りてや又は大坂を助くる甲斐なしと思ひ明らめてや、我眞先に旗上せんと思ひ立つ程の氣慨ありとも見えざりけり。善七は大に望を失ひて此狀にては諸大名とて我が大望の賴に成るべき方は一人も無く長崎には南蠻人異國の交易どもの爲に數多渡來し（南蠻とは此ころ葡萄牙、西班牙諸國を指て云へるなり）其中には吉利支丹の宗門を弘め信者を懷る法師とか云ろ者もありとかや此異人等には却て我一味に成べき罪なきにも非ず兎にも角にも其狀勢を窺ひ見んとて慶長十年の冬十一月と云ふに長崎へは著たりけり吉利支丹宗門のことを聞糺したるに敢て邪宗と云ふには非ざるべきが、其宗門の僧正法師とも云ふべき伴天連伊留滿等が振舞を見るに南蠻人等と心を合せ弘法傳道の外に深き巧ありてや法師に似合はぬ行爲ども隱し難うぞ見えたりける又異人等が爲す所を見れば長崎の商人どもが只管に眼前の利慾に迷ふに附込て種々の計略を運らし往々は我日本の境に根城を據ゆるが如き下心ありてか不審う思はるゝ節も鮮からざりけり。扨こそ京都にて板倉が『吉利支丹南蠻は日本の患なり』と申したりと聞ける邪推にて非ざりけり斯る罪と心を通じては遂に國を誤ろの恐ありと覺りたれば是等には近寄らずして外に好手段もあらんかと暫く長崎に居て工夫を求め居たり

第五十二回

其頃長崎にては頻りに香道はやり又南蠻渡りの植木を持囃したり、是は江戶表にて大御所には（家康公）殊に伽羅を嗜せ玉ひ南蠻人へ仰付られ古伽羅新伽羅眞中眞盤旃檀蘇門答剌等の名木を求めさせ玉ひ又將軍家には（秀忠公）奇花珍木を愛させられ呂宋埃門廣東暹羅交趾等の境より花卉の類を取寄せらるゝ爲に屢々長崎奉行を經て御注文を異人等へ下さるゝ故に長崎にても其流行を見たるなり。善七は之を見聞して

『ムヽ香道に植木……こりや二ツの手段を得申したぞ

心中ひそかに悅びたり

善七は長崎へ著したる時より立川藤之丞の變名に複して櫻の馬場の邊に旅宿したりけるが其頃は長

崎市中の繁榮なる儘に年寄乙名通詞など唱へたる許多の地役人その外異人交易に携れる町人等は富裕に任せて殊の外なる驕奢に耽り猿樂は觀世金春の流を汲て最も行なはれ所々に囃子の聲ども聞えたり。善七は是ぞ此身を忍ぶに屈竟なりと思ひ或日旅宿の主人に向ひて『我等こと立川藤之丞とは名乘れども實は金春太夫の一門にて金春右近と申すもの、當節香道および南蠻植木の江戸表にまで流行いたすと聞き具道を學ばんとて太夫に暇を乞ひ其根元たる長崎へは下りたらなり、修行の間は滯留いたす心得なるが、御當地にて望の御方もあらば金春の一流をば徒然の慰に傳へても苦しからず』と語りて傳書免狀などをも示したり。旅宿のつるか、さうとは存ぜず唯今まで尋常の御客と心得て失禮せし段は御免候らへ、實は私し出入の御方々には能謠曲を好ませらるゝ人々も候へば寄々に吹聽を致し、又香道並びに南蠻植木の御修行もその手蔓を計ひ申すべし、此二つは仰せの如く唯今では當長崎が修行の本場で候ふ……』と且は悦び且は誇りて俄に善七を聟すこと一方ならざりけり

其頃長崎市中の町數は七十七ヶ町近郊の諸鄕を合せても江戸に比ぶれば十が一にも足らぬ土地、善七の金春右近と云ふ能役者が下りたりと云ふ評判は忽に長崎中に傳へて聲き渡りしかば何がさて珍らしいものを愛るが長崎の風とて善七が旅宿の主人を紹介して旅宿に來り面會を求め又は其家へ

招待を申込むもの引も切らず、善七は一々其報に逢ひもし又往もして交際を結び所望に由りて素謠仕舞囃子など致せしに素より金春太夫直傳の名人なれば長崎に下りて住居なせる諸流の田舍役者等とは雲泥萬里の相違ある藝能なれば我先にと爭ひて善七に教を乞ひたりけり。地元の役者等は大きに善七を憎みて、其金春右近と名乘るは必定贋者なり、金春太夫一門の人々が僕夫一人も召連ず輕々しう長崎へ下る筈が無い、其儀ならば我等ども出合て技倆を試し贋者の假面を引剝で當地を追拂ひ申すべし』と言合せたれば地元役者最負の連中は『それ宜らう』と加擔なして善七の許へ申込むにぞ善七登樓の連中は『右近どの彼田舍役者ども目に物見せて遣り玉へ』とひた勸に勸たり。善七も是に默止がたく去ば其儀に任せ申すべしと答へたれば双方の連中は打合を夫々に成て愈々何日と定め公然の舞臺は憚ありとて或酒樓の座敷に假舞臺を作らへ地元役者數人を始として双方の人々列を爲し善七の能を見分に及びたり

數番の謠曲數番の能いづれに愚のあるべきぞ金春流の秘曲を奏でたるに並居る人々は肝を消して、聞しに勝る名人かなと感嘆の聲を禁め得ざりけり、地元役者等も案に相違して中々已れ等が遠く及ばぬ所とは覺つたれど其儘にて止べきにあらねば善七に打向ひて

『偖々天晴の御堪能では御座ろが、抑々猿樂には諸流それ〴〵の掟あり、貴殿金春右近と名乘り召

さるゝ上は金吾太夫殿よりの御傳書免狀御所持であらう、我等一と通り拜見の仕らう
と望みたり。善七は奈良にて金吾右近の姓名を太夫より許されて僞ならぬ而已かは金吾流の秘事の
數々殘る所なく傳授を受たる身なれば姓名免許の狀金吾流皆傳の狀師範の狀など盡く所持したるに
付き取出して諸人に披見せしめたり

第五十三回

長崎の地元役者等は善七が示したる金吾太夫の免許狀の數々を見て大に慙き恐縮なし
『儕は金吾殿皆傳免許の一の御弟子にて金吾右近の御姓名を太夫殿より御讓りに成た御方で御座り
ましたか。御藝道は一方ならぬ御仁とは拜見致しましたが左樣とは存じませいで由も無い疑惑を
懷き立合などゝ失禮な事を申上て今更後悔の至り何とぞ御勘辨を願ひ上ます
何れも壁に額を付け只管詫入たり、是も其筈なり、彼地元役者等は觀世または金吾の流を汲めども
皆これ揃ひに揃ふたる田舍役者にて兩家元では名をも碌には知れざる者等纔かに初步の折紙を其師
匠より得たる程なれば太夫より見れば又弟子や又々弟子の族なり、夫が紛も無い正眞の金吾右近に
出會たる事ゆゑ宛然師弟君臣の如き身分違ひにて一言半句も出ざること誠に道理なりけり善七がた

の人々は左こそと大に誇り顏して
『何と各々方これで我等が師匠の金吾右近どの御身の上に付て疑ひは霽ましたかな
『イヤ疑ひどころでは御座りませぬ、右近さま斯樣に當地へ御下りに成りましたは私し共に取りま
しても此上も無い有がたい仕合、……實は金吾樣とも有らう御
仁が何たる仔細か存じませぬが御家來をお召連なく御身輕の御裝束にて當地へ御越、それ故に少
々御疑ひ申しました次第この儀は平に御詫を申上ます……此上は私とも始め一同がお引立を願
ひまする夫に幸ひ來月は當地の鎭守諏訪大明神の御祭禮で晴の神事に奉納の能どうか右近樣御勤
め下りませうなら有がたう存じ上まする
と詞を盡して謝罪と懇願に及びたり。善七は露ばかりも人々の無禮を咎むる氣色も無く詞を和げて
『否々左樣に御挨拶の下されては我等却つて面目なう御座る。各方が我等へ御疑心の掛られて藝能
の立合を御申込あつたは藝道の法にて至極尤の御事少しも惡うは存じ申さぬ……我等かやう忍
びにて御當地へ參つたは、御聞下され、實は個樣の理でおじやる我等若輩者で本業の外は何一つ
遊藝の嗜も無ゆゑ高貴のお席へ出て每度の無調法で手持不沙汰に困り入り申した、夫ゆゑ內々太
夫殿へ願ひ立川藤之丞と變名いたし香道または南蠻渡り植木の道をば修行いたさうと存じて御當

地へ罷下りましたれば何分にも各方のお世話を願ひ度おざる……尤も本業じやと申して免許は得申したが御覽の通り未だ功を積まねば未熟の藝能お賞に與かつて吐入まする、是も御當地滯留中は各方の御教を被つて修行いたし度おざれば御遠慮なうお指圖に與り度また我等心得て居まする程はお尋ね次第に何なりと御相談に與ると仕りませう……尤も唯今も申す通り深く忍びて御當地へ參つた事ゆゑ金吾右近と名乘て晴の舞臺を勤むるだけは憚りますが樂屋のお手傳で宜しければ何なりとも御命じ下され相勤むるで御座りませう……斯樣に各方の御疑念が解まする上は同業の御懇意諸事萬端よろしい樣にお引廻しをお願ひ申まする

第五十四回

打解て語り倦まで已れを誰遜りて相手の人々を立て花を持せたりければ地元役者は大に悅びて善七を師匠の如く尊び能好の人々が申合せて小島の邊に相應の家を借入れ善七が當分の住居と成し心を盡して饗應ほどに金吾右近の名は忽ち長崎中に弘まりて我も〳〵と善七に就て教を乞ひ中々の繁昌とは成れり。此繁昌よりして善七の身の上に測らざる禍を釀して危ふき機に陷る事となりぬ、其は回を更めて書記すべし

話頭又變りて、此に住江は先つ頃安房にて車善七に別れて江戸に出で人々の情にて御本丸の大奥に宮仕へなし計らずも家康公の御見出に預り御小姓になりて其傍には奥女中がた武藝の取立を仰付られ身の面目を施したれば未だ壯歲にも滿ざれど自から人の川ひも重くして住どの〳〵と敬はれ先に住江を部屋子にして世話したりける阿部の局さへも今は住江を同僚の樣に接遇たり。況て阿萬の方には御自分の方樣より出たる住江の事なれば何くれと無く內證の事まで打明て諸事相談に及ばるゝ程に遂には住江をば左ながら阿萬の方の愼匕首の如くに人々みな思ひ做ておさ〳〵恐を爲し其威權は御中老に續く程にぞ見えたりける。住江は乘てより心に期したる事なれば思ひ明めては居なれど去とて人情の常、善七が事の忘れ難く何にして何地の果に身を藏して在すやらんと夫のみ案じ暮したるに、測らずも御上落の御道中箱根の山中にて勿體なくも御乘物へ鐵砲うち掛たる山者ありて其者こそ車善七なれと殘し置たる短銃の證據にて事顯れ諸奉行より觸達し嚴しく其行衛を詮議ありと傳へ聞て今更のやうに愕を爲し兎角は密かに安房の淸念坊に逢て樣子を聞べし彼僧ならば或は善七の身の上を少しは知得たる事もあるべき歟と思ひて文通に及び淸念坊が出府を請ひたりけり

住江が推察は果して違はざりけり。善七は猛き武士にて一途に我思ひを達せんものをと心を鐵石にも擇ひつれども去とて住江の事の氣に掛り殊には大望を打明し俱に事を謀らんと迄に言替したる夫婦

の中なれば望の如く徳川殿大奥へ住込たるやらん何にして朝夕を送りつゝあるやらんと花の落るを眺め月の光の冴るを見る毎に思ひ出されて忘るゝ隙とては無かりければ前に奈良にて金吾が許に居たりし時に清念坊へ手紙を送りたり。清念坊へ手紙を送りより更に手紙を送りたり。清念坊は此二通の手紙を請取り披見するに二通ともに立川藤之丞と認め奈良にて專ら金春流の能を修行して候ひしが性来の不調法ものにて藝も十分に成達いたし候はねば今は長崎へ下り香道または南蛮流植木の事ども心掛て相學び是を活計に往々は身を立て申すべく下して『ム、扨は善七いま長崎に身を潜めて時節を俟つろよな、彼男去年箱根にて徳川殿を打損じ其場を逐電したりと聞たるが、奈良にても捜索の難を恐れ更に長崎へ赴きつるに相違なし夫にしても同じ變名を川ひ居るとは不川心の至り、其上に何なる恨のあればとて徳川殿をば今日に至りても嫉ねく覗ひ奉るとは以ての外の心得違なり、可々我等この上は長崎へ下り面會して急度意見を加へ改心いたさすべし、夫に就ても一先江戸へ出で住江へも内々事の由を聞せ置べし』と思ひ居たる所に、思ひは同じ思ひにて住江が文は到來したりけり

清念坊は旅の川意を整へ『愚僧聊か思ひ立つ事のあれば是より江戸へ參るべし、殊に依ては其足にて長崎へ赴き申さんも知り難し、左あらば凡そ半年ばかりが程は留守を頼み置くなり、本尊の御佛

朝夕の燈明香花の供養面倒でもあらうが是だけは忘らず捧げて玉へ』と村中の人へ托し飄然として富山を發ち江戸へ着したり。』何にしてかは住江に面會し得べき、彦坂小刑部ごときは恐るゝに足らぬ役人なれど心許されぬは本多父子非伊酒非また旗本にては大久保蜂谷久世近藤我なまじひに姿を潜め内々にて住江へ面會を計りては忽に諸人の疑ひを招きて悪かりなんず、よし去らば表向にて手段を付べし』と思ひ定め大久保彦左衛門が方へ赴きて關に掛りて案内をぞ乞たりける

第五十五回

安房の富山御堂の清念坊が推參いたして御座ると取次の侍が申し述るを聞きて大久保彦左衛門は返詞にも及はず、つッと立てつか〳〵と玄關に出て

『ヤア新兵衛發智よう草ねておじやり申したサア其儘直にお通り召されい……ナニ草鞋のお脱召されたら夫で宜しい足濕がるゝに及ばぬ事、コレ若侍ども上人の杖笠無ならぬ樣に急度お預り致し置け、……お荷物持て我等居間へお供せいと言付つゝ自から案内して座敷へ通し

『扨新兵衛どの何と思ふて江戸へわせられた、我等隨分氣隨ものじやが貴殿は其上に輪を掛た程の

大氣隨、浮と安房へ使者立て機嫌損ねては宜ないと態と無沙汰いたいたが今度の御出府何ぞ思立
でも御座つてかな
常からして快濶の徳川武士醇粋の三河氣性竹を破たる如くにて毛脚頴はし胡座して問掛れば、清念
も亦同じやうに胡座かき腕を摩つて大伸を爲しつゝ
『彦左どの、さう眞顔に尋ねられては清念少し面目の御座らぬが、實はのウ御身樣見掛て合力の取
次を賴に參り申した……イヤいくら我慢強うても取る年には太刀打が出來申さぬ、先年我等初め
て御身樣に逢ふ時、徳川殿へ御目見せい江戸に居て樂坊主に成れと信切のお勸であつたが敗軍し
て主無しに成た腰拔坊主あれが小田原武士の果かと諸司役人衆に面見らるゝが快う無い、夫に又
緋の衣に金襴袈裟阿彌陀見た樣な面して殊勝げに姿を飾り其内心は俗人に走繞かけた生臭坊主の
蛸入道そいつ等に頭下るは大嫌ひ、夫じやに由て此禿頭横に振て安房へ歸り申たが御堂の番して
畑作るも頃日ではきつう大儀に成りましたじや、と云て懐手して居ては米は貰へず流石の剛情坊
主はたと閉口いたいた。どうか御身樣お取次で大御所樣から（家康公）我等喰だけの乞食扶持御
合力に與り度、それ賴まうとて面の皮厚う參り申した……尤も其合力無益には貰はぬ、世間の噂
に聞及べば長崎を初として九州邊には今以て切支丹宗門を信仰の族が多人數あつて奉行の制止を

も川ひず佛法の敎にも從はぬと申す事、……糞坊主どもが何人下つても所詮その繰りは附き申す
まい、所詮はどの樣な景色であるか我等自分で長崎へ參り得と其有樣を見屆て歸り御身樣なり奉
行へ、なり注進いたし申さう、コレヤ坊主に似合の役目ゆゑ我等きつと勤め度おざろ……幸ひ相模
殿は御身樣の御一家この旨を相模守まで宜う話して下さりませぬか
依賴たりければ彦左衞門は打諾いて
承知致いて相模守賴む迄も無い此彦左衞門刀に掛て受合申した。諸宗の糞坊主等に頭下いで濟
やうに合力米きつと貰ふて樂隱居させて進じ申す……是じやに由て先年我等言た事聞入られゝば
宜つたに併し我慢強うて人の意見聞かぬが貴殿も我等も同じ持まへ、太平の代に成ては世間に嫌
はるゝも尤でおざるのウハヽヽヽア……夫で貴殿の川はざつと濟だが、貴殿あの住どのに逢ひ召
されたか
『イヤ唯今是へ參つたばかり、まだ住へは逢ひ申さぬが、住も御身樣がたのお世話で御取立に預り
きつう立身の致いたと時々の文通、併し此坊主が住に逢うと御廣敷口に尋ねて往かれず、マア其
儘に致し置うかと存じ申すが……
『ナンノ悼りが御座ろものか、我等これより登城の致し貴殿の事を奉行等へ相談し其序に住どのへ

も申聞けやう……可愛さうに年若の女性、輕に思ふ身寄の叔父御逢度は定で御座れば逢て遣され
い……ハア此紙袋は麥焦で貴殿から我等への御土産、イヤ忝う拜領いたす……マア我等歸るまで
足伸して休息めされ……コリヤ侍ども松岡御坊さま御出府の由を蜂谷どの其外へ使の以て披露せ
い……早う酒肴こしらへて差上い……新兵衛御免なされませい
肩衣引掛け馬に跨りて登城したりけり

第五十六回

薄暮に至りて大久保彦左衛門は歸宅なして清念坊に打向ひ
『御坊御安心なされい、我等唯今大御所樣御前へ出で貴殿の事、遂一申上たれば、夫は甚易い程の
事、新兵衛入道が合力米聞屆けた相模へ相談して計ひ得させよとの御諚であつたれば直に相模守
へ罷越し談示の遂申して同人も委細承知追て彦坂小刑部へ達し置く間だ小刑部引受け萬事不自由
ない樣に致すでおざろ……扨それからして貴殿長崎行の事申上たれば大御所樣きつう御悅びで其
新兵衛入道明朝にも召連いとの上意……惲りは御座らね明朝は彦左御案內いたす……又住どのへ
も知らせ申した

萬事は彦左衛門獨り合點にて取計ひ薄暮ごろより蜂谷助左衛門を始として德川家旗下の古兵者たち
打集りて酒宴を開き清念を饗應に及びたり。翌日は彦左衛門同道にて清念は西丸へ登城して大御所
へ御目見、清念は川意の袈裟衣を改め御前へこそは罷り出たれ、名にし負ふ日本一の名大將浮としたる
こと言上しては我身の恥辱と清念は愼みて拜禮し直の御尋に應じて所存の程を申上たれば大御所は
打頷かせ玉ひて
『清念さすがじや宜い所に氣が附た、出家の役目切支丹等が振舞よう見屆けて我等に知らせい、尤
も切支丹吟味の事は兼てより當地にては相模、京都にては伊賀へ申付け置たれば兩人に打合せ實
地の所を物見して奉公せい
御詞は鮮けれど　行屆いたる御諚に清念ははつと御請なし長居は恐れと退出に及びたり。住江は又
彦左衛門の通知に由りて清念が出府の事を知り得たれば大御所へ願ひて一日の御暇を賜はり其翌日
堺上寺の方丈にて清念に面會に及びたり、人拂ひての差向ひ先だつは善七が身の上その後の便はあ
りつるやと聲を潛めて尋ぬるに、清念は膝を進めて善七の手紙を示し『善七殿には斯く無事なれば
安心なるべし但し御尋者の身分として奈良長崎の境をば同じ假名にて徘徊いたすは用心に疎かなる
次第なり、殊には箱根にて德川殿を狙ひたる始末その心底甚だ以て合點ゆかず御身には夫婦の間柄

寐物語に聞得たる事はあらざりし乎我等心得までに承り度』と尋ぬるに。住住ははつと打驚きしが否々此清念たとひ信切の人にはあれど夫の大事打明て言ふべきにあらずときつと思ひ極て

『サア私しも箱根の曲もの車善七じやと聞て悔り肝を潰して御座りました、善七殿には常からして大御所様の御事をば恐れながら感心してこそ居ましたれ、お恨み申す事などは露ほども口外した事が御座りませねば私とて更に承知は致ませぬ

と涙を流て述ければ清念も左こそと察して

『アレ程の大事をば思ひ立つ程の善七殿たとひ夫婦中でも一世の大事を女性に明しも致されまいが何は兎もあれ何なる仔細の有うとも大御所を恨み無ものに成し申さうとは善七殿の悪い心得、我等これより長崎へ参り屹度意見の加へて改心させうと存じ申すが、御身にも信その心底ならば意見の一筆認めて我等へ渡し申されい、御身にも成り替り我等一人で二人前の所存を述ると致さうと申入たれば、住江も素より其心なれば懐紙取出して清念が目前にて意見の状をさらさらと書認めて渡し尚も叟々と善七の身の上をば依頼たりけり。斯て数日を経て清念は大久保相模守の招きに應じて其邸に伺候し切支丹取調の事に付き内命な承り彦坂小刑部の手より旅費の金子を請取り颯然として江戸を去り仲仙道を經て京都へと着たりけり

第五十七回

京都にて所司代板倉伊賀守の邸に伺候して斯と申入たるに板倉は既に清念が長崎への道すがら京都へ立寄べしとは江戸表よりの通知にて承知したりければ直に面會に及び旦は相模守を以て大御所よりの御内命この清念が心得かた諸事篤と問尋ねて心底を見定よとの仰付なれば打解たる體にて談合なし打續きて數日の間夫とは無しに種々問答に清念を問試みたるに疑ふべき節は少しも無く其昔は名を得たる小田原武士の松岡新兵衛の事なれば了簡かたは素より確にて徳川殿へ對して貳心を懐くべき様も無く心底更に蟠る所なく其思ふ所は自から面にも詞にも顯はれ見ゆる程に板倉は先づ安心なし去らば宗門の事を聞かんとて再び間に及びたるに清念は容貌の不骨なるに似ず晩學ながらも相應の學問ありて悟道安心の極意に達し尋常の出家が遠く及ばぬ程の見識を備へ其上に宗門と政治との境目は云々なり又宗門は政治の爲に敵にも成り味方にも成るものなれば中々に油斷は成り難し近くは織田殿の石山陣遠くは山門奈良法師の横行ども古を案じ今を考へ切支丹の事に至りては能々心を用ひて其處置を爲さゞれば世を恨める輩が之に加擾なし内外心を合せて思はざる外の亂をも惹起すべき恐ありと是非を論じ利害を述て論じたり板倉は之を聞く毎に我が常に思へる所と割符を合

すろ如くに一致したりければ大に感じて

『承はつて見れば失敬ながら思ふに勝つた御坊の御思慮伊賀誠に感心の致してお座る其眼力で長崎の有様を覗られたならば切支丹の族とて迫る〻所は御座るまい。尤も御坊の宣ふ如く宗門の事は手荒に扱ふては良ないもの、成るべくは奉行の威光を假ず法師の手で說諭し穩かに改宗させ度は伊賀とても其覺悟、恐ながら大御所様にも其思召ゆゑ御坊精々様子を見届け斯々致さば宜しからうと云ふ見込を附け其上にて我等へも相談あり度……』

細々と申含め夫よりして他の物語に及びたるが其話の中に板倉は思ひ出たるやうに清念に向ひて

『御坊、長崎へ參られたらば立山藤之丞と名乘り金春流の猿樂の上手が當時長崎に居るとの事、其者の振舞氣を注て御覽下されい

とありければ清念は心中にぎよつとして、扨は板倉我等と善七懇意の事を存知て我心を金引にやあらんと思ひしが、ちツとも面に顯はさず不審の色をなして

『其藤之丞と申すもの切支丹で御座りますかな

と問返せば板倉は首うち振て

『否々其藤之丞切支丹では無からうが去年の葬金春の能役者ども御召抱の下見として是へ呼出し二條のお舞臺で見物したが其中で面魂も尋常ならず仕舞謠曲に殺氣を帶び何と無う物凄き一人の役者その名を尋ねたれば立山藤之丞とて金春が一の門弟、此奴中々能役者で無い筈に一曲あるものと睨だゆゑ金春太夫へは我等存ずる仔細のあれば彼の藤之丞こと御舞臺へは遠慮いたさせいと申付たが、其後承はれば其藤之丞は程無く奈良を立退き大阪あたりを徘徊し唯今では長崎へ下り能の師範を致し居ると探索の者より申越た……否々關が原の殘黨にしては年齡も若し、樣子がらもさうとは存じられぬが何にも致せ油斷の成らぬしれ者もしも個樣の者が切支丹宗門に歸依いたし其一味に成る樣な事あつては山々しい大事。御坊よう心得て陰ながら意を注て御覽下され

神ならぬ身の板倉は清念と善七の間柄を知らされば清念が眞實の心を見透し得たるが爲に却て此大事をぞ漏したる清念は心の中にて世に生馬の眼をも拔くと云はれたる板倉が善七の事を我に語りたるこそ未だ善七武運の盡ざる所なれ、左らば長崎へ下り愈々善七に改心させ申さでは叶ふまじとて頓て京都を發て長崎へ赴きたり

第五十八回

話題また復りて此に長崎にて善七が金春右近の名隱すとすれば益々市中に聞えて諸方の厚遇大方な

らず猿樂謠曲の教を乞ふもの引も切らす、善七は快く人々を教授し其際には香道および南蠻持渡の花卉草木の培養に心を委ねて研究したりけるに、香道は性得その器に非ずと見えて成遂は思ふ程に非ざりけるが本草に至りては其好む所の故にや又は修行の功を積める故にや頗る發達したりければ其頃長崎に在住せる葡萄牙人の某と云へる者も大に善七が學問の進むを愛て己れが識る限りは傳授に及びたり、されば善七は博く本草の學に通じ培養の事に於ても尋常の植本職人等より遙かに勝りて比類なる技倆とは成たるが去ども諸人只只植木好とのみ思ひて左迄の修行とは心附かで只管に

金春右近が能藝ばかりぞ持囃したる

長崎市の氏神は鎭西大社と號して諏訪住吉の兩明神と此地の氏主森崎明神とを合せ祀りて廣大なる宮居を作り每年九月九日より十一日までの三日間を以て大祭の神事を執行ふこと此地開けて以來の吉例なり、今年も早く過ぎて明れば慶長十二年と成りぬれば此秋の大祭には云々と神事に與かるべき町々は既に其春過る頃よりして各々其趣向を定めおさ〳〵川意に及ぶ、中にも丸山町は此神事には常に魁を勤むる仕來にて遊女等あまたある中にて勝れて眉目よき女をすぐり出し諏訪の社頭にて什舞さするが例なりければ此年は引田屋の舞衣太夫と呼べる遊女この選に當りて舞ふ事とは成れり此舞衣は年は未だ二十歳に滿たざれども姿色極めて美しう心ばへも優にやさしき中に頗る氣象の女

なれば舞衣々々とて諸人の賞翫は一方ならず、舞衣は神事仕舞の役に選ばれて其家の長に打向ひ『扨も物數ならぬ妾が此大役を勤むること遊女の面目にて候へば同じうは數萬人の見物に舞衣こそ流石なれと賞られ度ふ候ふなり就ては當節金春右近殿とやらん申す猿樂の名人にて在す方が此長崎へ參りて滯留せられ候ふと承はりて候ふ叫ふべくば姿その右近殿より舞の一手を授かりて首尾よく諸人の眼を驚かし申さんと望み候ふ、あはれ此望を聞屆け右近殿へ御賴入下され度し、費用の程は妾いかにもして差出し候はん』と慇々と申したれば長ははたと手を打て『天晴の望み我等承知の致いた、幸ひ我等その右近殿へ兩三度も面會したる事あれば承知か否やは計られねど直に罷越て折入り賴み申すべし』と大きに悅びて同意し其事に及びたれば、善七は快く應諾て是より隔日に丸山に來り名高き花月樓にて舞衣に仕舞の指手引手を教へ授くる事とは成りぬ

聞しに勝る金春右近の美男立居擧動の品よき上に自から凜としたる武士風ありて何と無う氣高く見え其上に舞の上手にて教授も至て優しう信切なれば舞衣は密に思ひの火を胸に焦し機もあらば言寄らんと情を賣れる憂勤の中にて戀に心を亂れ初めたるが思ひは同じ思ひにて丸山の遊女にて太夫職と呼ばるゝもの共は眼前この右近が男振の美を見て妾も序に一指の御指南に與からんと我も我もと弟子に成りて舞の教を受る程に多人數の稽古に人目の繁して所謂目ツ張子の姿に成り右近は高根

の花の如くに成りて舞衣とても手折ことの出來ざれば刎て他の太夫等は皆徒らに思ひ入たる計りにて叶はぬ戀に心を痛め嫉妬の念を起す儘に『舞衣こそ右近殿と内々にて語ひ居るに相違なけれ、右近殿が此狐に魅されて御座るゆゑ外の女へは見向もせられぬならん』と根も無き浮名を立て遂に舞衣が一の客たる御代官の村山東安に此事を告げ讒言に及びたるものありければ村山も扨はとはッと怒り折こそあれと待たりけれ

第五十九回

そも此の村山東安と云へるは長崎出生の漢にて若年より世才に賢く南蛮交易を營みて家富榮へ其上に物の理非も人に勝れて分る人物なりければ長崎奉行の推薦に由りて將軍家より長崎の御代官を命ぜられ奉行の配下に屬して市中の取締り交易の事を沙汰し威權を振ひたり、此村山は極めて好色の人にて齢すでに不惑を過たれど眉目よき女と見れば之に言寄りて獸慾を恣にし更に其位地を顧る事も無く此春の頃より舞衣を見てより其色香に迷ひ御代官の身柄にて繁々遊里に通ひつれど其頃は斯る例の江戸にも少なからざれば奉行も敢て察當を加へず大目に見て問ざる程に村山は良事に思ひ做して下司の報を引從へて酒樓に遊び舞衣を傍に引附て酒宴に耽ろを常としたり。然るに此節か

の舞衣は歌訪の神事の舞ひ稽古にて日毎の様に金春右近を招きて親しく其教を受け居ること去とは無用心千萬猫の前に鰯を置やうなものと内々氣を揉て安からず思へる所に他の遊女どもが右近と舞衣との中は怪しき交りありと云ひ振すさへあるに夫に相違は無いと讒言するもの〻出來りたれば、村山は嫉妬の噴恚忽に燃立て、おのれ右近め能も〳〵舞衣と密通したるよな目に物見せて思ひ知らすべきぞと待搆たり頃は慶長十二年八月中旬の事なりしが善七の金春右近は例の如く花月樓にて舞衣その他の遊女に仕舞を教へ了りて黄昏近う成りたればいざや旅宿に歸らんと飛石傳ひに庭を通り過んと歩を運る所に、横合より仲居一人出來り善七の前に腰を屈めて『ア、申し右近さま、あれに御座りまするは御存知の御代官村山さま、其御口上には『右近樣日毎の樣に是へお出張あつて大夫衆へ舞の御稽古御苦勞に存じまする幸ひ我等今日あれなる座敷にて酒宴の催し居れば失禮ながら一盞差出たう存ずる程に一寸あれへ御立寄を願ひまする、尤も一座の者は大抵御見知の者共にて御心置の者も居ませねば必らず尊來下され度依て是なる仲居をお迎ひに差出して御座ります』との仰せ故どうぞお出下さりませ、サア私しが御案内を致しまする』と詞巧に逃たりけり。善七は此村山とは三四度も出會て顔を見知つたる中ではあり殊に長崎では奉行に續きて威權ある役人ではあり辭りては惡かりなんと思ひたれば心には染ねども引るゝ儘に取て返し村山が酒宴の座敷に通りて見

れば村山を上座として乙名兩組の面々四五人ばかり膝を並べ舞衣はじめ遊女藝妓ども十餘人その傍に侍りて杯盤頗る狼藉たり。村山は善七が入來るを見て

『是は〳〵右近どの宜こそ御入來、この一月ばかりは我等も公用殊の外に忙しうて御出會も致さなかつたが、今日計らず此面々に勸められ是へ鬱散しに參つたれば幸ひ尊公舞の稽古を授けのため御居と承知いたしお迎へ申上た、取敢ず一盞獻上いたさう……コレ仲居ども勝も肴も餘りの取散しやう、早う改めて持て參れ……ナニ彼方の廣間に支度が致いてあると申すか、然らば座敷を更て飮直さうサア右近どの是へ御座れ東安御案内の致し申す

先に立て善七を廣間に招じ盤應に托せ何をかな落度もあらば夫を雇に取て押へんと密に一座の者等へ牒し合せ頻りに杯を侑めたるに、善七は隨分の酒量あれば愼みて深くは川ひず言語と云ひ振舞と云ひ少しも禮儀を紊さず其上に身の構へ五分の隙も見えざれば村山は案に相違して此奴中我等が手に乘るべき仁ならずと內心少しく恐れを成し居たり。斯る處に誰が命じたるかは知らねど一人の遊女が香の具を持ち出して『皆樣お嗜の御一炷お願ひ申上まする』と望みたり。此頃は香道專ら世に行はれ苟も其心得なきものは風流の道に疎しと迄に云はれ殊に長崎は舶來の名香に富たる地なれば香道第一の場所と我から誇りて諸人みな爭ひて香を聞くが流行にてありけり。村山は是を見て

『オ、宜こそ氣が附た感心じや、右近殿は香道もお嗜みと聞て居れば當座の御馳走然らば我第主人役に一炷焚て右近殿の御賞翫に與からう

懷中より香包取出して一炷なし善七の前に差出したり

第六十回

善七は我と舞衣と浮名の立たる事も知らねば村山が我に向ひて害心を挾めりとは夢にも知らず、今しも村山が焚て出したる香爐をば悲しく手に取上て之を聞き

『是は〳〵村山樣の御名香唯ならぬ御名品賞にも御心入の御馳走ありがたう拜味いたして御座りまず……皆樣、御先へ拜味いたし失禮の段な幾重にも御免を願ひ上まする

と會釋して一座の人々へ廻したり、是を初として一座の人々も遊女も銘々に所持の香を取出して其嗜に誇り或は源氏香競馬香又は十種香など種々の業に渡りけるが、善七は初よりして香道には至て不調法なれば其心得なき由を申して携らぬ樣にしたれども村山は香道に掛ては一二を數ふる程の聞手なれば是ぞ右近に恥かゝせ當度の腹癒すべき折なると心に悅び善七が辭退をば更に聞入れず

『何の〳〵金春右近どのとも有うお方、御本所は日本第一の舊き都の奈良のお住居で圓滿井の御名

家、禁裏仙洞の雲上にも召さるゝ御仁、香のお嗜が無い筈は曾て御座らぬ、夫に御所持が無いと言はるゝ、ムゝ此村山東安を九州の果の田舎者とお下墨あつての事で御座るか、但し此座をは香道不心得とお見くびり有ての事か……さうで無くば御所持の御一炷是非とも是で所望いたす此東安が刀に掛ても御所望申す

十分の酒氣を帶てはあり吃相變て善七に迫り居合せたる罪も皆左樣々々と同意なし舞衣が餘りの氣の毒さに調停するを『おのれ何を申す入ざる口出し控へて居よ』と叱付け否と言はゞ一同が善七を相手に取り爭論及傷にも及び兼まじき勢なり。善七は『扨こそ此村山め、何の仔細か知らねども我に遺恨を含み喧嘩腰にて所望を仕掛たるよな兼々大望を懷き殊には世を忍ぶ身の上、是等ごとき者共の相手に成て身を過つては一世の大事、幸なるかな亡母上より賜はつたる形見の名香肌を放さず所持なせば是を出して一炷なし當座の恥をも遁れ且は無事に此座を罷るべし』と思ひ定めて

『中々以て左樣な理では御座りませぬが、實は此御席にて數々の名香揃ひ、其中で香道では片田舍にも劣つたる奈良の能役者風情が所持の凡香それを出しては餘りの不興と差控へて御座りましたが、併し村山樣より斯までの御詞が掛りまする上は取出して一炷いたしませう、必ずともにお笑ひ下さりますな

と會釋して頓て守袋より香盤とり出し法の如く香爐を取り火を試み銀葉の上に載せ程合を見て『いざ御聞下されよ』と村山が前に差出したり。村山は善七が所持の香を載せたる時より早くも觸るゝ香のかほり、是は唯ならずと心附き香爐手に取り聞きければ世にも稀なる無雙の名香『コリヤ恐入た右近どの斯程の名香御所持ながら御辭退あつたは恨で御座つた、是で東安忝う拜味いたし一入の悅び……』と忽に打解たる態を爲し『サア何れも此名香を拜味さつしやれ』と香爐を渡せば、一座の者共は受取て頻に鼻を威からし眉を顰めて『成ほど是は稀代の名香、右近どの失敬ながら何と申す銘で御座りまするか母より讓受た品ゆゑ赤面ながら不心得で御座ります』と答へたり『左樣で御座るか、是程の名香銘が無ては成らぬ筈、イヤ村山樣貴所樣は香道の御大家御鑑定を願ひ上ます……拙者が聞た所では……』と言はんとするを、村山早く聲を掛け『どうして此香が我等どもに聞分の成るものか杜撰な事言出して耻かゝれな……イヤ右近殿の御秘藏の御一炷くれ〳〵も御馳走で御座り申した』と頻りに悅を述べ興に入たれば善七は善き汐なりと暇を告けて立去たり

跡には村山東安あたりに居たる遊女藝者仲居共を遠ざけ一座の者に打向ひ聲を潛めて

『兼てお觸のお尋もの車善七が居處はからずも唯今相知れたぞ

『ナニ善七の居所が知れましたとな……シテ其車善七は何地に居りまする
『何地でも無い此長崎に居り申す……アノ金吾右近とは變名彼奴こそ即ち誠は車善七に相違ない
其理と申すは今しがた彼奴が焚たは蘭奢待の名香、徳川家では東大寺、細川家では遊遊、伊達家では柴舟、また佐竹家では捨簿その名は各々更れども何れも同じ香木にて日本廣しといへども禁中の外は此四家ならでは所持なき名香……奈良の金吾が所持いたさう理が無い……夫にあの右近め此香は母より譲りと申した一言、其上に彼奴が物言ひ上方詞に似たれども疑も無い常陸訛り、彼と云ひ是と云ひ思ひ合せて見る時は車善七に極つた……夫のみで無い立川藤之丞と申す能役者長崎に立廻ると聞えたり油斷ならぬ者なれば其舉動に注意け注進せよと京都所司代板倉伊賀守殿より御奉行への御内沙汰、直に此旨御奉行へ申立て今宵にも彼奴が宿所へ押寄て搦捕り高名手柄の其上に我が馴染の舞衣を横盤切られた其遺恨倶に霽すは此時じや……
其手筈ども落なく申合せしたりけり

第六十一回

『御身の上に拘はる大事いそぎ旅立の御用意ありて直に云々の處まで御越なされ度わらは御待ち申上居り候』と舞衣より專使を以ての急ぎの手紙、脚に疵もつ善七ははツと驚きたるが必定これには仔細こそあらめと承知の由を答へて使を返し素より宿所とて假の住居なれば其儘に捨置き別に旅立の支度もせず心ばかりの用意して宿所を出たるは既に初夜過たる頃なりけり。遠くもあらぬ所なれば程無く丸山町に到り舞衣が申通じたる家を訪問へば、舞衣は疾に此家に來り善七が來るを待受けて

『右近さま最前からお待ち申して居りました、マア此方へ……女將頼みますぞへ
奥まりたる一間に誘ひ襖をはたと締切て
『右近様、貴君の御身の上が知れまして今宵にも御奉行所から捕手の人數が御宿所へ參るはず、早うお立退なされませい
と聲を潜めて知すれば善七は心中益々驚きながらも
『ナニ我等が身の上が知れたとは、そりや何が知れ申した
事も無けに問返せば
『お隠なされな右近様、金吾右近とは假の名、實は佐竹浪人車善七と云ふ大公儀のお尋ねもの厳しい御詮議の方じやと云ふこと露顯いたして御座りますぞへ……

今日の夕方善七が花月楼を立去りし後に、村山東安が下司の役人等と人拂ひの密々話を舞衣は襖の陰にて聞とも無けれど右近と云ふ名の漏しより耳を聳て居たりければ兼て京都より内々通達あつた る立川藤之丞こそ金吾右近とは名乗れども事善七に相違ないこと菌斎待の名香を所持したるにて分明なり急ぎ御奉行へ申立て直に捕手の同勢を彼が宿所へ差向ん其手筈は斯々との申合しかと襖越に聞たりと落も無く詞早に告知らせて

『……サア是じやに由て御身の大事その捕手が来ぬ中に早う當地を御發なされませ失禮では御座りますが急ぎのお發に路川の御支度私しの持合が此に十兩この金子を持て早うお立退が第一かなめ……私じやとて女一疋どの様な事があつたとて舍利が微塵に成るまでも口走りは致しませぬ程に御安心なさりませ……イヤ〳〵日見峠の本道は危い〳〵、是から時津へは一里半二里足らずの道程それから船で直に諫早それが一番の近道とお容の話によう聞て居まする……

信切の眞心は面に顯はれたり。善七は得と聞取て

『舞衣どの假初の弟子師匠その義理を思ふて御身の信切善七身に取り一生涯忘れは致さぬ、一座の不興を穩に取捌き我身の無事を計らんと一途に存じ母の讓りの名香を一炷したは我等が不覺……御身の勸に從つて是から直に時津へ掛り……作し路川の金子は卿か所持して不足は御座らぬ……

さらばで御座る舞衣どの

そこ〳〵に暇を告げ丸山町を出で裏通りに小島鄕まで來りしが

『女に似氣なき舞衣の信切、但し彼女は御代官村山東安が買馴染の遊女、表に信切と見掛て內實は村山が間者我を欺き誘出す手段の計略あらうも知れぬ、浮とは乘れぬ時津船、善七なりと素性をば明したは我等が疎忽……否々山なき人を疑ふは武士たるものが恥る所、かの舞衣、先頃その身の物語り原は浮田家の勇士有松帶正が一人娘、父の討死主家の滅亡一家一族散々ばら〳〵遂には長崎へ流寓ひて川竹の浮勤、氣象も勝れし女なれば村山ごとき俗吏に與し我を欺く女で無い……人の情を無にせじ欺かれなば夫迄よ、いざ去ば時津へ向つて此場の危難を……

思ひ定め足に任せてひた走り三更の頃に時津へ着し漁家の門を打叩き樣々に賴みて船を雇ひ岸を放れたるは早已に四更に近き眞夜中にてぞありける

第六十二回

善七は頻に船頭を急がせ『我等は一刻片時も爭ふて諫早へ參られねば成らぬもの、約束の船賃の外に酒手をも與へん程に、少しも早う腕限りに漕付よ』と言付れば慾に曰の無い時津船『別に酒手を

下さるなら倒る丶迄も急ぎませう、サア旦那この櫓脚に水を掛て下されい』『承知いたいた』と幼年の頃より當陸に育ち海に慣たる善七なれば船頭に力を合せ一里半ばかりも海上に乘出し空も早や曉近う成たるに、後の方より數艘の早船いつれも八挺立にてエイ〳〵聲して櫓を押切し此方を向てぞ追來る。善七是は怪しと振返り窺ひ見れば船中には捕手の人數と覺しく大小横たへ槍鐵砲とも用意したる許多の武士ども乘組て居たりけり。善七は扨こそ追手ござんなれと船頭と倶に櫓柄に取付き一生懸命に漕たれども、此方は小船彼方は早船、忽に追付て二三十間ばかりの間合に來り彼方より聲掛て『其船待て、御川だぞ、御詮議の筋がある』と呼はつたり。御川の一聲は霹靂よりも烈しく耳を貫きて船頭は『ヘイ』と云ひさま櫓を控へ再度の下知を待つ樣なれば、善七は氣を焦ちて『此方に御用は更に無い筈、サア漕け早う漕け』と責れども、船頭はいつかな聞入ず『御詮議と仰しやるからはお改め受ねば成ませぬ』と扣へたり。其中に早船は已に十間程の所に來りて『サア船中の侍、御川と聲掛たに、なぜ神妙に扣へ申さぬ、と銘々に咎め立て善七が乘たる小船を中に取籠め近寄んとぞ進んだる。善七は船中につッ立上つて『御川とあるは捕者で御座るか』『何にも其方、我等長崎御奉行の下知に由り曲者詮議の爲追掛け參つたれば其船直に引返さつせい』『左樣かは存ぜぬが捕者は鍋島家の武士主川あつて急ぎの船路、御詮議受べきもので御座らぬ』『言

ふな曲者其方こそは金春右近とは假の名實は大罪人の車善七、素性は疾に顯はれて御代官村山殿の配下の役々召捕の爲昨夜宿所へ向つたれば風を喰つて早くも逐電海陸ともに追手を出し、斯く取籠る上からは逃るとて逃さうか、イザ尋常に縄受るか、手向なさば船頭もろとも討て取らうか、何にく』と喚はつたり。善七が乘たる小船の船頭は斯と聞より恐を成して『ア、申し御役人樣、曲者とは毫と知らず船賃欲さに乘せましたれば同類では御座りません、どうぞ御慈悲を願ひまする』『ム丶、同類で無くば其船早う漕戻せ』『畏つた』と船頭は櫓柄を取て漕戻さんとなしたるにぞ、善七は『エ、おのれ何をする』と云ひ樣に、早速の早業、足を擧て船頭は觔斗うつて眞逆さまに海へざんぶと落たりけり『それ曲者の車善七打て取れよ』と叫び喚けども米だ見ぬ手並に恐を爲し四方の早船より長竿また手槍を出し取巻たる計りにて矢庭に船は寄せざりけり。善七は明光々たる腰刀すらり抜て右の手に振翳し左の手をば櫓柄に掛寄らば斬らんと揃へたり、陸地ならばいざ知らず漫々たる海の上、此方は一人彼方は多勢數艘の船に圍まれて脫るゝ道のあらばこそ、今は其身の絶體絶命、アゝ我運も是迄なり、此世の思ひ出罪深しとは知つれど捕手の奴原刀の刃金の續かん限り切捲り、腹掻切て死べきぞと覺悟を極め『サア來いサア寄れ』と呼はれど勇氣に恐れて近寄る船も無かりけり

二八月は暴風雨の季節と云へるに違はず昨夜より曇りたる空は曉方より益々陰りて黒雲ひたと覆ひ掛りざつと降出す驟雨に忽ち起る大風、善七が乘たる小舟は更なり押手の早船も宛然木の葉を泛べたる如く吹散されて海上一面の洪濤の上に漂ひ忽ちに千仞の岡に昇るかと思へば又忽ちに百丈の谷間に落るが如く、アレヨ〳〵と叫ぶ計りにて戰ふ事も防ぐ事も成らばこそ敵も味方も唯我身の上と成たりけれ善七は兎ても角ても助かり難き我一命されども力の限りは防がんと持たる刀を船板に突立て雙手を悟に掛け踏居たるが、追手の船より嵐の中を打出したる數發の鐵砲どうと烈しく其儘に善七は舟の中にぞ仆れたる

第六十三回

此に又松岡新兵衛入道清念は京都にて所司代板倉伊賀守に別を告げ中國路を經て九州に渡り長崎に到着したるは八月下旬にて車善七の身の上露顯に及び時津の海上にて追手の早船に圍まれし最中、暴風の爲め生死も知れず成りてより僅かに五六日を過たる後の事なり、清念は長崎に着したる上は兼て切支丹宗門の狀況を實地に見聞して其利害を究め且は善七に廻り合て心底を探らんと思ひつる事なれば、市中の片邊に旅宿を求め毎日市中を經廻りて此に立寄り彼所に佇みて事の體を覗ひ聞たるに、市中の評判は到る處として車善七の沙汰のみにして『去年より當地へ參りたる金吾右近が立川藤之丞と云ひたるは假名にて實は佐竹浪人の車善七猛虎と云へる大剛の曲者、前年相州箱根の山中にて大御所を鐵砲にて打損じ姿を隱したる大悪人のお尋もの、露顯に及んで押方を相手に時津の沖にて討死したと云ふ事けな』『否々討死したでは無い、彼奴素より切支丹の法を學びたれば咒文を唱へて俄に雨風を呼起し押手の早船十餘艘を難なく海底の藻屑と爲し己れは黒雲に乘て空中に昇り何所とも無く容を隱したと云ふ事じや』『實にそうであらう、道理こそ此長崎御支配地は云ふに及ばず九州二島津々浦々まで人相書を以て嚴しい御詮議『嘱托の御憂美は銀子三百枚と云ふ莫大の銀高どうか運よく其善七めを召捕て其金に有付たいものじやのウ』『處が其善七が稀代の手利で豪傑の上に切支丹の名人と來て居るから我々等の手に終る事では無からう、悪くすると返り討に命を取らるゝも知れぬもの』『言はれて見れば夫もさうじやの……』と取々の噂話し。清念は是を聞て『扨こそ善七が身の上露顯に及びて危難に罹り生死の程も知れざるよな、何なる手掛にて露顯したるか明智の板倉じやとて立川藤之丞が車善七と看通す程の通力が有う理も無し、其れに彼善七は度々の危難を免れたる壯夫難風に遭たとて鮫の餌食に成るやうな淺運の者では無い、何さま夫と無く仔細を探り我力にて助け得べき程ならば助けて遣う』と心中に思ひたれば特に意を用ひて善七に關係る風說

を問糺すに、善七が舞衣に仕舞を授けたる事、兩人が中に浮名の立たる事、村山東安が舞衣を買剿染たるに善七に對ひて嫉妬の念を懐きたる事、善七に思を寄せたる遊女等が叶はぬ戀を恨に思ひて善七を村山に讒言したる事、花月樓の座敷にて村山が善七を招き香を所望したる事、その香よりして右近は即ち善七に相違なしと露顯に及びたる事、唯が告知らせたりけん善七は風を喰つて逐電なし時津の海上にて捕手の早船に取圍まれし折に早手の暴風雨に敵味方とも其難に出會ひ善七が乘たる船は遥かに海上に漂ひしを見當りしかども當人の生死分明ならず但し十の八九は溺死したるならん想像らるゝ事ども落も無く聞得たりけり

清念は武士の果とは云へ、長の歳月諸方を渡りて世故にも人情にも通じたる老僧なれば、善七と舞衣との中に何なる意味もあるやも知り難し先づ其舞衣に面會して問ひ試みるこそ專一なれ』と思ひ付き其方便を求めたるに、舞衣が抱主たる引田屋の長は業體に似氣なき念佛の信者なりと聞えたれば清念は『是ぞ幸なる、然らば我等托鉢に事寄て其長を手に入れ、夫より舞衣とやらんに尋ぬる梯子を掛べし』とて其翌日より行李の中より川意の袈裟法衣の淨らかなるを取出して着用なし丸山町に赴き念佛高らかに唱へて托鉢なしたるに珍らかなる老僧の殊勝に見え玉へるが何方より渡らせたるやらん此里へ日毎來らせ玉ふぞ有がたき』と銘々に布施したり。斯樣にして已に五六日にも及びたれば最はや時節も到來したりとて清念は或日引田屋の門口に佇みて念佛十遍ばかり唱へて後に

『何に此家の主は御座あるか、念佛信者じやと傳へ聞て江戸の修行者が尋ねて參つたざ、苦しからずば兒參の致し度御座る

と案内を乞ひたりけり

第六十四回

引田屋の主人は固より念佛の信者ではあり此程より日毎に念佛申して此丸山へ托鉢に來れる老僧の在すが常人とは見えざる由との噂を聽き何なる法師にてましますやらん値遇して見ま欲きにと思ひ居たる所に、清念が案内を乞ひ入れたれば、大に悅びて直に出迎ひ先づ此方へ通らせ玉へと座敷へ招じ最も丁寧に接ひて『扨も御僧は何地より此長崎へは參らせ玉ひしにや』と問ひければ清念は珠數つまぐりつゝ

『愚僧は元相州藤澤寺の所化で御座つたが仔細あつて安房國富山御堂に住職いたす清念と申す田舍坊主。然るに聊か存ずる旨あつて江戸へ出掛けて相談いたし此老年をも厭はず當長崎へ參り今日

で未だ十日ばかり、市中の評判を承はれば御主人は念佛の信者と申す事それで御尋ね申して御座るじや

至て無造作の答。主人は悲しう兩手を突て

『夫は〳〵遠路の御旅行御苦勞に存じ上まする、定めて御下の御道すがら京都へ御立寄で智恩院樣へも親しう御對面で御座りましたらうが、御門主樣には御機嫌よう御渡りであらせられまするか

と問ふに。清念は首を打振て

『成ほど京都へは兩三日滯留いたしたが智恩院へも參詣せねば御門主へも逢ひ申さいで發ました

『へー左樣で御座りまするか。併し當地へ御越し成ましては大音寺樣皓臺寺樣その外の方丈がたへは定めて御面會を成されたで御座りませう

『イヤ〳〵坊主と云ふては誰にも面會は致し申さぬ

取止も無き返答に。主人は益々不審を爲て

『そりや又何故で御座ります

と問ふに。清念は呵々と打笑ひて

『何故じやと云ふて考へても御見やれ、空念佛いふて無暗に後世を願ふ腰拔坊主や獨りで悟開いて

佛に成た積で居る狐坊主等に逢て話を仕て見た所で何も埒が明く詮議では御座ら無い、夫よりは御手前方見た樣な眞實の佛法信者で高慢の無い人々と面白い話して笑ふたり諭うたりするが遙に勝じや、其で此老僧は坊主交際が大の嫌ひでおじやるてハヽヽヽア

遠慮も無く罵つたり。引田屋の主人は此和尙辈常の出家とは餘ほど異つた話し振り是が世に云ふ名僧智識の活佛で在すならんか……否々當節は長崎の繁昌を聞て諸所から入込む貧僧山師の數々は引も切ぬ程である、其上に出家だちがお嫌ひなさる此遊里に入て托鉢するとは合點が往かぬ是なる坊主、俗人威しの高言吐て揚句の果は草鞋錢の合力でも言うとの所存であるか……』と事體分らねば其應接に困つたるも道理なり斯る所に表には多勢の人聲。此家の伴頭は面色を變へ慌しく入來りて清念に向ひ

『モシ御出家、お前さんの名は清念さんと仰しやいまするかな

と聲潔はせて問掛れば

『何にも愚僧が清念じやが、何さ用事でも御座るか

『川事どころじや無い御奉行樣の御手附樣が御年寄や乙名方を多勢御召連て此方へお出に成て『清念と申す坊主唯今當家に參つて居る筈面會せう』と仰しやりまする早う出て逢しやりませい……

モシ旦那疾々其御出家を表へお出し成さりませ、御役人様がたのお尋ね、大變な騒動に成ります聴て主人も悩りして、心中に思ふやう『此程からして車善七騒ぎで、此方も夫とは知らずして右近を招待なし仕舞させたれば道れ難き連累、今日は御奉行所に呼るゝか明日は白洲に引出さるゝかと内々の氣遣、その上に此坊主ゆゑ面倒受ては其らぬと』心を痛め倶々に清念を急立れば、清念は悠然として

『左様で御座るか、然らば長崎奉行手附の役人衆へ、清念これに罷在り唯今當家の主人と法話最中でおじやるが、苦しう無い程に通り召されと傳へて下され……ハテ夫しきの役人衆出迎ふにも及ばぬ事御主人もさう慌いでも落着て是へ御座れテモ役人と申すものは酷い威勢で御座り申すのウ

ハ、、、ア

高笑をぞしたりける

第六十五回

御奉行所の役人衆御入と聞ては清念が止るを後にして、引田屋の主人は座敷を駈出し羽織袴を憐着に着て出迎へ、家内中が惣下座しての大騒ぎ。役人等は主人の案内にて座敷に通り中にも頭立たる武士は清念より少し上座して輕き會釋に及びて

『御出家御手前が清念坊で御座るか

と尋ぬれば清念は首領て

『我等お尋の清念でおじやるが、何か御用事で御座るか

『其用事は差置き、先づ御坊の度牒幷びに往來手形を一見いたさう

『ハテ扨面倒な事の申さるゝのウ、唯今出てお見せ申すにいまだし

首に掛たる頭陀袋の中なる反古紙を掻捜し頓て一通を取出して

『度牒は先年藤澤で遊行上人に貰て置たが忘れたと見えて此には持合せぬ、往來手形は江戸表で渡されたを邪魔じやとも思ふたが、請取て持て參つた

役人の前へ投るが如く出したり。役人は取上て讀下すに

一安房國富山御堂住職清念上人こと今度大御所様より御直の御内意仰含められ諸國巡回長崎表まで罷越され候條何地に於て隨分馳走いたされ尤に思召し候上意に依て執達仍て如件

大久保相模守判

役人は是を讀下して大いに恐を爲し押戴きて卷納めて清念に返し其儘席を下り次の間に出で圀際に

慶長十二年五月十日

座して一同に平伏し銘々に姓名を名乗りて彼頭立たる手附は詞を更め

『御老中御判物拜見仰付られ有がたき仕合恐入て御座ります、實は上人樣當長崎表へ御下の儀は先達て京都表板倉伊賀守樣より奉行小笠原長門守まで御内達御座りましたれば長門守に於ても御心待申上られて御座ます、然に上人樣には御下向の御先觸も無く、又當地の諸寺諸院へも相達し置ましたれど、是迚も唯今まで御着の屆をも仕らず、如何成されましたる乎と長門守にも案じ居られましたる處、此頃より見慣ざる老僧一人當地へ入込だりとの屆、よつて今朝其旅宿の亭主を乙名方へ呼出し宿帳を改めましたらば「江戸より到着いたす安房國富山御堂所化清念」と記しあり、直に長門守へ申聞ましたるに、然らば御對面の申上げ種々御内話をも仕り度御座りますれば長門守役宅へ御入來を願ひ度、御都合の御頃合をば憚ながら承はりて歸りますやう申付られましたれば私共へ仰聞られ度願ひ上まする、次に御旅宿の儀も唯今の處は甚だの疎末早速に御宿替取計ひますれは暫時是へ御休息の程願しう存じ上まする

恐る〳〵申すにぞ、清念は一向に更まつたる景色も無く

『ハヽア左樣でおじやるか、夫は〳〵御苦勞千萬、實は當地へ參つて未だ十日ばかり、見物をも一順致いたら長門殿を御尋申さうと存じて居たに御使に與つて祝着で御座る、明日午過に罷出で御

差支は無からうか……御差支なくば明日午過手前罷出る事と致さう……ナンノ〳〵迎ひなどに來られて却て迷惑いたす、奉行所は立山であらうな、我等よう存知て居れば案内なうても勝手に罷出る夫が即ち勝手でおじやる……又旅宿も唯今の家が頗る結構、宿主も至ての信切もので好い話し相手じや……何の淺間の手狹もあるものか、手前ごとき乞食坊主の旅宿には結句相應で上品すぎる程で御座る……併しあれて泊つて居ては長門殿御面皮に拘ると申すなら、何と致さう……なふ御亭主、御自分樣御迷惑じやらうが、此坊主當分の間だ臺所の隅に寐かして置て下さらぬか、食物は精進でも魚鳥でも此坊主更に構ひ申さぬじやハヽヽア

『然らば仰せの趣早速長門守へ申聞まするで御座りませう……コレ亭主、上人樣しかと御馳走申上い緩怠あつては相成らぬぞ

『さう權柄に申されては此乞食坊主迷惑いたすじや……イヤ御使、御大儀で御座つたのウ

第六十六回

驚いたは引田屋の主人御奉行樣からは御使者が來て格別の御丁寧なる御扱ひ、明日は午過に罷出ると横柄なる返答、公儀にて是程に御接遇なさる和尚樣何でも勝れた名僧に違ひ無い、道理こそ智恩

院の御門主様でも其外の官僧がたでも眼中に置しらんであつた、先づ何は扨置き今宵は疎末ながら當家へ御一泊下さります様に願ひまするとと頻りに乞ひければ、清念これに一泊いたすと此丸山町の長に然らば御厄介次手に宿て貰ひませうか、尤も念の爲じや、清念は内心望む所ゆゑ敢て否まず、知せ其山を奉行所へ申遣して呉いと傳言して下されよと賴み引田屋が主人の饗應に其夜は花月の離亭の靜閑なる一間に足踏延して前後も知らぬ高鼾、明日朝は雀も未だ囀り初めぬ前から飛起て寇間の掃除、何所から見附出して持て來たか草箒を手に取て庭を掃除し井戸端の荷桶に水を汲入れ自から撥いて庭前に水を撒き、夫が濟と荷棒を手に持直して隆々と水車の如くに振廻し腕の力を試し畢りて後に素體に成り井戸の水を汲上ては其釣瓶で頭から十杯餘りも浴び、木綿の白き單衣を打振つて寢衣浴衣と着替へ、板椽の上に胡座をかき眼を閉て默然たる座禪の體。起番の妓夫は此體を見て肝を潰し斯々で御座ると主人に告れば、主人は益々愕いて急に起出で慌て、着服を更め離亭に至り清念が機嫌を伺ひ、御手づからの御掃除は勿體なし何とぞ召使の下男下女等へ都て仰付られ下されます様にと述べたれば、清念はニコ〳〵と顔に笑を含み

『御主人、御念の入た御挨拶じや、扨昨夜は御心入の御饗應で好う安眠の致いた……居室や庭の掃除は坊主の修業と云ふでは無いが、自體この坊主は夫が好ゆゑ道樂と思ふて打遣て置て下され、

さう丁寧にお客取扱にされては愚僧居悪うて甚た迷惑いたすじや……否々我等三度の食事に何一ツ忌嫌も差合も御座らぬ、昨日も申した通り精進でも魚類でも南京人が食ふ豚の臙漬でも南蠻人が好物の牛の旨煮でも何でも彼でも有合の食物を信者が施して下さるなら即ち淨肉じや、悅んで澤山に喰べ申す、やれ何は食ぬの彼は用ひぬと乞食坊主の分際で榮耀すぎた食擇び、此坊主ひどい嫌ひじや程に、臺所の隅に殘てある品が結句有難うて旨う食られる……御主人や御自分に差支が無くば朝飯も御一所に食やう、御内方の衆と一ツ飯櫃で同じ物を食ふと云ふのも坊主がよく云ふ因緣じやらう……さう按過に無川の氣を揉ずとも肌脫で胡座かいて寛々と話し召され、當地の事も何かと聞度また愚僧が面白う無い物語りも致さうで無いか唐竹を割たる如き話し振に、主人は愈々尊敬の想を增して接遇かひたり午すこし過れば、上人樣の御迎として參上仕りましたと案内して昨日來りし手附の役人年寄乙名その外許多の人數にて網代の乘物を釣らせて來り、御支度よくば御奉行の御役邸へと申入たり。清念は主人に向ひて、草履でも足駄でも粗末なのを一足貸て下されと賴み、門口に出來り此狀勢を見て

『ナニ此乘物に乘れいと申さるゝか、そりや止に致さう、我等世に在る古は馬に跨つた事はあつ

たが、生れ落て今日まで曾しか一度も駕籠に乗た事は御座らぬじや此から泰行所までは一またぎの近い路程愚僧歩いて參るが都合でおじやる……ハハア夫ほど駕籠に乗度なら御手前がた我等の名代に乘なと寐なと好な様に致いたが宜い……夫では御主人、一寸長門殿に逢て直に戻ります程に又夕方には緩りとお話いたいて笑ひませうか……是さ是さ左様に各方が附添れては、途中人立が致いて迷惑する、各々方は外の道を參られい我等は一人で裏道を參ると致さう

第六十七回

清念は長崎奉行小笠原長門守に面會なし人拂にて密談に及びたり。長門守は板倉よりの通知にて清念が來意をば既に承知の事なれば切支丹宗門に付き是まで視察に及びたる事ども物語りて、實にも此一儀は大公儀にて御心を勞させ玉へる一大事なれば此上如何いたして然るべき哉余も心痛に堪へ候はず、貴上人の御賢慮伺ひ度こそ候べしとありければ。清念は左して思入たる景色も無く

『總體宗門と申すものは一利一害とて佛法にも免れ難いもの、殊て切支丹の異宗門じやもの利害あるは勿論の事、但し南蠻人等が宗門の爲には一命をも惜まず信心に凝固る所を見れば一概に邪宗門と織田殿豐臣殿の時節の如く之を禁制し改宗せざる者は火刑磔刑獄門の重罪に處すると云ふ手荒い御政治は萬全の長計とは此清念は存じ申さぬ。既に佛法の中にても法然上人が淨土宗を唱へ親鸞上人が一向宗を開き日蓮上人が題目宗を始めた時はソレ邪宗じや異教じやと叡山はじめ諸宗の坊主等か騒立て流罪禁教にも相成たが、今日より見れば是も皆同じ釋迦の教の中で邪宗でも異教でも御座らぬ。切支丹とても其如く數萬人信仰の宗門にて現に南蠻國は切支丹の教にて治まつて居ると云へば其教には何か信仰を繋ぐべき眞實の道理があらうと察しられ申すじやに依て善惡邪正の判斷よりは先づ其宗門の要義を研究いたすが事一、その上にて切支丹は南蠻人には宜しけれど云々の理あるに由て日本人には宜しく無いとか、又其宗義は差支ないが現在渡來の法師等が法の說方が悪いとか、若くは又南蠻人等が切支丹宗門を佃にして斯々の悪謀を運らし日本に害をなす計略ありとか、其等の證據を見屆けて篤と勘考いたすが今日の要務。假令何程の積學高僧でも其邊の極意を見顯すは素より以て容易からぬ事、愚僧原來學問も無く智識も無いが世俗の人情には卿か心得たる事も御座れば、諸事は扨置き切支丹の狀況だけは老後の御奉公に事實の所を見分いたし言上仕り度と江戸表にて申上げ御諚を蒙つて罷下つた次第……

其仔細を詳かに陳述なし滯留中の打合に及びたれば長門守は深く其勞を謝ひて清念が視察に付ては力の及ばん程は便宜を與ふべき旨を約し、次で旅宿幷びに入費の事ども都て奉行所にて取扱ふべし

と言ひたるに清念は之を否みて

『……旅宿とて事々しう設けんな愚僧甚だ好まぬ所まづ唯今の如く花月に滞留いたし、猶都合に由ては他へ宿替いたす事も御座らうが、諸事お撓ひ下さらぬが自分の望……旅費とても其通り、江戸發足の砌り相模殿差圖じやと申して彦坂小刑部より莫大の黄金を渡いたなれど、乞食坊主の道中に用ない事と申して半ば小刑部へ預け置た、京都でも伊賀殿が同じ様に申されたが是以て同様に斷り申した、併し用意はまだ澤山に殘つてあれば證き申たら其時にお貰ひ申さう……餘り度々御面會の申しては諸人みな目を注るに由て肝要の視察が思ふ様に出來申さぬ、以來は所用ある時には愚僧より申上う程に左樣御承知下されい……』

長門守も一々其理に服し、然らば左樣と打合せ頓て齟齬に及び厚く接遇て黒昏ごろに至り清念が辭むをも聞かず許外の地役人家來を供させて送らせたり。其翌日より長崎の御代官村山東安を初め町年寄諸役人等みな夫々の贈物を持參して清念が旅宿せる花月樓に來り安否を訪問し、長門守も亦忍び供にて清念を尋ね參り、虚間は夜に引替て物寂なる花月の門前も宛然市を爲せる如くにて賑ひ合へりけり。其上に奉行よりは町年寄を態々花月に遣して主人に面會せしめ凡そ清念上人の御事は其人數すべて長崎會所にて引受け仕拂ふべければ十分に御馳走いたすべしと内達し、猶も年寄乙名の諸役人が日毎に人來りて主人に逢ひ清念の所用を尋ね少しの不自由無き樣に計ひたれば主人は益々清念を尊びて給仕に他事無りけり

第六十八回

話頭また一轉て、此に車善七は時津の海上暴風雨の中に長崎奉行所の差圖にて追掛け來れる抓手の早船等より打出したる鐵砲の彈に當りて小船の内に仆れし迄は覺えしが其後は更に事のやうすも知らざりけり

人心地つきて眼を開き四邊を見れば、此は南蠻人の住居と見ゆる一間なる寢室の上に横に臥し、我身は白き單衣の筒袖を着用し腰と頭には繃帶を施し、枕頭の高卓には硝子の壜に入たる水藥ども並べ備へたり。其傍に大きなる椅子ありて是に惡れ掛りて書見したる一人の異國人は善七が眼を開きたるを見て靜かに立上り寢室の側に來りて

『やよ日本のお武士、氣が附き召されたか氣分は如何で御座るな

と日本語にて懇切に尋ねたり。善七は更に事の體を解せねば、やをら起上らんとすれど傷所の痛さに心に任せず思はず痛やと聲を發するに、異人は立寄りて

『アイヤ其傷にて起んな無川
と原の如くに横に寐かせ藥を盃に注ぎ手づから善七に飲ませて、信切に介抱なす。善七は伏ながら
に會釋して抑々此所は何地にて貴所樣は何なる人にて在ませば斯も余を御介抱下さるやと問へば。
異人は其儀ならば和殿のお尋なくとも拙者より申述べ又お尋ねも致さねば成らぬ事、しかし今は未
だ其時に非ず、先々少し和殿の元氣を回復しての後の事と一間を立出で頓て淨らかなる皿に盛たる
肉汁の粥に食匕を添て持來り、これを食して空腹を凌がれよと勸め他事なく劬り慰めたり。斯て其
夜は異人の介抱に善七は快く打臥たりけるが翌朝に至り、異人は善七が疵所を藥にて洗ひ再び繃帶
を施し水藥を飲ませ其後また前夜の如く肉汁の粥に魚鳥の肉を少しばかり食はせ、先づ此狀にては
思ひの外に疵所も淺し一命には別條なし、拙者より申述べ又お尋ねも致さねば成らぬ事、しかし今は未
悦びを述べ、更に善七が問に答へて
『先づ此處は長崎に近い平戸にて此は和蘭商館の構内、余が住居、又余は四年以來日本に渡り
て當地に滯留いたすドクトル、スレイデンと申す醫師。扨も三日前の暴風雨に海中より打上たる
海草の中に珍らしき品もあらんと本草研究の爲に是なる商館に用意なせる船に打乘り海上さして
漕出し專ら採草に心を委ねたりしに遙かの沖中に一個の小舟浪に漂ふて流れ來る。人や乘れるか

不審しと川意の望遠鏡を以て見認れば何さま人の乘たる景色。ソレ難船ぞ助けよと舟主を麾まし
其方に乘付て引寄せ見れば紅の血汐に染たる一個の死骸、あな痛はしや助かるべくは助けんと疵
所を見れば腰と頭に二つの彈疵、深手なれども幸ひ炎所は避てあり脈は何にと診へば細きながら
に通ふたり斯と見るより余は命はあるぞ助けよと我船に移し載せ早速の手當を施して其儘船を乘
戻し其手負をば我住居へ舁入させ更に療治を加へし上それなる寢臺に臥せしめたるは是れ一昨夕
の事なりしぞ、斯て手當を施して丹精なせし詮あつて昨日の暮頃に漸と人心地の附たるは和殿の
幸福余の悦び。シテ和殿はそも誰人にて斯る手疵を受られしか、苦しからずばお話しあれ、叶ふ
べくは余も猶此上に御助力申さう
信心面に顯はれて聞ふたりけり、善七よくよく此人を見れば年の齡は五十以上と覺しくて髮髭斑白
ともに半ば霜を帶び鼻高く眼窪みて凡人ならぬ相好、一見して南蠻人とは自から別種の異人と知ら
れたり、斯る信切なる命の親に對して虚言を吐んは心恥かしき業なれど去とて眞實を明さんも疎忽
なりと思ひて
『貴所樣の仰せ承はり手前の一命すでに絕しを助かつたは全く御蔭生々世々の御高恩何と御禮を申
さうか有がたう存じまする、扨手前ことは來島源兵衞と申す大和浪人、身の活計に南蠻の植木を

學ばうと存じ昨年よりして長崎に下り頻りに研究いたせし處、計らずも奉行所の疑を受け彼源兵衛こそは切支丹信仰の者にて内々大坂方に心を通し南蛮人を味方に引入れ大坂と力を合せ關東に敵對の謀計運らす間者なりと見認られ、既に去る十日の夜手前こと時津船に乘つて誅早へ渡る所を海上に待伏なし折しも俄の大風雨その時捕手が打出す鐵砲此身に當ると存せしが其後は更に覺え申さぬに、扨は貴所樣に救はれましたる、御恩は千萬忝う御座ります

と物語つたり

第六十九回

和蘭醫師スレイゲンは善七が物語を聞畢て

『成ほど仔細は夫にて分つたが、和殿員實切支丹でも無く又大阪方の侍でも御座らぬか、斯なつたら詐り隱さず有體に申されい、尤も我等和蘭人は同じ宗旨とは申すでう日本で南蛮と唱ふる葡萄牙西班牙の切支丹とは其教法も異なれば數十年以來互の戰爭止時なし。去ども我等は素より醫師の業體さほど宗旨に心を寄ねば切支丹とは新教として更に善惡の差別も致さぬ。又關東大阪とても其通り、何に向ても恩も無ければ恨も御座らぬ、夫じやに由て心置なう身の上を明されよ、隨分

この後とても御力に成り申さう

『重々の御詞肝に銘じて忝う存じまする、手前こと唯今も申す如く切支丹にも大阪にも全く以て關係の無い身分、然るに右樣の無實の疑ひを蒙りましたは恥入たる次第なれど長崎にてふとした事から交りを結び二世と契つた一個の女、その女に棄てより懸想したるは長崎で一二を爭ふ權威の役人、そのもの手前と女の中を夫と察して嫉妬の遺恨に手前をは女敵なりと附狙ひ、力に及ばぬ所より御奉行へ斯々と讒言いたした次第それ等の事情は何分にも御賢察を下されい

實事しやかに述べければ、異人は打笑ひて東西を隔て、國の境は變れども何地も同じ戀の道、年若な頃には誰しもある習ひ、誠に危ふい事でありしよとて、夫よりしては益々善七を劬りて厄介をぞ成したりける、實にもスレイゲンが云ひつる如き腰と頭の二ケ所の彈疵、少しは骨に掛つたれども幸ひに大切の場所を外れたれば、凡そ二ケ月ばかりの間に幾んど全癒に近きまでに疵も癒かゝりたり、其間にスレイゲンは善七と朝夕物語して其人物を試るに、才智は人に勝れ殊に其心掛も格別にて假初にも野鄙の擧動なければ、大に善七を愛し何かの相談に及びたるに善七の申す所は一々日本の事情に的中すれば遂にはスレイゲンより善七の事を内々商館長スペックスに申立て面會を計らひたり。スペックスも善七の智識あるを感じ、此人こそ和蘭商館の日本貿易には必要の人材なれと見

て取りたれば諸事に付て源兵衛殿〳〵と相談相手に爲し、平戸の役人または日本の商人などへの引合向も大切の事は善七に依托する程になれり

斯て此年の十一月上旬には善七の彈疵も全く癒たりけるが、暫くは身を忍ぶ隱れ家と商館長および醫師が引止るに任せて平戸の商館中に止まり、其間に和蘭語をも少しづゝ習ひ覺え、且つ植木の事は素よりの熱心と云ひスレイゲンは殊に其道の學者なれば是に隨ひて愈々研究の功を積み今は南蠻の植木に掛ては並び無き上手と成たる而已かは木草の學問に於ても恐らく日本には此人に上越す者はあるまじと和蘭人みな舌を巻て其才藝を賞美したりけり。去ども善七は何迄か平戸に止まりて、何とぞ泉州堺へ出帆の和蘭商船に乘せて彼地まで送り届け下されよと切に請ひければ商館長は和蘭商館の用事を手傳ふべき、商館長が頻に引止て將來の事をも計り申すべしと云へるを謝絶打諾て

『夫は何より以て安い事、御身の上にさへ危難ないと思はるゝならば近日の便船に乘せ申さんが、去とは危ないと我等は存じ申す……夫よりは來年の三月は我等並びに醫師共外當地を打立ち將軍家へ拜謁の爲に江戸表へ罷越す積り、尤も將軍家へ獻上の品物數々ある中に尤も珍しいは今度印度より取寄する植木花もの、まう一二ケ月の中には商船にて爪哇より到着の筈なれば、其手當向を御身に賴み度、且つ商賣向に付き江戸にての引合これも同じく依賴し度が源兵衛殿御身の分別如何でおざらうな

との相談に善七は江戸へと聞て內心大に悅こびたるが左も無き體にて

『成ほど其お賴み隨分引受ませうが、江戸表にて表賣向の引合とあつては、是は我等甚だ不向の用事ゆゑ御斷り申上ます

但し植木手當の事だけは及ばずながら急度お引受いたしますが其節は今迄の武士を止め唯尋常の植木屋職人でお供が致し度おざりまする、段々恐しい目に遇て武士には懲々しましたれば職人で一生を送るのが遙に氣樂で宜しう御座りまする

と答へたれば然らばさうと相談を取極て江戸登りの心支度をぞ成したりける

第七十回

扨また淸念は心に尋ぬる善七が近き境の平戸なる和蘭商館に身を潛めたりとは神ならぬ身の更に知らず、何にもして遊女の舞衣に逢ひて事の仔細を詳に聞かんと思ひ、遊女とて何か苦しかるべき何れも是へ呼出され愚僧法の道を說聞せ彼等が罪障の深きをも念佛の功力にて後世安樂の便を得

させ申すべしと引田屋の長に諭したりければ長は大に悦びて、然らば御目通りに差出まする程に有がたい御教化を願ひ奉るとて其事にぞ及びたる。清念は是よりして數の遊女どもを座敷に聚めて教を說くこと、屢々なりけるが、其中にて殊に勝れたる一個の美人ありて眉の間には萬斛の愁を湛へ唇の內には限り無き情を含みつゝ樣に見ゆるが浸々と心を籠て清念の說法を聽聞せり。此女ある日說法畢りて後に靜かに清念に對ひて

『度々の御教化あり難う聽聞いたし賤しい身にも法の道後の世の樂みに現世の憂も辛も因緣と明らめは致しまするが、思ひも寄らぬ濡衣に仇し名を立られて其男は罪科に陷て生死も知れず又其女は其事から退引ならぬ枷に掛り心に染ぬうき難儀これも前世の業では御座りませうが御佛の御惠にて助かる方便は無いものやら、御尋ね申上まする

思ひ入て問ひけるにぞ、清念は扨は此女こそ舞衣ならめと早くも覺つたるが色にも見せずして

『ハテ川竹の流を汲める女性には殊勝な尋ね煩惱の雲來りて月を掩へども菩提の風これを吹拂つて終に眞如の光を見と古の名僧は說き召された、假ひ一旦は濡衣を被せられ男も女も俱に思はぬ難に罹るとも眞實その身に取て犯せる罪なくば神佛などか之を救はせ玉はざらん、但し一たび懺悔すれば極惡無量の罪も滅するとあるなれば人無き處にて其方が懺悔愚僧聞て得させうが心底如何

であるかな

と尋ぬれば、懺悔は素よりの願ひなりとてかの女は諸人退きて後に清念に向ひて妾こそ舞衣と申すもの斯々の事より金吾右近殿に舞を習ひてと前回に述たる善七が村山東安の計略に陷り蘭奢體の名香を焚きしより車善七と云ふこと露顯に及びたる次第を物語りて

『其善七樣の生死も知れず、是と申すも原はと云へば私しが由ない懸想を致したゆゑ……其上に御代官の村山どの、予が心に從ふて落籍を承知し手活の花に成ると云ふなら夫で好し、否と云ふなら大罪人の善七を逐したは其方奉行所の白洲に呼出し水責火責の拷問に掛け白狀さすると酷い威かし、返詞はどうじやと日毎の催促……尤も右近殿の善七樣とは曾しか一度も仇な夢を結んだ事は御座りませぬが見るから否な村山どの情は賣れど心まで賣らぬ勤の傾城を執念深い惡口說、上人樣どうぞお助け成されて下さりませ

其身は原浮田家の武士有松彈正が娘なりと云ふ事まで打明てぞ願ふたる。清念は是にて善七が身の露顯に及びたる次第をも知り得また舞衣が心底をも不便に思ひて

『舞衣女郎よう懺悔召された、其車善七と云へるもの何にも御尋者に相違ないが去とて大惡無道の强盜人殺の罪人では有まい、假令其方が懸想せいでも露顯の時節が到來すれば露顯は致すもの、

敢て其方が致した業では無い、尤も其方の人相に據て察すれば其善七は九死を免れて一生を得いづくの果にか居るなれば、是も終ひには慙悔して今生で罪免さるゝ時があらう、併し其方との契りは承知いたせ……次に其方は天晴忠臣勇士の娘に生れ川竹の憂勤これも前世の業で致し方はないが、去ながら信心だに致しなば村山風情に身を任せずともまた助かること是また其方が相好に顯はれたれば心強う持て信心いたせ

と懇に說諭したり

第七十一回

清念つく〳〵思ふやう、當時車善七の風聞も日數を經るに從ひて漸々薄らぎ行く景色なり、彼善七中々に高運の漢なれば颶風に逢たりとて溺死する仁にあらず何れにか忍び居るべければ何時は我等廻り會ひて眞の敎化を致しやらん、夫に付ても差當りて不便なるは舞衣が身の上、まこと彼女が申す如く善七と譯あらうが無からうが我等に取て搆はぬこと、去ながら彼女唯今の儘に捨置ては村山東安が爲に宿まれ果は戀の叶はぬ遺恨より遂に善七の詮議に波及し所謂死灰を再燃せしむるの恐なきに非ず、旁々以て彼女を救ひ出し長崎を立去しむこそ萬全の計ひなれ。と斯樣に思ひたれば或日

長崎奉行小笠原長門守に面會の砌り『立川藤之丞と申すもの長崎に下り罷在るが彼は何とやらん心許されぬ人物なりと京地にて板倉伊賀守殿の物語り、愚僧御當地に到着いたさば他所ながらに意を注よとの内意、然るに其藤之丞とやらん申すもの更に其沙汰を承はらぬが、最早當地を立去つて御座るかと』問へば、長門守は其立川藤之丞は金吾右近と名乘たる奈良の能役者、當地へ下りし折より一癖あるものと承はり若や大坂の間者にてもあらん乎と存ぜしゆゑ我等より內々書狀を以て伊賀殿へ問合せたれば、伊賀殿には油斷ならぬ人物と見て取り御舞臺人數に差加ふる儀を止られたとの返事、果せる哉其右近の藤之丞こそ不敵の曲者車善七と云ふこと露顯いたし、時津の海上にて召捕の節に味方の鐵砲に打たれ溺死して御座る』と語りたり

清念は是を聞て『成程、世に稀なる閻者待の名香を所持なし爾も人相骨柄御觸達しの善七に符合の上は其もの善七に相違は御座るまい、夫を見顯したは天晴役人の手柄、長門殿急度御褒美の御沙汰仰付られい、シテ又その善七が溺死した證據と申すは』と、問へば。長門守は早船にて捕方の者等追掛て取卷たる時に颶風の俄に起りたる次第を物語りて『其節捕方の者共が携へたるは鐵砲八挺、風雨の中でも火繩を消さず善七目掛て打立て申した。尤も颶風の爲に敵味方とも船に吹散されて物別には成たれど、其翌々日捕方より屆出たる小船の漂着、それぞ正しく善七が時津にて雇入たる渡しの

小舟舟の中は夥しい血汐が波に洗はれても尚ありく〳〵と殘つて御座つた、其上ならず其節の颶風にて此方の早船は屈竟の水主ども六挺立八挺立にて働いてさへ幾度か危難に罹り既に八艘の中で三艘は獲沒いたした程の風雨、剞て善七が乘たる小船は水主は早く海中に蹴落されて善七一人、天狗が參つて手傳ふたらばいざ知らず一人の腕で叶からう筈が無い、殊には其身に受たる鐵砲疵、是じやに山て善七は海中に沈沒したに相違ないと見認め申した』と誇り顏して仔細を語つたり。清念は手を打て夫で立川藤之丞の一埒さつぱりと分り申した、貴所樣より其儀は御申上に相成たらうが、愚僧歸府の途中その趣を伊賀殿へも知らせ拜謁の節に御葬も御座つたら委しう言上も仕るで御座らう、先づ〳〵是にて車善七退治も相濟で恐悅々々……』と長門守の手柄を賞そやしたれば長門守は『御前よろしく』御取成を』と頼みたり

其後また清念は長門守に面會して『扨も過日貴所樣に伺ふたれば車善七鐵砲にて打たれ水死いたしたに相違なく一埒盡く片付たと御意あつたが今以て其連累の者ども御詮議じやと申すが左樣で御座るかな』と問へば。長門守は眉を顰めて『否々左樣の事は曾て御座らぬ、尤も善七水死したに相違は無いが、立川藤之丞又は金吾右近と名乘て徘徊いたせしものは車善七たるに由て見當り候はゞ訴人いたすべし、と念の爲に觸示した、次には右の藤之丞の右近を宿いたし又は懇意した者を一應の手續だけに聞糺しは致させたが、善七ごとき大膽不敵の者が町人や女子供に本名を明し心底を告る樣な事は有う筈が無いに由て無益の吟味は長門守不肖なれども致し申さぬ』と發輝と返答いたしたり

第七十二回

清念は是を聽て深く感心の體を爲し『イヤ流石は音に聞ゆる長州殿、何さま斯樣の土地を御預りあつて支配なさるには左こそ有べき道理じやと、清念悔りながら斜ならず感心いたいた。併し長門殿愚僧が止宿いたし居る花月樓では其右近を招いで遊女どもが仕舞の稽古を致いた事から嚴しい御尋で其家の主人は云ふに及ばず遊女仲居禿下婢手代下男に至るまで今日は又もや御奉行の白洲に引出されて御吟味を受るであらう明日は入牢禁獄に成りはせぬかと酷い心配どうか無實の災難を助るやうに祈禱を仕てくれい加持を致いてくれいと愚僧へ對て內々の賴、承知したとは請合たもの、甚だ以て迷惑いたすが、左樣な事の會慮でも御座つたかのゥ』と辱ぬれば。長門守は少し面色を變て『そりや怪からぬ事を承り申す、長門決して左樣の差圖は致し申さぬ、察する所が町年寄兩組乙名等の地役人が手柄立に川も無い詮議に後の祭の騷を致すので御座らう、我等きつと相達し申す

が。御旅宿の家内どもが決して心配いたさぬ様に御坊よりも御話し成されて宜しからう』と答へたり清念は心中に締たと思ひつゝ『ムゝ貴所様の御計ひ左様であらうと清念推察は致いて居たが、唯今の御一言を承はつては此坊主が加持祈禱より遙かに功力が御座り申すじや……』と益々感服の色を見せて後に

『扨長門殿この清念折入て貴所様に御頼み申したい一儀が御座るじや……サア左様に改つて御辱は此坊主太だ赤面至極……實は愚僧年にも身分にも似合はず懸想いたいた一人の女が御座る……其女は外でも無い引田屋の抱へ遊女で花月樓の舞衣と申すもので、聞ば御當地の御代官村山東安も内々執心じやと申す事だが御奉行職の御威光を以て此坊主の梵妻に仰付られては下さるまいか

ハヽヽア

笑ひながらの頼み。長門守は又しても清念が例の滑稽とは思ひたれど、要こそあらめと思ひ直して

『そりや最安い程のお頼み、僅か遊女一人の身の上、譯も無く計はせ様が、御坊そのお頼は眞實で御座るか

との問に。清念は膝を進めて

『先づ以て御承允下され忝う御座る。然らば清念眞實を申さうが、此程教化の度ごとに彼の舞衣と

申す遊女の體を見るに何やら人に異なつて品格よさ卑止それに面體誰やらに似て居る様に思はるるに由て内々呼寄て素性の尋ね申した所が、御聞下され、浮田家にて武勇の譽を得て關ケ原で兄事な最期を遂た有松彈正の娘で御座つた、其彈正は其昔浪人の折に所々方々の軍場に稼ぎ既に小田原陣の時には大道寺が陣先を借りて敵味方を驚かいた程の手柄もの愚僧も隣陣で宜う見分いたいて天晴の侍大將じやと感心の致いた其後は浮田中納言殿に仕込で愚僧も度々出會申したが悪い主取した因果で遂に討死、そりや武士の當然で何も不思議は御座らぬが、不便なは其娘、彈正が系圖なら相應の武士の女房に成れるのに、此長崎まで流れて來て遊女勤め當人も身の不幸を甚う嘆き申したじや。見ず知らずの者でも不便と見れば助け度が坊主の役目と、申すは表向で實は清念が一つの道樂況て槍持た昔は心安う語り合た有松彈正が娘と聞て見ては打捨て置がたい、成う事なら江戸表へ連歸つて大久保彦左衛門や蜂谷助左衛門とも談合して身の落着を計ふて遣し度ゆゑで御座り申す

と打明て語りたれば長門守は大きに得心して是を承諾して直に其計ひに及びたり

斯て清念は長崎にて越年し切支丹の視察も粗々了りたれは應長十三年の正月に長崎を發ち京都へ出て板倉に面談なし二月下旬に江戸へ歸りたり。但し舞衣は清念より先に長崎を發ち道中は地役人の

某に送られて此正月下旬に安房の富山御堂へ着たりけり

第七十三回

斯て清念は江戸へ歸着し大久保相模守に面會なし其後大御所の御前へ召出され、扨切支丹宗門の儀は其方長崎表にて如何見分いたしたるぞと御尋ある。清念は謹みて彼切支丹宗門の中にもジェスウィツドトミシアン、アウグスタン、フランジスカンの諸派ありて各々其宗義を異にし同じ羅馬大本山の支配に屬すと申すでう日本に來りては法師等が銘々に威勢を爭ひ相互ひに信者を奪ひ取らんとし乱り合候ふ事、切支丹の法師等が南蠻の商人等と申合せ動もすれば宗法の境を放れて王法の中に携はり日本の法度をば妨なさんず勢ある事、切支丹は邪宗と申す程には有りまじきが其の教義の中には日本の人情風俗に合ぬ所の多ければ其の儘に弘めては何分かの害も候ふべしと思はるゝ事ども見聞の次第を言上なして、詮ずる所は切支丹の一儀實に日本國の御安危にも終には拘るべき大事に候ふべしと存じらるれば打捨て置かれんは尤も然る可からず、但し仔細を知らぬ佛法の坊主共や異國の事をも心得ぬ役人共が申すに任せて一概に御禁制と仰出され片端より引捕へて重科に處せられんは是以て甚く人心を激動して或は思はざる外の禍を惹起さんも測り難う候ふなり、其上に又切支丹

宗門の爲に南蠻和蘭其外諸國の交易を毫微させんは日本の損なれば交易と宗門とを引分け次には宗法と王法との境を正されんこと專一なりと思はれ候、是に付ても才智學問世に秀で器量群に勝れたるものを擇び出され南蠻國へ渡海せしめ五六年の程も滯留いたし親しく彼地の人情風俗別しては切支丹宗門の極意を研究せしめられ其上にて篤と賢慮を運らさせ玉ふこと尤も第一の御儀と存じ奉るなり。此儀は我佛尊として而已存じ罷在る諸宗の坊主等には勤まり難き御川筋なり、此清念ごときも年若うて學問才智も候はゞ願ふても相勤め度は候へども力の叶ふ所ならねば假令仰付られ候ふとも御辭退申すの外は候はず、何とぞ御目鏡を以て然るべき仁を御擇び南蠻へ差遣はされ度候ふなりと順序を立て言上に及びたり。大御所は清念の陳述を聞かせられはたと御膝を打ち玉ひて

『清念、切支丹の一儀よう見分して參つた其方が申す所一々道理に至極いたした、既に先年より我等この事を心頭に掛け南蠻の頭人または伴天連どもを近付て樣子を尋ね夫に付て考へ居たる所と其方の了簡全く符合いたしたぞ、此上は其方申立の如く然るべき者を見立て南蠻國へ見分として差遣はすと致すであらう、老年の身にて遠路の役目大儀であつた、寛々休息いたせ

御懇の上意を玉はりければ清念は面目を施して御前を退出す。是よりして相模守は清念をば宗門を奉行の相談役に吹擧せんと申したれども、清念は御川の節は何時にても出仕いたさんが、お役は御免

下されよと只管に辭しければ、去ば其意に任すべしとて清念が望に由り谷中に一宇の庵室を作り清念が俗名に形どりて之を松新庵と名づけ御扶持添て清念に賜はつたり、是れ大久保彦左衛門が肝煎なりとぞ聞えし

住江は是よりして表晴て時々松新庵を音信て善七が身の安否を陰に尋ぬれども、清念は明らさまに之を告知らせず、時津にて風難に過ひ水死したる金森右近は善七殿なりと云ふ說もあれど實否は定ならず但し我等が推察にては何地にか身を潜め居るに違ひ無ければ遠からぬ中に便もあるべしと言ひ慰めたり。住江は心足らぬ事とは思へども氣性なる女なれば我と心を勵まして當途も無き音信を待てるばかりなりけり

扨また舞衣の事は彦左衛門これを傳へ聞て頻りに清念の義氣を感じ、其女早う江戸へ呼寄せ相應の緣談計らはれよと勸むれども清念は之を聽入れず、有松彈正が娘にせよ其身を川竹の流に沈めた女まづ當分は安房の山中に住はせ其心の清めさすが肝心なりとて江戸へは呼寄ざりけり斯て四月に至れば和蘭人參府獻上とは成ぬ

第七十四回

慶長十三年四月三日は此度肥前平戸より參府したる和蘭商館長スペックス醫師スレイゲン其外書記某等を合せて五人の者ども江戸御城御本丸御白書院に於て將軍家（秀忠公）へ拜謁を遂げ定式の獻上物を捧げ、其の後吹上御庭へ召され此にて大御所（家康公）御茶屋に於いて拜謁の上に御自から西洋の話ども聞召され御機嫌斜ならず、中にも和蘭國王には大御所樣殊の外に南蠻諸國の珍木奇草を愛させ玉ふと承り及び瓜哇總督へ別勅を下し凡そ印度地方蘇門答剌海峽幷びに交趾安南等の花木藥草百八十餘種を取集め夫今鉢植に成て獻上いたし當日これを吹上の御庭上に並べ置て台覽に供へ奉りしかば、大御所には御覽ありて殊の外なる御滿悅、醫師スレイゲンに對はせ玉ひて木草の事ども御尋ありければ、此道に於ては名を得たるスレイゲン是は云々の木にて何々の効能ありと一々に言上に及びたり。大御所は欣然として『我植木草物を愛すること敢て花を賞し奇を悅ぶが爲に非ず唐土南蠻其外諸國の藥種を日本に移して普く萬代の便利と成さんが爲なり。然るに和蘭國王には其意を察せられ斯る有益の藥草雜木を集め遠路の海上を渡して進獻せしめられ心入の程近ごろ祝着に存ずるなり、猶年寄等より厚く申入るべきが商館長には其旨相心得て宜しく國王へ言上に及び候へ』と御詞を下されければ、商館長は面目を施して御禮を申上げ退出したりけり

扨も和蘭獻上の鉢植物百八十餘種いづれも世に罕なる品なるに誰して其培養を掌らしむべき和蘭醫

師へ承り置き候らへとの上意に、御庭奉行片山平五右衞門は畏つて直にスレイゲンに面會なし其儀を計りたるにスレイゲンは首を傾けて『右獻上の植物類は大抵熱國の草木なれば日本に於て培養の事隨分容易からず候ふなり、尤も夫等の儀は濱文に申せて獻上物に相添へ差上たれば凡の處は其に て御承知に相成るべきが到底僅か十五日か二十日の滯留中に傳習いたさんは行はれ難う候、併し幸ひ愚老が召連れたる源兵衞と申す日本人は年來その道に達し既に今度の道中にて鉢植の手當すべて其者に致させ候ひしなれば、御直に右の源兵衞へ御談示なされ候ふかた御都合に候ふべし』と答へたり。是に由て片山平五右衞門は和蘭人が召連たる善七の源兵衞を招き寄せ先づ其身元素性を尋ぬるに善七は謹みて

『私し事は常陸三十六家の一つ大崎玄番允殿の家來來島源次右衞門と申すもの、怜にて來島源兵衞と申すもの、去る天正年間に故主大崎殿は佐竹殿の爲に殺害せられ太閤の御下知とあつて所領も都て佐竹殿の物に相成たれば常陸を逐放されて浪人いたし聊の由緣を以て大和國郡上に住居ひ十年前に父母ともに死亡ましたれば夫よりは私し事所々を流浪いたし堺の津にて藥種屋へ丁稚奉公いたして居りましたる中に同所にて和蘭人の小者と成り遂に爪哇に渡り彼地にて藥園の掃除人に抱へられましたる處、性來好の道とて植木藥草の取扱を覺え藥園掛りの醫師の手傳に取立られ本草の事ども少々教を受け長の歲月を送りました。然るに爪哇より平戸へ黑船を仕出すと承り日本の戀しさの餘りに強て乘組を賴み三年以前に平戸へ渡り歸りて更にスレイゲンの門人と相成り專ら本草を研究いたし既に今度和蘭獻上の鉢植もの百八十餘種は同人の差圖に依りて私し取扱ひましたれば何事にもあれ仰付られ次第相勤めまするで御座りませう

眞實かに申立たれば、片山は是を聞て『然らば先づ差向ての處は右獻上鉢植の培養を致すべし』と申渡し日々吹上の御庭へ植木方職人として罷出るやうに成たりけり。善七は彙て心に期する所なれば骨をも惜まず朝より夕に至るまで其培養に心を盡し、爾のみならず御庭中に植られたる唐渡り南蠻渡りの草木ども從來植木職人が培養に困りたるを盡く善七一人にて引受け或は肥料を與へ或は土を入替へなどするに一ッとして意の如くならざるは無く枯かゝりたる木も活込り萎れんとしたるも元氣を復し誠に稀代の技倆なれば、職人等も皆驚きて是ぞ世に云ふ植木の名人なるとて誰いふと無く和蘭源兵衞と異名したり。御城に伺候なせる御醫師だちも是を聞及びて種々の藥草の事を尋ねらるゝに善七は人參の植やうは云々大黃の養ひ方は是々と實地に就て辯明し其博識なる尋常の本草家が及ぶ所に非ざれば何れも舌を卷て恐れを爲し和蘭源兵衞の名は忽に響き渡りて遂に大御所の御聽に達したり

第七十五回

大御所はつくゞと源兵衛が技倆を聞せられ現に其手腕を御覧ぜられたれば深く是を賞し玉ひて、然る上は其源兵衛と申すもの武士に取立て其方の支配と爲し藥園頭を申附よと御庭奉行片山平五右衛門に御詞あり平五右衛門は善七を呼出して

『源兵衛、扨々其方は冥加至極の者じや、忝くも其方の技倆大御所樣の御聽に達し恐多くも其和蘭源兵衛武士に取立て此平五右衛門支配に爲し御藥園頭を申付いとの御詞であるぞ。有がたう心得い

言渡せば善七は平伏して

『蛆虫同前の植木職人僅かの業が大御所樣の御詞に達し武士に御取立て下さりますると は身に餘つた冥加の仕合有がたうは存じまするが大小挿て武家に成ます事は御免を願ひ上まする……サア其理と申しまするは私し父の源次右衛門死亡りましたる時の遺言に『源兵衛其方一生を百姓町人にて送り決して武士に成るな、其仔細は我等父子は大崎殿累代の家人なり佐竹殿には爨應に事寄て常陸三十六家の方々を水戸城に招き欺討の計略に大崎殿はじめを討ち剩へ石田治部少輔に贈賂を贈り太閤の御前を取繕ひ所領を奪ふて我物と成したる恨み生涯忘るべくもあらず、大小腰に挿む時には武士の意地として佐竹殿を故主の仇と附覘ひ一太刀恨までは相成らぬ、是れ其方には出來がたき事なれば寧そ大小を捨て百姓町人と相成るべし』と幕々の申附それ故に武士に成りまするは亡父の遺言に背きますれば此儀は御川捨を願ひ上まする……次に御藥園頭は武士で無うても相勤まらうとの御意に御座りまするが、世俗の診に、帶に短し襷に長しと申す言が御座ります、此源兵衛とても其通り、股引はいて半纏着て耒耜木鋏小刀を手に持て植木職人で居ますればこそヤレ源兵衛ソレ源兵衛と皆の衆に重寶され渡り植木は源兵衛の手の物和蘭源兵衛と言はるゝ程の事はあると評判もされまするが、是が一旦御藥園頭に成て惣體をお預して見る時には唐倭の本草は勿論花卉草木の事は盡く心得て居りませねば御川の御間には合ひません、殊に御藥園と來ては尋常の玩弄に成る花や木とは違ひまして藥種の仕立て御座りますれば餘ッ程の學問が無ては勤まらぬ御役目、近い處が今大路道三樣や岡本玄治樣が好手本、本草に掛ては今日日本中で恐らく御兩方の上に出る博識は御座りますまい、夫でさへ南蠻の植物には御存知の無い品が有ると見えて時々此源兵衛へ御尋に成ことが御座ります、是くらゐ六かしい御藥園どうして私し風情の者に勤むる事が出來ませう、愚でも私しは自分の力丈だけは好う存じて居りますれば此儀は達て御

斷を申上ます。詰りが帶に短い御藥園頭に成て役立ずと言れますよりは襁に長い植木職人で一ばしお役に立ます方が私の望み、上でもお使ひ遊ばして御得であらうと存じまする

詞を盡して述たりければ片山平五右衞門は賞に尤なる申立なりと大に感じ其旨を內々御聽に入れ奉るに、大御所は猶も源兵衞が年齡相好等を聞かせられ小首を傾けさせ玉ひて

『其和蘭源兵衞と申すもの未だ三十前後の若輩ものと申すで無いか、夫に老輩の者も及ばぬ申立やう……常陸三十六家の中に大崎左兵衞尉と申した小名は慥かにあつたが來島源次右衞門と云ふ家人の事は我等曾て聞なかつた、夫程に孤忠を守る忠義の者なら何とか噂が無うては成らぬ理だが……其上に武士に取立らるゝは否じや藥園頭に成るも御免じやと理を盡しての申條、それ程の者が和蘭人の下人に成て植木職人で一生を果さうと申すも不思議、イヤ其和蘭源兵衞、不審を致すに及ばぬ、當人の申すに任せ是まで通りの職人で働かせ置け、次手があつたら其者の面體骨柄我等直々見屆けてくれう

第七十六回

斯て和蘭源兵衞の善七は深く存ずる旨のありければ武士に御取立をも辭み御藥園頭に昇進をも斷り自から好みて植木職人に安じ其頃吹上御庭の御川を承はれる齋藤吉右衞門が染井の住居の圍ひ內なる小さき長屋の一間を借て獨住、渡り植物の培養の爲に吉右衞門が配下の職人と打連て日毎のやうに染井を出て御城に入り吹上御庭にて餘念も無く御預りの植物類に丹誠を盡し其花の喚出で葉の榮ふるを眺めて獨り嗚々するが最上の樂事の如し假ある時は飄然と住居を出て或は神社佛閣を見物し或は書林の門に佇みて本草の古本を搜し求め持歸りては心を潛めて之を讀み實に本草こそ此男が持て生れたる命なれと思はれたり。衣服にも食物にも更に搆はず、何日め毎に吉右衞門より請取れる御手當の錢に少し餘あれば同僚の植木職人等を誘ひて酒を飲み己れは深くも川ひぬくせに諸人が醉て興に入るを悅び都て世事に頓着せぬ擧動に、『成ほど源兵衞は和蘭じや、イヤ和蘭は慾があるが源兵衞は慾も得も知らぬ仙人じや』と、言囃し其仲間にては仙人源兵衞とも綽名し果は『オイ仙人』と呼べば當人も『應』と答ふる樣に成りて吉右衞門は勿論總體の職人みな源兵衞を尊びて是に懷きたれば御庭中の川ひは益々好りけり。或日の事なりしが職人等が打集ひて午飯休の雜談に其一人が『和蘭源兵衞も符交の仙人だが、此箇谷中に御座る淸念上人は源兵衞に劣らぬ仙人だぜ』と云へば又他の一人が『ム、彼坊さんは大符變りの唐變木、聞ば大御所樣の御意に適ひ大寺の御住持に仕て遣うと仰しやツたをソリヤ面倒じやと斷つて彼通り谷中の森の中の庵室で獨り暮しとは本統の仙人に違

ひ無い』夫でも偶には登城して御前に出さつしやる事があるだらうか』どうして〳〵、御宗門御奉行から相談があるに由て來て呉いと御役人衆が御使に往ても、夫も面倒じや會ねば成らぬ川向ならば此方へ御出なさい其方へ出向は御免じやとグヽ云て滅多には參られぬと云ふ事じや『余もさう聞て居る、御城へ上るは嫌で御座ると遠慮も無う口外する大の強者で大久保彦左衛門殿ばかりは仲好で常に往來せらるゝけな『それこそ似たもの夫婦で強者同士の咄が合ての事であらう『どうかして其谷中の松新庵の清念樣と此に居る和蘭源兵衛とを知己にして仙人仲間の出會を見度ものじやのウ……』大笑しての閑話。源兵衛は清念と聞て、是は耳寄の話なりと膝摺寄せ『ム、我等に似て居る變り物が世間にも御座るかな、シテ其清念さんと云ふ方は南蠻坊主でばし在つしやりますか』と問へばナンノ〳〵南蠻坊主の切支丹坊主じや無い、日本人しかも近い頃まで安房の何たら御堂に居た和尚樣と云ふ事じや『和蘭どうじや其坊樣と懇意に成ては、谷中で松新庵と云へば直に其住居は知れるぜ』イヤ日本の坊さんでは詰らぬに由て止に仕ませう、南蠻坊主なら逢て見て本草の事で一いぢめ仕て見るけれど『ハヽヽア、そりやこそ和蘭の仙人が又本草話しを始め掛つた……サア好加減に休んだら仕事に掛らうぜ、吉右衛門殿に見廻りに來られたら又小言だぜ』と言つゝ各々其座を立ち受持の仕事に取掛つたり

第七十七回

善七は計らずも清念の居所を知り獨り熟々思ひけるは『我先頃奈良と長崎より兩度の文通を清念坊に爲たれど　其返詞を得べき方便も無くて打過たり。唯々清念々々と喊したるは安房の清念坊に違ひは無いが、大御所の御意に叶ひて云々と云ふたは意外、殊に大久保彦左衛門と交ると云ふも不思議、シテ見れば彼清念も今は德川方と成られたか、浮と訪問て我と自から陷穽に落んは不覺、さは去ながら住江は何にして居るやらん、女々しきには似れども忘れ難きは妹背の契り、殘には大望の一大事我が心底をも明したる中、我爲には幾潮の艱難をも厭はじ一命をも捨て申すべしと誓ひたる貞女、我本懷を達する優曇華の花咲く時節も最はや近々、責て一期の思出に唯一度の面會を遂る手段は清念坊を賴むの外無し。エ儘よ清念坊が谷中の庵室訪問て見ると決心しやう

同じ江戸に住居ても浮世の塵を避て谷中の庵室の獨住居、御召あれども登城もせず、高貴の招待も更に應ぜず、世捨人の清念坊主不便じやと思召さば口利せいで御置き下されと例も變らぬ強口上、訪來る人の中にて特に賴あるは同氣相求むる大久保彦左衛門と又姪と吹聽したる大奥勤の住江、その

外は近所の百姓衆ばかり、世に時めける武家方や官位の高い出家衆が偶々尋ねて參られるば南向の竹椽に毛脚二本ぬつと出して仰向に寢そべり返りて會釋もせず、『御尋なさる乞食坊主の清念は余で御座るが、腰が痛うて立居が不自由、尾籠の體は御免あれ、生得の不調法で學問もせねば兵法も心得ぬ、昔の事は忘れて了ひ今の世の中は更に存ぜず、捨扶持貰うて三度の飯に命を繋いで死ぬるのを待つ老ぼれもの、何と御聞あつても御答する事が無い、幸ひ此釜に湯が沸てある、焦など勝手に飲で歸しやりませ』と木で鼻を括つたやうな挨拶。『此世の中に嫌ひと云ふては外に無いが、御役人と御出家が大の嫌ひ相手に成と忽に胸が惡うて嘔吐つきさうな氣合がする』と箸にも掛らぬ無法の雜言に事を横に引出す發狂坊主の境涯されば此節世上に評判の高い和閣源兵衛の噂も聞かねば此源兵衛が兼て心に掛つたる事善七猛虎なりと云ふ事を夢にも聞付ざりしは理なり

『是は平戸の源兵衛と申すもの、清念上人樣は御在庵で居らせられまするか、御目通りを願ひ度御座ります』との案内に『その清念上人樣は余じやが、平戸の源兵衛と云はるゝは誰じや、苦しう無い、其の扉明て入しやりませ』と答る聲は紛も無い清念坊『ヤア源兵衛、どう思ふてわせられた、サア是へ上らしやりませ、此は我等一人じや、かう障子明拂ふて四方見晴に致いて置けば立聞さるゝ氣遣は無い、寛りと落着て話の致さう

と數年前富山御堂にての變らぬ實意の面に顯はれたれば善七は稍々安堵の思ひを爲せり。斯て清念は、住江が御本丸に宮仕して今は大御所の御小姓に成りて出頭第一となれる事、箱根の狙撃に仕損じたりと聞き流石の我も打驚き其後兩度の文通に同じ變名に益々御身の上を案じ住江も同樣の思ひを成せる事、彦左衛門に便りて出府なし計らずも大御所に謁し長崎に下りたる事長崎にて御身の素性露顯に及びし始末を聞得たる事、夫より江戸へ歸り此庵室に住居する事、住江も我も倶々御身の上を氣遣ひ居る事ども物語に及びたれば、善七は厚く其の信切を謝して

『御存知の上は兎角包み隱は致し申さぬ、御推量の如く、佐竹殿の國替父の討死、恨み重なる德川殿と無念の一途に箱根の待伏唯一發と覗を定めて打ち申したが仕損じたは德川殿の御高運善七が微運。時津にて其後の危難、既に九死一生の所を思掛なう和閣人に救れて平戸の住居……一部始終を物語りたれども現在吹上御庭へ日毎に入込み居る事だけは清念が知れるや知らざるやを確むる迄はと控へて中々に打明ざりけり。清念は聽了りて

『餘事は差置き、是から御身は江戸へ忍び居らるゝ、御心底で御座らうなと灸所に突入たる一言の尋に。善七胸に徹へたれど此ぞ大事と首うち振て

『イヤ其念頭はまうひたと相止申した、和閣人の意見で強情我慢の善七も頓と發心の致いました、

併し日本に居ては何なる邊に住ひ申しても聞ば聞腹見れば兒腹で凡夫の淺間しさに業が羨ますに由て和蘭人に同伴なし寧そ異國に押渡つて一生を彼地で面白う暮さうと決心の致いたれば近々に平戸へ歸る積りで御座ります

第七十八回

善七が意外の話に清念は甚ど奇異の想を爲して

『フウ思ひも寄らぬ貴殿の思召立ち、日本に居られては腹の虫が納まらぬに由て異國へ往うとの御決心、一應は尤の樣にも聞え申すが、異國じやとて人間の住む境何か御見込でもあつての事で御座るかな

問ひ掛れば善七は更に膝を押進めて

『サア其儀で御座りまする、此善七一旦は武士の意地で意趣辱とか何とか思ひ立ちましたが夫も仕損じて見れば無用の思ひ立ち、假ひ怨が有らうが意恨があらうが日本人が日本人を殺した所で日本國の上から勘定すれば一人でも二人でも死だだけが損に成て少しの得も御座りませぬ、無用と申すは此の事、扨また人界の性を受て此世に生れ出たからには士農工商何にもあれ一ばしの仕

を仕て羽を伸さねば男たる甲斐が御座らぬ、尤も嘉吉應仁このかた元龜天正までの亂世であつたなら戰場の功名手柄で運が好れば强大名にも成り將軍關白に成る事も出來たが今日の太平と相成ては僅か五千石か三千石の小名にも中々以て成ませぬじや。町人百姓とても其通り、何十町歩の田畑山林を持て居る大百姓と申しても、何萬兩の大金を貯へて居る大町人と申しても、南蠻人や和蘭人に比べて見れば高の知れた小さい身代、とても足下へも追付ことでは御座りませぬ。其上に西洋では武士と百姓町人の差別が無くて、誰であらうが智恵と力量の有ものが勝と云ふ面白い國風、運に叶つて時節を得れば國王にも大將軍にも成れる立身、器量を試すに此上も無い世界。日本縱か六十餘州狹い國で身を潛め日蔭者で居やうよりは寧ろ異國で手足を伸し思ふさま働いて兒度と思ひ立たは此の道理。……サア先づ差當つては呂宋澳門廣東交趾暹羅柬埔寨爪哇蘇門答剌滿剌加莫臥兒印度の諸國、金銀珠玉寶の山、現在南蠻では葡萄牙西班牙西洋では英吉利和蘭是等の國々の町人等黑船に乘て大砲備へ、萬里に餘る海上を押渡つて國々を攻取り己れの領分にして國王同樣の威勢、それに何ぞや日本は僅か五百里か千里に足らぬ近い處でありながら御朱印船の町人任せ、少しばかりの出交易で、兒すく近所の寶の山を南蠻人や和蘭に取らせて指はず捨置くとは實に殘念至極で御座るじや……先年原田孫四郎と申したもの呂宋に久しう住居いたし、太

閣殿下へ書面を捧げ、早う御旗差向られい拙者御案内の申上て呂宋其外近島近國御退治あつて日本の御領に附させ玉へと御勧の致いた事も御座つたと承はりましたが朝鮮陣に埒明いで其中に太閣殿下御他界なつて原田が望みも水の泡殘り惜い事じやとは思されぬか……夫れ故に善七決心き め御暇乞の爲に身を忍んで罷出た……夫に就ても住江が事は當人の望み次第、異國へ同道せうと申さば勿論召連れて參る所存、また否じやと申さば夫も當人の心任、善七別に存寄とては御座りませぬ……尤も當所より堺の津まで陸路を參り同所にて和蘭船に乘移り平戸へ着て支度を整へ更に便船の相待て爪哇へ參る心組、和蘭人とも相談いたして御座りまする

爽かにこそ述たりけれ。清念は善七が申す所虚實如何と知らねども差當つては一理ある思ひ立なれば

『成程承はつて見れば勇しい思召立ち……實は我等も貴殿に對ひ、急度所存の申し述べ聞入なくば斯と覺悟を極た儀も御座つたが、異國行と御決心の上は別に何も申すまい……シテ何日頃に出立召れますな……一日も早い方が宜とは御尤も、若し見咎られては詮ない事……宜しう御座る、然らば今日より三日の後、十五日の晝過に御入來なされい、住江どの呼寄せ置て遣せませう……よ ッ身の用心なされい……

第七十九回

茶屋つぢの五尺振袖で桃色麻の下襲、三寸幅の唐織物の帶を胸高に結び、薄もの、被衣の上に黒塗の市女笠を冠り、若替の衣服と卿の土産物とを一包にして供の仲間に背負せ、朝涼の中にと道を急ぎて谷中の松新庵さして來れるは例の住江なり。衣服に綺羅は張らねども凛としたる姿は言はでも知き大奥勤の御小姓姿、笠の中のゆかしさに往來の者が我知らず覗き込み振返りて後姿を見送るも理なりけり

清念は住江が入來れるを見て

『ヤッ住御前、大さう早くおじやり申したのウ、迎の手紙出たは少し手間取る川事じやが、御身の都合はどうであるな

『ハイ御老女を以て願ひ上ましたれば、清念坊の迎ひとならば緩りと逢て參れと有がたい上意、七ッ（午後四時過）のお締までに歸れば宜しいので御座ります

『左樣か、然らば供の下部衆をば夫までは……

『承知いたしました

住江は懐中より小粒の銀子を一つ取出して仲間に與へ是にて緩々支度いたし七つ前には迎ひに來るべしと言付て出し遣り、包の中より御城土産どもも取出して清念に差出し日頃の疎遠を詫び、互に機嫌の能を悦びなどして後に、扨『わざ〳〵私しを召されましたは』と問へば。清念は聲を低めて

『住どの、惚りしては成らぬぞ、善七殿が平戸から頃日江戸へ來られて尋ねて參られた

『エ、上人樣、そりや眞實まことで御座りまするか

『信も信ずいと眞實、しかも今日午飯食と是へ來られる筈じやに依て、御身に會せうと思ふて迎ひの手紙を進ぜたじや

『それで善七殿は無事で御座りまするか……有がたう御座ります

待に待たる夫の音信今日面會ときくまゝに嬉し涙を兩眼に泛べ、兩の掌を合せて拜みたるも道理なり。清念は善七が海上にて和蘭人に命を救はれてより其門弟と成りて名を來島源兵衞と改め近々に南蠻に押渡る所存を決たる山を物語りたるに、住江は聞毎に且は愕き且は悦びつゝ、心中にて『ハテ不思議の事を聞ものかな、此程より平戸から參つた和蘭源兵衞と云ふ植木職人は和蘭人の門弟で渡り植物の名人本草の巧者で吹上御庭へ毎日罷り出で培養御用を勤めて居るとの噂、あれも源兵衞これも源兵衞どちらも同じ和蘭人の弟子、若や夫にはあらぬか』とはたと思ひ當りしかども口にも出さず、靜かに清念が話しの了るを待たるに。清念は

『……サア右の通りじやに山て、御身の事は御身の心任せ、南蠻へ一所に往うとならば勿論同道の致さう、夫は否で日本に居やうとならば其分に致さうと善七殿の申分じやが、御身はどうさしやり申すな

『そりや、善七殿が同道してくれうと申されますなら南蠻の異國は愚か、地獄の奥までも一所に參る覺悟で御座りますが、其南蠻行は眞實で御座りませうか

合點ゆかざる不審の體。清念も同じ思ひなれば

『サア其が余も内々甚だ不安に思ふて居るじや。御身は何と思ふて居らるゝな

『左樣で御座ります。貴僧にさへお分が無いもの、どうして女の私しに分りませう

『さうで御座らう。然らば余が考へて居る所を一通り話さうが、住御前、惡う思ひ取ては成りませぬぞ。そも彼善七どの、心中の奥底を兎の毛ほども我等に明さず我等も亦曾て聞うとも致さなんだが、亡父御の敵故主の恨と思ひ込で德川殿を覗はうと云ふ心底じやと云ふはと、此清念最初つから覗んで居たが、箱根の一件果して其通りで有た。此一念は今日以て中々去りは仕まひと推察するが、御身は何と思はしやるな

第八十回

住江は此一語宛然胸に五寸釘を打たれたる如き念を成たれども愕ける色をも見せで

『サア善七殿その事ばかりは初から私しへも明されませず、心願の筋があつて諸國を修行するに由て御身は斯々と申されましたは貴僧も富山で御存知の通り、其後箱根で大それた善七殿の謀反、聞て恟り肝が潰れて御座ります、併し南蠻行の思立ち改心した故じやと貴僧へ申されますからは夫に相違は無からうう歟とも思はれます

包めど心の憂思ひ自づと顔に顯はれたり。清念は打諾いて

『何樣さう歟は知れぬが、余が見た所では何分眞實心とは請取れぬ樣じや。住御前御身は女性でも才智分別善七殿にも劣らぬ程の發明、我等今改めて申すこと心を靜めて宜う聞て下され。抑々車善七が恐多くも大御所をば主親の讐じやと存じ込で御命を賜らうと思ひ居ること是第一の心得違ひ、御身も知ての如く我等原は小田原の武士、德川殿に微塵の恩も無ければ佐竹殿に聊かの怨も無い、何方に偏より贔負すらでは無いが、佐竹殿の滅高國替こりや佐竹殿が二半の心底よりして言ば自から招ぐの禍ひ、天下の政道を糺す德川殿、常陸五十萬石を沒收て秋田二十萬石に成れた

は當然の沙汰、佐竹殿とて自業自得と明らめねば相成らぬ理由、尤も車丹波守これを無念に思つて水戸の一揆を起いたは武士の意地、我等あへて一慨に悪いとは申さぬが、軍に負て討死とげたら夫迄の運命と初よりの覺悟、それを悴の善七が親の敵と存じ居とは見當の違ふた了簡、夫も眞實親の敵と思ふなら、武士の意地づく、なぜ百騎なり二百騎なり同心の輩を聚めて會稽の旅上は致さぬ道中に待伏して飛道具で覘ふたとは、此清念の眼で見れば氣の毒ながら鄙怯の擧動。其次には意趣があらうが遺恨があらうが惣別人を暗打に致すと云こと、人間として致すべき事で無い、余が坊主じやに由て佛臭い事を云ふでは無が、坊主じやらうが俗人じやらうが殺生戒は守らねば成らぬ事、凡そ善悪の裁斷は治まる世では政道たゞす政所の沙汰、その沙汰が間違ふて居るが爲に我が憤慨の霽る捌が無くば是非が無い、其時こそは武士の意地斯々是々の次第ゆゑ打果すと立派に名乘かけ運に任せて勝負を決するが眞の武士然るに善七それは致さいで暗打せうとは武士の本意に背くの道理、父上の丹波守も草葉の陰で、よも孝心とは思はれまいシテ見れば善七の心得は孝に似て實は不孝と申さねば相成らぬ、其次は大御所家康公の御事、住御前、御身は朝夕お側に侍いて居てじやが何と思はるゝな、我等お見受け申す所では實に日本の聖人當代の名君と申すは此君と存じ申す、勿論一から十まで善事ばかりは御座るまい、我等が目にも如何と見ゆる儀

もあるが夫は格別として、兎にも角にも今日此君が御座らいでは、日本六十餘州は再び亂れて軍の衢と相成るは鏡に掛て觀るがごとしじや、假令大御所へ對して私しの怨があればとて、天下の爲と存じたらば、此君の御安泰を祈らねば成るまい、然るを善七この君を附魂ひ愈々本意を達し た曉に日本が亂世と相成るを如何は致す所存であるか、夫をも揃はぬと申さば是れ私しの恨に天下を願みぬと申すもの。既に佛經にも世に四恩あり主君の恩父母の恩天地の恩衆生の恩これなりと說かれた、然るに善七もし大御所の御命を賜る時は此四恩に盡く背くの道理、今こそ我等が心底言て聞すが、去年長崎へ下つたも、善七に逢て此道理を說聞せ、改心すれば重疊、改心せぬと申張たら我等も松岡新兵衞入道清念じや、一殺多生の極意を以て善七と立合て、不便なれども彼が一命申受うと存じて參つたが、面會せいで其儘に立歸つた。幸ひに今度善七江戶へ參り今日午頃これへ參る約束なれば、清念きつと申し談ずるが、先づ聞度は御身が所存、夫善七に隨つて邪に與するか、但し我等が申す所を尤と存じて正理に與するか、善惡邪正の境、住御前、分別聞う會に無き清念が兩眼に淚を泛べて問ひたりけり

第八十一回

初めて聞たる清念が決心住江は首を低て淚に暮たるが顏を揚て

『貴僧の思召し好う承はつて分りました。仰せの通り大御所樣は神樣とも佛樣とも申上やうの無い御方樣、それを仇敵と覗ひましては天道樣にも背く道理と私しも常から思ふて居りますれば失禮ながら貴僧の思召しと同じ事、善七殿が箱根の一埒、その心底は分りませんが、御存知どほりの氣質ゆゑ、親の敵と一筋に思ひ詰め大それた巧をされたので御座りませう併し夫も貴僧へ對して、まう思ひ切た改心したと申されましたからは、よもや嘘僞りでは有ますまい、又假初にも左樣な事で裏表の口上を申す人では御座りませぬ……

『ム、余も左樣じやらうとは思ふけれど、武士たるものが一旦かうと思ひ詰ては、さう容易う改心が出來るものでは無いが詞の端々我等が腑に落ぬ廉もあるに由て、其場で得と御意得やうかと存じたが、當人すでに改心いたしたと言るゝのに押詰て心底たしかむるも餘りの無禮、その上に同じうは御身の面前で意見の加へやうと思ふて控へて其日は歸し申した、今日こそ幸ひの折から三人三ツ金輪の所で清念心底殘る所なう善七殿へ申聞る所存じや。住御前、御身まこと其心底なら倶々善七殿を諫め、叶はざる其時は一命捨ても夫の心を翻さする貞女の節操を立て召されい。どうでも斯でも一度は死なねば成ぬ命、人間緩か五十年、この清念見

たやうに川も無のいに八十近うまで役足ず で生て居るもあり又二十前後の盛の花を嵐に散して世に惜まるゝ人もある、皆是前世から持て生れた因緣じや。余が一命捨て大御所様が御無難で善七殿が正道に歸らしやれば此上も無い天下の幸福、住御前、さうとは思はつしやらぬか理非を說て決心を示したる淸念が詞に。住江は落る涙を拭ひて

『重ね〳〵の思召し、御親切の程身に浸て有がたう存じまするが、御坊様、善七殿は御存知がけれまする通りの氣象、貴僧の思召の深いのは心で承知は仕て居ながらも互ひに詞の行掛り、退引ならね張合に、折角の御信切、無に成やうな事であつては、取て返し成らぬ大事、それが誠に案じられます……モシ叔父上様、御坊様、この住江御不便じやと思召すなら善七殿への其御意見、私しへお任なされて下さりませ、女でこそあれ私しも武士の娘、大事な御主様と夫の身に掛る一大事、どちらへも過失の無やうに命に掛て意見を爲し忠義も貞操も兩とも立て御覽に入れませう。夫までは御坊様、この住へお任せ成されて下さりませ、御願ひ申上まする

誠心面に顯はれて述たれば。淸念ははたと膝を打て

『ムヽ申された、住御前、然らば善七殿へ意見の一儀、御身に任せた、後刻善七殿參られたら得と心底聞糺し決心の奥底を確められい……夫にしても午餉の支度……ハテ何をがな住どのに馳走の致し度が……午飯食いでは誰だつて腹が減り申すは……イヤ飯も菜も此にあり申した、住どの、時刻が參つたら勝手に午餉聞し召されい。

『それで貴僧は何處へお出なされまする

『サア別に參らねば成らぬ用事も無いが、我等これに居て善七殿に面會すれば否でも應でも是非の返答聞ひ詰ねば相成らぬじや、然る時には御身が苦心貞女の操も水の泡に成うも知れぬ……任せると云たからは他まで任せる……善七殿得心されても、されいでも、其返事は我等午後よい頃に歸つて御身から聞う……緩りと仕て待てお居やれ

辭殘して庵室を出立たり

第八十二回

年ごろ日ごろの積る話しに、互に其過去の愛事も聞もし聞せもして其艱難を噺し慰めたりしが、住江は話の尾に就て

『……では此節大奥までも噂のある和蘭源兵衛と云ふ平戸から來た植木師、善七どの、御身樣で御座りますな

『和蘭源兵衛は何にも我等じや、平戸の和蘭商館長が献上参府の供に成り舶來植物の培養功者を言立て、ヤット吹上の御庭へ職人と成て日ごとに入込むやうに成たが仕合、車善七猛虎が年月つもる胸の鬱憤亡父上の修羅の妄執一擧に霽すは今この時、御庭傳ひの奥の通路、御寐殿の御休息その案内も寄々に善七得と見届け置た、此上は機を覗ひ本望を達する計り。住江、兼て夫婦が心を合せ朕し置たは今の爲、和御前が大奥の宮仕、願ふても無い好い幸ひ、夜に入なば家康が寐所の案内いたして呉い、彼の白髪首申受け御兩親の御恨を慰め申す時節到來、住江、和御前が前年別れた時は弓矢八幡聖觀音神佛を證人に誓ふた詞、忘ては居られまいな

思ひ詰めたる一途の決心、無念の遺恨は話の中より血走つたる兩眼の異彩に夫と顯はれたり。住江は扨はと心に慓きて

『ム、夫では善七様、我等はさつぱり改心して是迄の望を思切り住江つれて南蛮へ渡らうと清念様へ仰しやつたは虚言で御座りますか

『オ、何にも虚言じや。清念とて家康殿に心を寄する法師、唯今も話し致いた様名の北兄藤左衛門や駿府の朝比奈三郎兵衛と品こそ變れ歸する所は同じ人物、何で浮と心底を明さうや、訴人の恐を存じたゆゑ、日本を立退て一生を異國に送る所存じやと詞巧に欺いたは當座の方便、命を的に大望を思ひ立ち千辛萬苦を厭はぬ善七、何で異國に押渡り、おめ〳〵と一命を長らへやうぞ、愚な事を

『スリヤ彼の律義な清念様を御身様は詞巧に欺いたと御意なされますか

『サア僞り虚言は武士たるものが假初にも恥る所なれども一身の大望には易られぬ罪も恥辱も冥土に於て詫言いたすと觀念なし清念までも欺し申した

『イエ〳〵所が氣敏い清念様、欺されたは扨置て、御身様が南蛮へ渡らうと御意あつたは方便の虚言まことは大御所様を覗はう爲に此江戸へはお出に成たと云ふ事、心底見抜て居られますぞ

へ

『エ、其秘密、清念見抜て居ると申すか

『何にもさうで御座りまする……

住江は今しも清念が眞實心の信切より善七の身を氣遣ひて理を分て申し聞せたる意見の趣意がら詞の端に至るまで一部始終を落も無く說出し『兎も角も其御意見の取次を此住江へお任せ下さりませ』と望みたれば清念も然らば其意に任せんと承諾して故と善七が來らぬ前に面會を外して出行たる事を物語りければ。有繋の善七も心中に愕きて『先頃は京都にて板倉伊賀守と云ひ今また當地に

ては清念と云ひ能も我胴中を察したるものかな、何なれば徳川殿味力には斯までも智勇備りつる人々の多かるぞ、況て家康殿は音に聞ゆる名大将一目見ては其心底を察し一言聞ては其蔵腑を知ると云はるゝ方なれば和蘭源兵衛と名乗たる我等をば怪しの者と早疾に覚られんも知り難し左ある時には善七が本望も首尾よう達せんこと覚束なし、同じ月日の下に生れ此善七が運命の斯も拙きものなるか』と鐵石に比しき剛の心も弱りてや両の腕を叉組みて暫し黙然として居たりけり

第八十三回

稍姑くありて善七は大息を吐て

『清念坊の申された所は尤も至極の道理じや、少しも無理とは思ひ申さぬ、それ存じながらこの善七が斷念する事も出来いで此通り今以て心頭を惱し居るとは能々の因果じやと我身で我に愛想も盡るが……夫に付ても住どの、和御前は何と思ふて居るぞ、御身の考はどうで御座るのウ氣力も無げに問掛れば。住江は少し進寄て

『さうお尋ねに成りますなら、足はぬ女の了簡なれど思ふ程を申ませうが、私しは清念様の仰しやる通りの御意見にお就なすつて恐しい御望は思切てお止なさるが宜しからうと存じまする。今更私しが申さずとも貴君は宜う御存知で御座りませう、恐れながら大御所様と申す御方は夫はく日本に稀な明君、御慈悲も御情も厚い將軍様、すでに先頃『大逆人の車善七長崎を逃出で時津の海上にて召捕の折から颶風に逢て船は散々、死骸は全く知れませぬが、鐵砲疵は確かに受たり、海中にて溺死いたしたに相違なからうと存じ奉る』と注進のあつた時に、大御所様は御聞あそばして『ムヽ火の車の怖の善七水死したであらうと申すか、彼奴不敵の曲者なれど肝魂の据つた若もの、改心させて我等家來に致し召仕はうと思ふて居たに、惜い事を致いたのウ』と大久保相模守殿へ仰あつたと申す事を其節傳へ聞た事も御座ります。夫ほど大氣の大御所様それを敵と附覗ふは勿體ないと私しは存じまする、尤も佐竹様の御國替、父上様の（車丹波守）御討死、郎君の御無念は御尤では御座りまするが、是と申すも軍の習ひで是非ない次第。今しがたも清念様の仰しやつた通り夫を遺恨に深く思ひ大御所様の御命をお縮め申す事があつては日本の大亂取返しの成ぬ大事。郎君の御鬱憤は道方なうも有ませうが、此日本に御居なさるがお否なら南蛮へなり異國へなり何地までも私しがお供を致しますから程に此御思立ばつかりは、思ひ止つて下さりませ眞實の涙は兩眼より濺ぎ出て血を流さぬ計りにて掻口説たる貞節心。善七も涙に暮て

『宜う分つた、和御前の貞節赤心の意見、善七悪う思ふ所か、嬉しう聞て感心の致いた。そも大御

所の御事な、御身や清念坊が申す迄も無い、日本の明君仁義の大將と申す事は我等よッく存知て罷在る。ヲヽ、世が世であるなら斯ろ明君に事へて忠義を覩んで見ろならば是ぞ誠に武士の本懐であらうのに儘ならぬが浮世じやと我等ひそかに嘆息いたいたは幾百度か數も知れぬ。又この明君の御命を申受ては日本六十餘州再び原の亂世と成ろであらう、寧の事に思ひ切り、和蘭人と同船なして異國に渡り思ふ存分働いて立身出世に生涯を榮耀榮華に送らう歟と思ひ立た事もある。去ながら忘れ難いは父上の御最後臨終の砌に仰せ置れた御一言、それ皆いては善七が命に掛た忠義と孝行二つともに打棄て犬畜生と同じやうな淺ましい境界に一生心を落さねば相成らぬ。先年水戸にて那珂川畔の合戰に親の最期を後にして惜からぬ命を惜み戰場を切抜て其以來今日まで彼方に隱れ此に忍び此通りの姿にまで躬を窶したは何の爲、畢竟は本望を達さう爲の苦辛で無いか。御身とても其如く、我等に別れて他人の中辛い苦しい御城奉公。これ皆我等と二人同體本望とけたら諸共に死で未來で一ッ蓮と誓ふた故であらうがな。古い唐土の諺に桀が犬は堯に吠ると云ふ詞がある、善惡理非は知ては居れど、心に定めた初一念通し貫が男の意地それも即ち忠義の爲、住御前、悪い夫を持たが因果と明らめて善七が本望遂させてくれい、是計りは我等が賴じや男泣して賴みたり

第八十四回

壯夫が思ひ箱だる初一念、貫かでは有るべきと精神の透る所は是非邪正を顧ざる善七が詞に。住江は心中の悲み骗堺して

『其思召は御尤では御座りまするが、現在世の爲人の爲、悪いと御悟り有ながら、猶も御心替られず、勿體ない大御所樣の御命縮め申さうとの御大望、どうして夫を私しが御手引の成ませう。清念樣の御意見が道理じやと仰しやるなら、是ばかりは善七樣思ひ止まり下さりませ……』

涙ほろ〳〵理由盡して諫むるにぞ。善七は面色替て怒り聲の最鋭く

『扨こそ、住江、其方は彼古狸の家康が縄の恩義に絆されて誓の詞を忘れたよな。女なれども吉見が娘車の婦、賴もしい女房と一途に思ひ、誰にも告ぬ一大事其方に計り打明し、此長の歳月を倶に辛苦と思ふたに、いざや時節の到來し待に待たる天津風年ごろ胸の浮雲を吹拂ふべき時なるに此期に至つて變心なし我大望を妨ぐる取るに足らざる意見だて、……扨こそ其方命惜しさの未練が起り卑怯の心に相成つたか……さうで無くば善七を不忠不孝の人非人に致さうと思ふてか……エ、此場で其方自害の致いて、さうで無い心底を我等に見せうと……其自害ぐらゐで初一念翻

へす善七じやと存じ居るか夫れ程の弱い心底なら信切厚い清念に嘘偽は申さぬぞ、人を欺き恩義を棄て世に背いても忠孝に命惜まぬ此善七妻に引るゝ、男で無いぞ……實其方この善七が思ひ立ち餘まで悪いと思ふなら是々斯と清念へも告げ知らせ家康に訴人の致せ、大義に親を滅するは世にある習ひ、むだな自害の犬死に比べて見れば遙かに勝つた一つの忠義……サア夫が成らずば、善七が不倶戴天の本望を達する助に手引をするか……たとひ其方が手引をせいでも、家康が寢殿の案内の凡そは知た此善七、吹上からの庭傳ひ、一日散に研込で打つ打たるゝは時の運、……イヤ待たぬ猶豫はせぬ今日にも研込む決心、いツかな少しも翻がへさぬ……主人と思ふ家康へ忠義立して夫へ貞女の操を捨るか……但し夫へ貞節盡して家康討すか……生死を倶にし夫婦一體二世と誓ふた詞に背くか……住江、心を定めて返答せい……返答せずば、まう是迄、住江よう家康に忠義せい此世は愚か未來でも面會は致さぬぞ

詞烈しく言捨て、すツくと立つを。住江は暫しと裾ひき止て

『お待なされ善七樣。夫程の御決心とある上は御意見がましい言は申しますまい。善にもあれ悪にもあれ夫に附が女の道……何にも郎君を私しが手引いたして大御所樣物の見事に討せませう……きつと討せて見せませう……ハテ何が偽り、女でこそあれ車善七虎猛殿が妻の住江、夫に犬死さす樣な婦御前では御座りませぬその代りには來來では……

『來來迄も素より夫婦、夫でこそ善七が妻、原の座に復りて細々の打語らひ猶も、手筈定めて後に

住江は

『……それじやに由て、清念樣へお會あそばしては何かに不都合、お名殘惜うは御座りますが清念樣の御歸り無いうち

『何樣この庵室を去ると致さう……夫では住御前、慥に今月廿日の夜に

『私しが御夜詰の番、きつと合圖の御手水口で……とは言ものゝ是が此世でお顏の見納め

『來來でゆるりと住江どの

有繋に猛き武士も夫婦の愛情この世の別れに鐵石の腸も斷る計りなり、況て女の住江が心中の悲しさは詞にも筆にも盡されず

清念が歸りては住江が苦心も水の泡と、善七は思ひ切て松新庵を出去たり。住江は暫らく後を見送りて涙に暮れて打伏したりけりるが、弱る心を取直して『我この所に居て清念坊の歸りを待たば却て心の底を悟らるゝ事もあらん、寧そ早う去には若じ』と思ひ定め机の上の硯箱引寄せ懐中の畳紙とり出して仰せの事は能々行屆きて候へば御心安う思召し玉はり候ふべく候』と辭短に書殘し置き、

折よくも仲間が迎ひに來れるを幸ひに出で御本丸へと足早に歸りたり。後に淸念は歸り來りて住江が殘したる手簡を見て『はてな』と首傾けて思ひ入たりけり

第八十五回

『高の知れた一株の松、我等あへて執心深う惜むでは無いが、此松は其昔安祥殿が（淸康）松平の家末長う繁昌せよと千歲祝ふて岡崎の城中で手づから御植なされた樹、その後我等濱松へ居城を移した時に根こぎに致いて濱松の庭へ移し植たに年を經て益々の繁茂、夫よりして又この江戸へ城替した折に持て參つて此庭に植置たが枝葉を延して愈々 成木この通りの大樹に相成つた、然るに當節に至つてメキと衰へ枯掛つたは我家の不吉、但し天道わが運命の衰微をば示させ玉ふ兆である歟、何にも致せ御先祖の御手植、手の屆く程は盡させて見い

と大御所の御沙汰、個程に御山緖ある松の大樹、枯しては相成らぬと御庭奉行の片山平五右衞門は日頃御川を承はれる植木職方の棟梁肝煎どもを召集め頻に其培養に心力を竭したり。去ども少しも其効無く大切の御松は日を追て次第に衰へ行さまなれば、奉行も職方も大きに心を痛め首を鳩めて色々と評議を凝したるに、御川達の齋藤吉右衞門は進み出て『此通り私共の仲間の者が一同に丹誠を竭して見ても手當の屆かぬ此御松この上は和蘭源兵衞を召て御尋に成ては如何で御座りませう。彼漢は舶來植木が本業では御座りますが、本草が功者で中々此道の學者ゟも又變つた考案が有かも知れませんから、左樣願ひ度おざりまする』申立れば。奉行も『實に尤も和蘭源兵衞とは余も心附なかつた、夫では早う源兵衞を呼出せ』と沙汰したり。仕て居たりけるが御奉行樣の御召と云ふに、何事やらんと急ぎ其前に出て、御川如何と跼蹐つて伺へば奉行は御庭前の御松斯々の次第と語りて、其方何とか治の工夫は無いかとの尋ね。善七は彼の松を上を下へと哲く眺めて頓て奉行の前に立戻りて

『御沙汰の御松を篤と拜見いたしましたがコリヤ何でも一種非變つた蟲が葉の根に附て一面に蔓つたもので無いかと思はれまして、兎も角も御松の上へ登つて見分が致し度御座ります

『然らば左樣いたして見い

『畏りましたそれじやア、棟梁、證據の爲だ、お前さんも私と一同に登つて見ておくんなさいまし

吉右衞門倶々階子を掛て登つて見れば、詞に違はず蟲は一面に蔓つたり。吉右衞門は其蟲の附たる小枝を折て奉行の前に持來りて何にも和蘭源兵衞が申した通り如此くに見慣ぬ蟲が一面に附て居りまする』と示したれば。奉行も源兵衞が博識に感じて『ム、流石は源兵衞じや、其方の眼力には此

奉行も感心の致いた。シテ此蟲を退治して御松を活す方法があるか』との尋ね。に善七は手拭もて額の汗を拭て

『サア無い事は御座りませんが隨分に六かしい手入。先づ和蘭一流蟲殺の粉藥を拵えて松の藥の根元に附け、とても附け切れぬ位に蔓つて居る所は其枝を卸して蟲の種が殘らぬやうに燒捨て、夫が濟でから養を致しますれば、十に八九は原の通りに勢づきまするは恐ながら源兵衛きつと御受合申上ますると答ふるにぞ。奉行は大きに悦びて

『然らば其趣を言上いたすが、左樣いたせと御諚が下つた其節は。源兵衛其方きつと骨折て手當いたすか

『そりや御用で御座りますもの、一生掛命で骨折で御座ります

依て奉行より此段を言上したりければ。大御所には『和蘭源兵衛が左やう受合と申すなら手當いたさせい』との御沙汰。奉行は是を善七に傳へ、首尾よく御松生返りなば御褒美の品も下さる間、十分に力を入れて手當せよと達したれば、善七は畏りましたと直に藥を調へ松の枝に祭上りて藥を與へ或は藥を去り或は枝を挾み手入に餘念ぞ無かりける

第八十六回

扨も大御所家康公は和蘭源兵衛が身の素性および御登用を訝みて船來植物の職人の儘にて居らんと望める山を聞し召れたる時より怪しの者と思されしに、今また御秘藏の御松を源兵衛引受て手當いたすと御聽ありて益々異みを成たまひ、其源兵衛とは何なる相好の者なるか面體親しく見屆くれうと思召され、善七の源兵衛が御松の手入の命を承はりてより第三日、即ち慶長十三年八月十九日と云ふに午後の御徒然を慰さませ玉ふべしとて御座間を出でさせ御小姓衆御小納戸衆五六人御供に具せられ吹上の御庭へと成らせ玉ふ。御庭奉行は斯と見奉りて地上に蹲踞りて迎へ參らせたれば、大御所には御機嫌麗しく御庭を彼方此方と歩ませられ『源兵衛とやらん申す職人が手當いたす松樹は如何相成たぞ、我等自分に見分せう』との御諚、奉行は畏つて、此三日以來かやう〳〵に致し居る旨を申上げ、御先導に立ち御松の近くに立止りて『大御所樣の出御なるぞ、源兵衛、疾々地に下よ』と差圖なすを、大御所は

『否々、松の枝に登つて手入最中、下るに及ばぬ、夫に居い〳〵』

と御意あれば、源兵衛の善七は枝の上に居りながら松藥を分て蟲を除き居たりけり。大御所は何の

御心も附かぬ體にて。源兵衛と名乗れるもの何なる曲者にてあるぞ、と仰向て松の上をば御覽なる。善七は松の上にて大御所の御出と知り見卸す途端に思はず合ふたる眼と眼さすがの善七心臆し總身忽ちゾッとして身の毛も戰慄ち慄へ出したるが、心弱うては叶ふまじ此で計らず出會たるは天の與へ、天道わが忠孝を哀と思召し彼の家康を此處へ引寄せ玉ひつるか、あら有がたや日頃の恨み霽し申すは今この時と持たる木鉄とり直し大御所目掛て眞甲ぞッくと打下したる早速の手裏劍、照準は外て御足許八寸ばかりも離れたる地上にずッくと突立たり、何を致すと大御所がぐッと睨ます御眼の光に、善七は仕損じたりと愕く拍子に思はず足を踏外し太地へ堂と落つ。落る所を御供の面々、すはや曲者ござんなれと推重り取て押ふ。善七今は是迄と既に心中期したれば手向ひもせず、するがまにまに高手小手に縛めらる。『勿體なくも我君を目掛け奉つて弑逆はかる大罪人おのれ、何者なるか、白狀せよ』と拷するを大御所暫しと止め玉ひ、善七に向はせて

『其方は噂に聞た和蘭源兵衛であるな。戰國の習ひ此家康が敵と成り弓矢の上の爭ひに家國を失ひ知行名跡を滅却したる大小名の許多の中には我等を怨み仇敵とも遺恨に存じ、一命取うと姿を窶し附狙ふ族もあらうが。和蘭人の下僮と成り高が植木の職人で生涯送る下賤の匹夫、我等を狙ふ理が無い。我等とても左樣な者に怨を受る覺えも無い。殊に間近い間合なれば實我等を打たんとならば狙の外る筈も無し、又不敵を存ずるものであらば個樣に未熟の手の中では除もあるまい。察する所、松の手入に心を寮はれ持た鉄の手が外れ落いたものであらう。源兵衛とやら夫に相違はあるまいな

思ひの外の御詞に。善七いよ〳〵意外の想を爲して

『仰せの通りの怪我過失、粗忽の段は恐入て御座ります

平伏すれば大御所は打諾かせ玉ひて

『さうで有らう……コレ其者の繩目を解て遣はせ……なんの〳〵疎忽に違い無い事は我等が慥かに見屆け置た……怪我過失は上下を問はず誰にも有ること懸念いたすに及ばぬ……コレ源兵衛、我等この通り怪我も致さねば遠慮は無い、好う彼の松の手入いたせ……どうじやな、手入したらば松の壽命は幾久しう保つであらうか……夫は重疊、丹誠いたして松の介抱大事に致せ打笑せつゝ御歩を運ばせ悠然として寢殿の方へぞ行かせ玉ひけり

第八十七回

思ひも寄らぬ大御所の御詞に善七は九死を免れ、何の御咎も無き而已かは、御聲掛と云ふ厄にて引

續いて御松の手入。宿に歸りて熟々思ひけるは『扨も〳〵慾き人たは家康殿の奸運、一度ならず二度までも此善七の狙が外れ、危い一命助かられたは正しく天の加護である歟。其上に測り法無い彼の大氣、この善七を曲者と疾に睨んで居りながら、いや和蘭源兵衛は曲者で無い、彼等ごとき下賤の匹夫に家康恨を受る覺は無い、木鋏落いたは全くの怪我過失、粗忽は誰しもある事なれば源兵衛が繩解て遣れと罪を免した其上に引續いて松の手入を大事にせいと聲掛られた心中は虎を放つて置も同やう、一圖更に令點がゆかぬ。殊に高運の大將軍は打うとて打れぬものと昔よりの言傳へ、一旦かうと決心の致いた上は物にも人にも恐れぬ善七が家康殿にはつたと睨まれ心臓して眼も眩み松の枝かち落たとは、我ながらも腑甲斐無い臆病にてはあつたなれど、テモ恐しい武將の威德。これを思へば滿念と云ひ住江と云ひ心を竭して我への意見、そんな諫を聞く耳持たぬと一慨には跳付たが、宜々思へば尤も一理。兎ても角ても微運に微運を重ぬる善七、とても本望達せん事は覺束無い。とは云ものゝ此年月の一念、今更止ては亡父上へ大不孝故主へも同じく不忠なにおめ〳〵と生て居られう。夫には又家康殿一旦は見逃し置かれても始終は籠の鳥同前いつ何時どの樣な計ひ有うも知れ難い、怒ひ恥辱を見やうより潔よく腹十文字に掻切て死出の山路に旅立せうか。否々夫迚も矢ぱり犬死すなと住江

に申した舌の根も乾かぬ中に我まづ犬死いたいては惡の至りと申すもの。詮ずる所は事が成てもならいでも、命は兼て捨ると覺悟、住江とても其通り、約束したは明廿日、幸ひの宵暗に寢殿近う忍び込み家康殿の白髮首申受るか但し又この善七がそッ首を進上するか二ツに一ツ……斯ぞ決心したりければ、善七は廿日の晝間も平日の如く御庭に出て專ら松の手入に餘念なき體を見せ七ツ前に（午後四時前）宿へ歸り食事を認め終て後に湯浴なし、夜に入りて心靜かに支度にぞ及びたる先づ首實驗の折からに武士の嗜第一と月代きよらかに剃り髮髻に香たき浸て髮を結上げ、最後の際の晴衣にと調へ置たる黑羽二重の袷、衣裳の定紋大きらかに染出たるを一着し肌の襦袢下の帶足の脛布に至るまで淨らかに裝束て、木綿の手繦二筋を捻合せ帶に引締しッかと結び進退身輕に出立て無銘なれども越中國吳服鄕の住人則重が鍛たる二尺三寸の業物に備前國長船兼長と長銘彫たる一尺八寸の脇差を十文字に帶し、其前夜に認置し意趣書に月日姓名實名を書込み花押すゑて懷中なし暗に紛れて立出たるぞ不敵なる。搦手の案内は十分に知たりけり、人に勝れたる早業に北跳橋を飛越て、竹藪の垣を乘越え內の御堀も難なく渡り、柵を傳ふ猿猴の如くにて彼方に渡り此方に移り辛うじて御庭の端に出たれば廿日の月は已に雲間に照たりけり、見咎られては惡かりなんぞと木影の暗に忍びつゝ、靜に御休息の寢殿近う立寄つて窺ふに早や御夜引過と覺しくて殿中物靜かにて

寂として人聲なく庭上の松に秋風音信て漣波の寄るが如くに響くばかりなり。『大御所には御首の冷るを嫌はせ玉ひ秋風の立つ頃よりして夜は常に薄衣を頭に冠らせ女のかつざを着たるやうにして御手水に入らせ玉ふ時とても斯て在しますが常の御事なり』と此程も住江が我に告たれば最屈竟の目的なり、早う出ませ疾う來ませ猛虎か一刀あびせ掛け奉らんと御厨外なる御水鉢の際に植たる下草の茂の陰に身を寄せたり

第八十八回

御隱殿の遣戸はひしと達切たれば內の樣子は知れねども、紙障子の開たる物音して外欄間の格子に移る手燭の火影、人の足音、御厠の戸を開閉する響。『扨こそ當の敵の家康どの手水には來られたな浮木の龜の時節は唯今と刀の鯉口くつろげて柄に手を掛け居合腰して持居たり。暫くありて遣戸すらりと明けば中より出て縁椽に下り椙杓を手に取りて水鉢の水を汲み手を洗はんとする人姿、雲に隱るゝ薄月の光に透し見れば、實にも住江が云たる如く白地に二葉葵を疎に染出せる薄もの、衣を頭より冠られたるは疑ひも無き家康どの。斯と見るより善七は木陰より飛鳥の如くに沓拔の石に飛上るよと見えしが、『車善七猛虎で御座る大御所御覺悟召され』と云ふより早く拔打に肩より背に掛けばらりずんと斫下たり。刀は名に負ふ則重の上作、切手は手練の冴たる善七、この年月の積れる一念凝て刃に出たれば、何かは以て堪るべき、ウンと其儘溫椽の上にドウと倒る。善七すかさず襟首とつて庭上に引下し、止を刺さんと思ひしが、先づ其前に名乘を上んと突立上りて

『ヤア〳〵人々は何方に御座る常陸國車の城主車丹波守義久とて武名を關八州に知られたる火の車の嫡子同苗善七猛虎、親の敵の積る遺恨に今月今夜恐乡くも大御所家康公を討ち奉り唯今御息の根を止まるらする所なり、我と思はん殿原は出會たまへ見參いたさん

高聲に呼はつて持たる刀取直し

『家康公、御免し下され、御首賜りませう手負に對ひて會釋なし胸元刺んと跨がれば

『ア、善七樣、たッた一言

苦しき息に手負の詞聞覺ある住江が聲。はッと驚き善七は被の薄衣とり除る、折しも照らす雲間の月

『エ、其方は住江じや、どうした仕宣で

『大御所樣の御身替り、是で恨は晴ましたか

餘りの意外に左しもの善七呆れ果たる計りにて暫し佇み茫然たり。俄に照す松明提灯、御庭の四方

より顯れ出たる多數の武士、得物を取て善七が左右前後を追取巻き曲者遣じと圍みたり、中にも一際勝れて見ゆる一個の勇士、槍引提てつか〳〵と進み寄り

『愚なり車善七、是なる御殿は御寢殿とは申せども豈の御座所、大御所樣には爭で斯る淺間の御座敷に御寢やは遊すべき。先頃よりして植木功者を申出で日毎に入込む和蘭源兵衞怪き者と思ひしに大御所樣を附狙ひ御松の上より打たる木鉄、其儘にと御意あつて一命助け置るゝに恩を仇なる今夜の狼藉、この上は逃うとて逃さうか、斯いふ我こそ近藤登之助信辰相手に成て遣はさう。サア來い善七、氣後せずに切て來い

槍引しごいて構へたり。善七は何思ひけん手負の側にどうと座し血刀傍に打捨て

『德川殿の御家にて音に聞ゆる近藤殿、數ならぬ善七を武士と立ての御扱ひ忝なう存じ申す。勇士の情に善七が述懷お聞下され何なれば此善七かうも武運に盡果たか、二度の狙ひに目的は外れ今ぞ最期と今夜の夜討大御所と思ふたは二世と契つた妻の住江、爲る事なす事これ程に齟齬の甚とは遖ふた上はまう是迄、愍ひ貴殿と立會て勝たとて何に致さう、用ない刀に血汐を濺ぎ人命たつは未來の罪の重る業、無益の殺生いたすも不覺……コレ住御前、好う御身替に立ち申した、天晴忠義それでこそ善七が妻女、三途の川原で持て居よ、我等直に追掛て程なう參る、必らず恨に思ふ

てくれな……サア近藤殿、御手向は決して致さぬ、御配下に仰せられ此善七に繩掛け召され、磔刑八裂素より覺悟、御法度通りに御取計ひ成し下されい

兩手を膝に置たるまゝ泰然として居たりけり

第八十九回

近藤登之助は善七が申條を聽て感心の色おもてに現はれ思はずも嘆息して

『ム、一通りは理由あるに似たれども、コレ善七よう聞けよ、一旦繩を受る時は下郎非人の手に渡され武士の面は相立たぬぞ。どうで死ぬると覺悟の上は潔よう立會て……

情籠れる勸誘の詞。善七も其と覺りて

『近藤殿の情ある御芳志忝うは存ずれど唯今も申す如く無益の刃に血を穢すは武勇に似て却つて卑怯。忠孝なりと善七が思ひ込たる年月の心づくしも水の泡、大逆無道の名を受て冥土に赴く罪土產、鉛の熱湯鋸引それを恐るゝ漢で御座らぬ事成らざる其時は尋常に捕へられ御仕置受る汝ての覺悟、非人の手なり穢多へなり御渡しあつて存分に御計ひ下されい、善七更に恥辱とも存じ申さぬ

腰に差たる脇指を取り傍に捨たる刀と倶にずツと近藤の前に差出し置き、我と兩手を後に廻し、いざ御繩をと眼を閉たり。近藤は可惜勇士と思へども今は是非なく配下の諸士に打向ひ

『是なる大罪人の車善七、繩打て引立て召されと差圖に及べば、心得たり諸士の面々善七が左右の手を取り已に繩掛んとする所に。寢殿の遣戸の内より『アイヤ暫く〳〵、出御なるまで車善七まづ其儘に致し置けとの上意に御座ります』と聲あれば、出御と聞て近藤はじめ善七を中に取籠め容儀を正して控へたり遣戸を一面に明させて大御所家康公には親しく寢殿の御椽に出御なつて座し玉ひ阿萬の方を初め阿部の局其外の御側女中たち並びに御近臣の面々御醫師に至るまで各々附添ひ奉つたり。大御所は住江が庭上に仆れたるを御覽あつて

『あれなる手負、住に相違ないか見分致せと上意あれば。阿部の局は地上に下て甲斐甲斐しくも自ら手負を引起し得と見て

『仰の通り住に相違おざりませぬ、然も深手負て御座ります

『さうか、直に手當いたせ

御詞あれば。御醫師ははツと承はり畏まつて住江が側に立寄り應急の手當に及びたり大御所には住

江が未だ微に虫の根の息ある由を聞召して御聲高らかに

『住、不便な最期を致いたな、但し其方が忠義貞節あつばれ無雙、末世までも女の鑑と家康感心いたしたぞ。冥土へ參つて車丹波に面會いたさば『丹波が討死の心底家康よう汲取て罷り居る、苟も義宣一家德川へ對して異志を存せざる限りは秋田廿五萬石子々孫々末代まで疵は附けぬ、安心して成佛せよ』と言傳いたせ

仰あれば。住江は閉たる兩眼を見開き兩手の掌を合せて大御所を拜みたり。善七も此御一言に扨は と驚きて、思はずも首を地上に低て平伏したりけり。大御所は其と御覽して

『和蘭源兵衛と名乘る奴怪しの者と存じ居つたが前年箱根にて我等へ鐵砲うち掛たる車善七であつるよな。併し小姓の住が善七の妻であつたとは唯今初めて承知いたいた、己れ善七、武勇智略人に秀で關八州に名を得たる火の車の丹波が性で有りながら、父が心底を存じ取り違へ、我等が命を縮めうと一度ならず二度三度大膽不敵の企いたし、剩へ忠義貞操世にも稀なる住に迫り我等が秘藏の小姓を手に掛け、扨々憎くい奴の……近う其へ出い家康言聞せる事がある

仰せられ善七を御椽の下に近う召させ給ひたり

第九十回

大御所は善七に向はせ玉ひて

『善七、其方とて狂人では有るまいどう云ふ意趣あつて我等を覗ふか其仔細包まず申せ、聞て得させうと宣へば。善七は謹みて

『此場に至つて、彼是と申立んは卑怯未練、但し意趣なうては御座りませぬ、一命相果ての後の證にと認めて懐中仕つたる書面御一覽を下し置れませい

差出したる一通を。大御所つく〳〵御覽なつて

『よう相分た。シテ丹波には那珂川にて最後の際に此家康を打了いと遺言の致たか。善七、なぜ返答の致しをらぬ。丹波左樣に申置たか。餘もさうでは有まいな。善七賢うても其方は若輩』丹波が討死をば一筋に無念と思ふ餘りに遺言の趣意を取違へて居はせぬか。抑々丹波は武勇も智恵も勝れた武士、先年我等會津征伐として出陣の砌り、大阪にては三成行長其他の雜毛利浮田を誘惑し我へ敵對の軍を起せし時に、義宣（佐竹）には三成等が甘言に迷ふて一味の契約、その時義宣に對つて天地順逆の道理を說き家康に味方せよと達て諫めたは車丹波、大阪の騒起を聞と比く我

等小山より取て返した其節にまた義宣に對ひ、大阪一味と御決心ある上からは唯今某に二萬の軍勢御預下され家康を追討して御覽に入れうと申したも車丹波、彼時初に義宣が丹波の諫を用ひたらば常陸五十萬石は勿論、加增をも受て佐竹の家を益々繁昌いたす所、後に又義宣が丹波の詞に從つて我等を追討させたらば家康今日かくて在んも覺束なかつた。然るを義宣前後ともに丹波が諫を相用ひず首鼠兩端二半の擧動いたせしゆゑ秋田への國替、申さば自ら求めて爲る禍、丹波ほどの古兵者それ存ぜいで相成うか。但し丹波は其時より深く此家康が胸中を疑ひ、猶此上にも佐竹の家に疵を付て滅家にも致す事の有もやせんと懸念なし我等に戒心懈かせて佐竹を守る苦肉の計略一命を擲つて主家の將來を守護なす孤忠、水戸表にて一揆の旗上げ全く此趣意と察し居つた、實丹波この家康を討取うとの考であつたなら、僅の小勢で後詰も無いに、水戸で旗上は致さぬ筈、其方が父の車丹波は夫程武略に疎い凡庸漢では無かつたぞ。斯く察して見る時は、丹波最期の際に其方への遺言は『汝は我が孤忠を受繼ぎ節々は家康うかごう體を示し佐竹を潰す所念もあらば一命危しと思はせよ是ぞ故主へ竭す忠義と』申聞せ置たであらう、よも家康が寢首取れとは申置まいがな、善七いかゞであるぞ

過し那珂川の戰場にて車丹波守が善七へ遺言したる秘密をば聞たる如き御詞。善七は總身思はずそ

ツとして

『全く以て御詫の通り丹波申聞たに相違御座らぬ、然るを善七取違へ不孝の段々恐入て御座ります

る

地上にひたと平伏し、左ながら父丹波守義久の亡魂が大御所へ乗移りたるにはあらぬかとまで思はれて茫然として夢の醒たる心地せり。大御所は左こそと思召して

『心得違へて不孝の段々恐入たと申すからは、善七、其方いかゞ致すな

『ハッ此上は不孝不忠の大罪人たる此善七打首磔刑車裂御法通り御刑罰に仰付られ度、善七さらく御恨とは存じませぬ

『ム、神妙の心得さも有べきはず。但し家康は其方が心得違を敢て憎いとは存ぜぬぞ親の最明を一途に無念と思ひ込み、其時よりして一命を無きものと覚悟なし、千辛萬苦の間を凌ぎ家を棄て妻を棄て我身を棄て、家康を附狙ふた武士の性根、若輩ものには稀な魂。併し善七安堵いたせ、唯今も住へ言傳いたした通り、佐竹の家へは此上とも疵は附ぬぞ。然る上は其方今より心を改め此家康に奉公いたせ立派に取立て召仕はう

思はぬ御沙汰を下されたり

第九十一回

善七は愈々意外の御沙汰を得て夢に夢見る想を爲せしが心を靜めて兩手を突き

『身に餘つたる冥加の上意御禮は詞に盡されませぬが、世に背き天理に戻り不忠に不孝を重ぬる善七、御高恩を蒙つて御奉公を致せばとて、何面目に諸人に立交りが成ませう。同じくは御情を以て唯今一命召さるゝやう只管願ひ奉ります

淚を流して言上すれば大御所は猶御詞を和らげ玉ひて

『そりや其方が片意地と申すもの、既に迷ひの醒た上は勇士の本懐、それを否むとあるからは父丹波が遺言に背き猶家康に意趣を含むと申すのか

『中々以て

『然らずば家康を主人に取て不足と申すか

『中々以て

『左なくば何とて奉公否むか

『恐入ては御座りますが、生得の剛情一旦かうと存じたならば思ひ返しの成らぬ一徹どうも、心が

濟ませねば幾重にも一命召されまするやう御願ひ申し上まする
飽まで願ふ死刑の望。大御所はツたと睨ませ玉ひて
『汝善七、恩も義理をも辨へぬしれもの、善と知ても從かず惡と覺て改めぬとは不埒な奴、左ほど死たくば死罪に處するが汝計りで無い、汝が一族一門の族は勿論是迄諸所にて汝を匿ひ又は汝が爲に肝煎たる者共次に住をば口入いたせし罪は朝比奈三郎兵衛北見藤左衛門松新庵清念はじめその外長崎奈良京都所々隅々詮議なし一類殘らず滅却いたす、其分しかと心得い
鋭き御詞、善七はツと打驚いて
『善七死刑は素よりの望。但し罪科も無い
『諸人まで滅却さするも汝が爲す業
虫の息なる住江は痛手を忘れて善七が側に摺寄て膝にすがり片手にて大御所の方を指ざして首を下げ御請をせよと臨終の際にも夫を思ひ勸むる體のいぢらしさ。木石ならぬ善七は手負の面を打眺め胸も張裂く悲しさ辛さ、落る涙はら〳〵〳〵ほツと一いき溜息吐て
『住江ゆるしてくれい其方が御身替を犬死には致させぬぞ
容を更め大御所に對ひ奉りて

『斯まで上意ある上は仰に從ひ此善七御奉公をば仕りませうが。但し一命すでに棄る覺悟を極めた善七何やう御沙汰を下されても武士は勿論町人百姓の罪たりとも立交り致さぬ決心、此上は非人穢多に成下り、及ばずながら相應の御奉公、一命掛て勤めまするで御座りませう
言上すれば。大御所暫し御思案ありしが御膝をはたと打たせ御顏に笑を含ませ玉ひて
『ムヽ面白い其願ひ、家康たしかに聞屆け唯今より車善七江戸中の非人頭に申付る今太平の代なれども天下の亂を好む奴原或は浪人切支丹、種々に姿を變へ非人乞食に身を扮し江戸市中に入込で隙を窺ふ族もある。善七、大事の役目大切に相勤い
『有がたい御詞　畏つて御座ります
御請に及びたれば。是よりして車善七は明治御一新の際に至るまで二百七十餘年の間子々孫々代々江戸の非人頭にて、非人とは云へ、特別の待遇を幕府より受たりけり
斯て住江が死骸は松新庵に葬りて清念厚く供養を爲して佛果を得せしめたり。善七は非人と成りぬる上は一生無妻にて子孫をも絶さんと申張たるを、清念はじめ諸人の只管に勸めたれば彼の舞衣を安房より迎へて妻となせり。其他この篇中に見えたる諸の善人は皆富榮へて泰平の世に月日を送りたりけり。幼き頃の夜咄しに車善七の物語を聞きしを思ひ出して斯は書記したるが五十年

も經し事なれば半は忘れて誤謬もありぬべし。下手の長文さぞや讀せて倦たまひしならん恕されてよ

車善七　終

仙居の夢

發端

世にありし其頃は梅雨あがりの俄の暑さ堪へがたしとて高樓の障子うち開かせ候ふ者に扇がせて長椅に横臥し新作の小說など讀さして午睡を試みし事もあり又ある時は三伏の熱を避んとて青柳の橋の畔より船に棹さし御藏下なる松の木陰に打繋ぎ女の童に唄うたはせて聽ながら悲哀に遊びし事もありしが今は此身も果なき境に落魄て縱に膝を容るゝ許りの地生の小屋を住居とし此頃の日中の暑熱の堪かぬる程なれど避暑の法も無く机の上に重ねたる物語の枕本を枕となして暫し打まどろみ昔の夢なりとも見て心を慰めんと思ひしに先生起たまへ〳〵と呼ぶものあり打驚きて起上り誰そと見れば年の頃は五十ばかりなる男が道服を身に纏ひ麥藁帽子を冠り黑き履を穿ちたる體は唐絵で知己の道士が四分、揷絵で懇意の天狗が三分、それに西洋風を三分ほど加味したる有樣なり。斯る鵺の如き怪物には朝に晩に遇ひて奇しとも見ねば又怪しとも思はず、足下の來意如何にと尋ねたるに彼の男打笑て、先生越方の夢見たりとて詮もなし寧ろ予と共に仙居の今日の有

様を一目見物せんとは思ひ給はずやと云ふにぞ。夫おもしろからん案内し玉はんや。いと安き御事なりいざ来ませ。さらば参らんと其座を立ち歩むとも無く飛ぶとも無く余が身は程なく空中に在りて雲烟縹渺たる間に下界を明々と見下したり

人烟稍密なる市街かと見れば田園の間に鶏犬の聲する田舎の如くにも見え市とも郡とも分ち難し加ふるに突然の雲の旅路方角は一向に分らねば何國とも更に知るに由なし、甚以て漠然たる次第申譯も無き儀なりと雖ども之が事實の儘なれば読者も勘辨ある外に分別は無かるべし、扨空中より此の下界を見下したるに、馬車に鞭うちて馳るものあり綱曳の人力車で飛び廻るものあり、此處にては演説會を開きて諸君よ諸君と聲をからすものあり、彼處にては懇親會を開き酒肴を振舞て何分宜しくと頼むものあり、逢頭短袖の豪傑が數十群をなして諸所に威張るものあり、鰹節の切手菓子の折を持廻りて音信を家々に通ずるものあり、町人、職人の本堂鎮守の社殿に至るまで甚も夜も人の群集にて其人々は洋服、羽織袴、着流姿、百姓拵え、或は順禮古手買、後家でも巫でも市子でも男女老若押並て皆氣狂の如く腹を立たり笑たり頭を集て心配するかと見れば陰に廻つて舌を出したり左ながらお正月と盆と節季が一所に来てお祭と婚禮と御葬が落合つたるが如くにて中々の混雑詞も心も及ばれず。平素より社會の複

雑に物慣て事に驚かざる余なれど流石これには肝を潰し案内の男に向ひ、コハそも如何なる地にて何事ぞやと尋ぬるに。是ぞ即當仙居區にて仙居の所なりとは答へたり。抑も仙居と云へば桃花流水に映じ鶴が舞ふたり龜が遊だりして頗る物靜なる境なるべきに此の雑沓は俗界にも劣つたる淺間しき體たらく仙郷には有まじき事ならずやと詰つたるに。案内の男はから〳〵と打笑ひ何條仙郷とて騒ぐ事のなかるべき昔の仙郷は翁の中さる〻如く物靜にて一同に無事を樂しみたれど只今にては世の中が開け行くに從て仙郷も昔とは事變り西洋風が流行り出し者院を開き其の者院に出る人を仙居の最中なれば丁度先生の住はる〻選舉區で帝國議會に出る議員を選舉すると同一般なりとは知り玉へと語つたり、成ほど仙郷とて矢張生息の通ひたる人類の社會なれば議員の選舉も有つて差支なき次第なれど仙人と有からは名利の境界を離れ選舉されなば承諾すべし我からは云はる〻如くなりしが今の仙人は所謂盲仙人蛇にも恐れず人にも臆せず俗界も及ばぬ程の剛の者の寄合いざや娑婆への土産に仙居競爭の樣子を見物して歸り玉へ併し仙居競爭略概の筋道を聞て置かねば見物しても分るまい。先かうだ、先第一番の候補者は頓田山四郎どのと云ふ博識、その參謀には南高虹内、附從ふ面々には朽唐出放太、炭山競太、時世持說、風並變多を初めとして

都合その勢二十餘人、大株一六を後詰として愛身塔にぞ本陣を据たりける。第二番の候補者は似雄塔の其中で然ものありと知られたる望梨之助どの七所ごしらえ無理算段で資格を調へ、參謀には倉志駒郎、侍大將には大螺吹足、御旗倒四郎、樫野素徹記、赤井決闘を初めとして一人當千の兵士なれば恐れぬものこそ無りけれ。扨第三番には雲往御愚との眞劍一派の候補者として顯れ出候が是は草分權太兵衛どの、聟にて向志鯉四郎、掛巻賢、玉垣明石、力石賴母、念佛寺空也なんどが附從ひ高慢上人の采麾とは有難き陣立と思し召せ。第四番は當區の素封廿居仁太どの參謀の表部大學が策を土藏の中に運らし勝を選擧の外に取ること必定なりと評合て手配り最中蠅馬梨之進、出船松右衛門、綾獅男之助その外の附屬あつて鹽辛長者が尻押は暗雲伯の甥なる故とは知られたり但し此人は無主義なりと聞ゆ、此外今出羽遲助平大津鮫内なんど申す候補者を勘定すれば候補者の人數は一ダースより少からず二ダースより多からずとの物語なり

理由を聞ば有がたや去らば是より仙居の體逐一見物いたし申すべしとて余は案内に任せて此の内幕彼の相談寄合集會ども見もし聞もし驚き入つたる次第左に書つらぬべし

第一回　頓田山四郎君

今しも權助が水を撒きたりと見えて庭前の飛石は濕いて柚木の綠は一しほ其青みを添たるかと思はれたり椽先の簾を高く捲かせて籐むしろを椽側一ぱるに敷詰たる上に赤豆皮の座蒲團を敷き主客兩人の間に烟草盆を置き相談最中と見えたるは是ぞ即ち此鄕の紳士大株一六にて客は南高虻内なりける。南高は鼻の下の泥鰌髭を捻りながら膝を進めて大株に向ひ「エ、モシ只今も申上る通り此場合に成つては今一層尊公が肩をお入下さりませんでは頓田氏の當選は覺束なう御座りますぜと云へば大株は團扇を使ひ止めて眉に皺を寄せ「ムヽそりや困つたものだネ併し南高君貴公の前だが余も頓田の仙居にてモウ相應に川を聞て居るから此上に肩の入れ樣も無いじやないか　南「御尤々々僕も最初ッからの事を承知致して居ますゆゑ固より強てとは申上ぬが併し世所がお考へものじや御座りませんか、一體あの頓田山四郎をわざ〳〵當區に呼下したと云ふものは今度の仙居には是非とも敗心塔が勝を取らねば相成らぬと去年の秘密會議の席で阿濃園伯の發議、尊公が御承知あつてお引受なすつたからの事、ソレを今更モウ構はぬと仰あつては第一阿濃園伯の思はくも如何ナものて御座らうか、次に是まで仙居の爲に頓田氏にお立替に成つて居る金高も少なからぬ事ソレも全く損に相成つては大變じやござりませんか　北「ナニ頓田へ貸た金は皆證文に成て居るから仙居の有る無しに拘らず制規の利息を附て取れる事は取れるが其爲に阿濃園伯を四九尻てはアノ方も今は内

閣に居られぬけれど 南「左樣サ内閣に居られぬ今日でさへ隱然頗る勢力が有る位だから愛身塔が耆院で多數を得た曉には直に總理大臣恐らくは今より一年を出まいかと僕は考へますネ 大「余もさうだらうと思によつて彼の伯どのに取入て居るがあれが總理に成た日にや占て仕舞ふナア 南「ソリヤ大占で尊公が第一の富を取る人でござりますぜ、成ほど紙幣と銀貨と直段が一ツになつて結構には違ひ無らうが今日の樣に其紙幣も何處に往たかかみ隱れに隱れ玉ふて大不融通、株はどの株でも無暗に下落して抵當に差支へ、お負に時候が惡くて米が高いと來て居るから、どうして〳〵並大抵の仕樣では此の不景氣を挽回することも貧民を救助する事も出來ませんぜ 大「何にも貴公の說の如しだ、中央銀行で鐵道株を抵當に取つたり、少々の札を發行したり、南京米を聊かばかり入札拂に出しても中々此不景氣の療治は六ケしいが、愈々耆院の勢力で敗心塔の物となつて阿濃園伯の大將が内閣の親玉となつた日にやア今度は思ひ切て札をどんと殖し商業工業の資本にズン〳〵と貸出し大英斷を行はるゝだらう、ソウなると第一に札が多くなつて融通は利くし隨て諸會社の株は急に直が出て三年出の通りに上景氣になつて都合も善けりやもそつと高くなつて何も彼も大繁昌 南「ソコで此の秋の模樣が惡くつて愈々饑饉らしいと見極が附たら阿濃園伯は金庫を押開いて亂軍米でも權妻米でも手當り次第五六百萬石も買込でお藏からお拂に出す、尤も買直が八九圓で賣直が七圓ぐらゐ

で賤く賣れば貧民は大仕合、ナニ一石に二圓がたづゝ損がいつても五百萬石で一千萬圓、一國の大經濟から見れば知れたものサ、斯なると金の融通が良なつて株式が高くなつて米が賤くなつて上下貴賤の大仕合せじやござりませんか 大「其通り〳〵其時にや余も外國米の買入方で今度こそしつかり占ることが出來やうが夫も阿濃園伯どのが大臣にならなくては行はれないネ 南「サア夫だから阿濃園伯の勢力を附るが肝心要め、夫には愛身塔の耆員を一人でも多く出すが專一、だから頓田氏を仙居させて何でも耆員にせねが成りませんぜ 大「余も夫だから先頃より仙居一件に付き入用だと云ふので此の金融必迫の中で頓田には無抵當の信川貸で五分の手數料四月限りと云ふ滅法界安い金を二千四百圓も貸て遣つたじや無いか 南「左樣々々併し其金には阿濃園伯の手紙も參つて居る上に新山銀行の頭取が特別保證に立て居ますから安心なものじや有ませんか 大「當り前サ誰が不安心な口に無利息同樣な貸金をする奴があるものかネ 南「ソリヤさうとして仙居の日限もモウ十日以内に切迫して居ますが何を云ふにも反對黨が澤山に出て思ひ〳〵の運動をするから隨つて此方でも之に應ずる運動をせねば相成りませんテ、大根津鮫内、望梨之助、今出羽遲勘平これ等は運動費も十分に無し人望も少ないから左ほど恐るゝに足らずとした所で、ヱヽ尊公、恐ろしいのは雲行御鷹に廿居仁太の兩敵で御座りますぜ彼等は、此區内に多少の人望がある上に金のある連中が尻押に附て居る

ゆゑ水の手が十分に廻るから何が扨人情の淺ましきこと卑劣極まる程で動ともすれば彼等の内に多數を取らるゝ樣な懸念があるには困りますヨそれ故此では尊公が今一奮發なすつて頓田の爲にイヤ愛身塔の爲に運動費の增拜借を御承知下さらんでは明日の軍にも差支ます次第 大「ナニ此上に貸せとソリヤ貴公の說得でも承知は出來ないヨ 甫「いや莫大にお貸なさいと申のじや御座りませんが今六百圓だけ拜借して都合三千圓の高に成つて下さいませんか 大「いや〳〵此の上貸金はお斷りだ金錢の外ならどんなにも骨を折らうけれど 甫(金錢の外には此漢に用は無いと心中には思つたれど色にも出さず)「それじや忽に差支て所謂功を一簣に虧とは殘念千萬で御座りますネ 大「ソリヤ殘念だが外に仕方が無いネ 甫「仕方は大ありサ尊公が貸金を御承知に相成れば直に行はるゝ譯じや有ませんか、其上に雲往は尊公の敵も同樣な草分の聟ですぜ、又甘居は尊公の眼の敵の樣に思つて居る鹽辛の兄弟分でせうが 大「その通りさ 甫「モシ此の二人の内が當區から耆院に出た日にや恐ながら尊公のお肩身が幾らか當區内に狹くなつて萬事に御不都合になりや仕ませんか 大「さうさネ 甫「夫に他の黨派が耆院に勢力をもつて阿濃園伯はお顏出しも出來なくなつた日にや是まで尊公が千辛萬苦して計畫なすつた大望も水の泡となつて旨い汁は人に吸はるゝ樣になりませう歟と僕は心配に堪ませんネ 大(是にて大に悟る所ありしと見えて)「ムヽ成ほどさうだ宜しい淸水の舞臺から飛だと思つてモウ六百圓貸しませう併し今度は禮金を一割にして貰はにや此方の勘定が立ぬが承知だらうか 甫「ヘイそりや頓田と相談する迄も無い僕が承知いたして居ますから宜しう御座います 大「その六百圓があれば屹度頓田が當選して愛身塔の勝になるに相違ないかネ 大「大丈夫〳〵この金で水の手を廻しさへすれば大多數はきつと取れます、御安心なさいまし、ソレじや後刻頓田氏同道で罷り出て證書引替に、 大「承知しました 甫「何分よろしく願ひます、と南高虻内は暇を告て大株の門口を出て舌をペロリと出して「ムヽ甘く往た先づ是で百圓ばかりは乃公がものに成るネと獨言して笑を含みたるは實に賴母しき參謀なり

第二回 甘居仁太君

さすがは此區には素封家と知られたる甘居仁太どのゝ廣座敷、たとひ道具屋に欺されたりと雖ども光琳極彩色の金屛風を雙を立てゝ唐紙を隱し、床の間には中が壽老人左右が龍虎はね込彩色の三幅對性の善惡に論があらうが說があらうが天明四年正月寫應擧と立派に書てある落欵が慥な證據とは御尤千萬尤も升兄屋新調金ピカのお袈裟の切で表裝ゴワ〳〵と出來て眞白なる牙軸を附たれば四邊眩く輝きたり、床の中央には大阪製の春日卓を置き其上に恭く飾たる袴腰の砧の香爐は五條坂

の青磁と見た目は僻目か、左の方には新渡染附の大花瓶を勸工場新作の唐物臺に載せ時候の花とて夏菊をぐるりと丸く一杯に挿し其上より菖蒲の花のニヨキ〳〵と顯れ出たるはお祭の出しと云はんよりも寧ろ神葬祭の献花に髣髴たり、右の方には黄粉梨子地惣蒔繪の料紙硯箱上方仕込と云はゞ云へ其麗しきこと眞宗のお佛壇にも勝つたり（此の飾附にて座敷の模樣は思ひ半に過る所あるべし）此の座敷に敷つらねたる堺段通の上に態と床の間の上座を明けて二方に列座したる甲乙丙丁二十餘人の面々は當區にて多少その名を知られたる紳士紳商あるひは、洋服、或は羽織袴、髯のあるも無いもあり、眼鏡を掛たるも掛ざるもありて種々なれど、何れも胸には一癖を蓄へ自分の都合には拔目の無さうな人物ばかりなり。主人の甘居仁太はお納所に少し赤糸を入れたる市樂織の單物の下に白絽の襟袖を附たる半襦袢を着し、萠黄棒縞の仙臺平の蹴廻しを馬乘ほどに廣く仕立たる袴を家鴨尻に佩したぎ黑絽の單羽織の丈長なるに鷹の羽の紋を五所太らかに染出したるに、白糸の紐の長サは一尺五寸目方は二百匁も有んと思ふ程なるを二ッ廻してだらりと臍の邊まで結び下げ、金側の時計を半は帶の間より見せ。寵愛の洋犬でも繋ぎさうなる大鎖然も十八カラットの金にて製たるを袴の紐も下る許りに挿み、殊に一際目立たるは羽織の襟に銀の褒牌を彩綬にて下げたるは是なん陸防費献金の賞に賜はつたろを今日を晴と佩用したるもの歟、白の絹足履五枚沓に縫たるを穿き、象牙

骨絹張の扇を右の手に持ち、髪は漆を塗たるかと思はるゝ程にブラシを掛け、鹿の香水一瓶二圓の價なるを厭はず鼻つく許りに振掛け、鬚は奇麗に剃立て、眉毛も二分五厘ぐらゐに剃付け、顔には理髪師が施したる西洋白粉を其儘に殘し置き、年齢は三十二歳四ヶ月二十七日半なれど、色白で痩形ち二十位の時からどうかすると茶人の娘や女中だちに「イヽ男だこと」などゝ云はれたが可愛や其身の不仕合東京廣しと雖ども恐らく予ほどの美男子は有るまい素封の家に生れたが殘念だ俳優にでも成うものなら元づ成福の悉陀太子を捻上げ雁次郎の重次郎を踏まへてせり出し數萬の見物の女どもにイヨ甘居や――と異口同音に褒させ毎日々々樂屋で蕎麥振舞をせんものをと男自慢の大自惚それに慾に金が有る所から新柳の邊に徘徊へば盆前や年の暮には音を竪に振る白拍子や赤拍子どもが偶々あるので益々增長自信の色男とは成りにけり。扨て閑話は止にして主人の甘居色男は靜々と座敷に入り來り下り俳優が舞臺で初御目見と云ふ氣込にて下座に着して一禮するや否や。滿座のお客はソリヤ出たと云はぬ許りに盡く其席を立て前に進み答禮する。今日は宜うこそ（一禮）誠に有り難う（一禮）お暑のに（一禮）どう致して（一禮）先々お座に（一禮）サア〳〵是れへ（一禮）それでは困ります（一禮）でも今日は（一禮）左樣なら仰に從ひ（一禮）それなら失禮ではござりますが（一禮）皆さまお羽織をお取下さつて（一禮）暑いからお寛なさいまして（一禮）ヘイ〳〵

（一禮）サア〳〵（一禮）と相互にヒヨコ〳〵とお辭儀の競爭大安賣、支那人が見たらハヽア是は叩頭の演習だと思ふなるべし

此の競爭が凡そ二十七八分時間も續いて漸く主客の挨拶も濟みて座定るを見て次の間より出で來つて主人の傍に着座したるは大軍師の表部大學先生（博士や學士に非ず潛ゆる三百學者とでも名附くべきか）、今度の仙居に附ては甘居が爲には張良孔明とも云ふべき地位に立たれば今日の集會に威嚴を守らねば第一には我爲にならず次には甘居が爲にも成るまいとや思ひけん、白の福袢の糊强なるを着て、小辨慶の股引を踵下りにはき、白の沓足履の新らしきを見せ冬服の黒羅紗のフロックコート重しと雖ども暑しと雖ども更に顧みず（實は是切り持合なければ據なく）ずつと着込みて流る汗を物ともせず、鼻の下の傘破倫髭を容體らしくクルリと捲かせ、金緣の眼鏡を學者の看板に掛けたるは何さま紙屑買の踏倒に見せても學者らしくリ肥たるは天晴れ計略に長たる軍師とぞ見えし

第三回　誕辰の饗應

お茶が出る。お菓子が出る。お世辭が濟でソコ〳〵浮世話が初まる。當年はお天氣が不順で……お米は此上まだ高く成りませう。商東米も澤山に輸入いたしお拂米の入札が……麥は半作ぐらゐ……昨年からの引續きで自然米穀が拂底で……いかさま實惜もあれば懸念も御座つて……貧民の數が殖るには困ります……成ほど救助の爲に醵金慈善會、音樂會、芝居、手品、輕業、講釋、落咄し、都踊り……身投、首縊り、餓死、泥棒が頻に新聞紙に……夫も金融が止て……不景氣の結果で……諺株券の下落から……銀行の擔保には成りますが……大臣公の御交迭で……內閣の御決心……大分に仙居の騷が酷く成つて……中々の大熱心大競爭……アノ方も少しの所で奇簇院の五仙に漏れました か……候補者の御連名が都合十八人ありますか……など、話の進路樣々に轉化して今や將に目的の域に入らんとす。此機會を見計ひてや次の間より顯れ出でたるは此席に並居たる連中が巨擘とも仰ぐなる鹽辛長者との假ひ名詮自稱の鹽辛で爪にランプを點す程の客々でも、無い者は有ものに勝はず、借た者は貸た者に頭が上らず、金がもの言ふ仙人世界昔風の小紋の羽織も大禮服の金繍よりは燦爛たる光明を放つが如き心地せられて一座のお客は皆一同に頭を下げ是は〳〵と敬ひ奉つたり。

鹽辛は挨拶を爲し畢つて全會一致の請願に任せ「左樣ならばお詞に從ひ失禮ながら老人なればと床の間の前なる上席に着座したり（此座は此の老の爲に兼て席て有りしと思當つたり）是より又々役にも立たぬ無駄話しが少々あつて後に主人の甘居仁太はシカツべらしく眞中に罷出で一禮して「扨

今日態々暑氣の所を御入來を願ひましたるお疎末なる御酒を一献差上たいからで御座る實は今日は私の誕生日で例年は親類の者ばかり招きますが當年は御懇意の方々をも御招ぎ申上てお話をも伺ひたいゆゑ（其實廿居が誕生日は今日では無いのに（惡からず思召しまして……と相述ぶれば。鹽辛長者は打合の相鎚は此時なりと進み出で「是はノ〳〵御丁寧の御挨拶で、イヤ何皆樣、私は當家とは親類同樣に致すから毎年廿居さんの御誕生に呼ばれますが當年は皆樣にもお出下すつたは有り難い、併し御主人恐れ入るネと主客傘帶の受答へ、何が扨て紳士でも仙士でも御馳走と聞て腹を立てるものは一人も無く俄の追從急拵の輕薄は見るも齒の浮ばかりなり

合圖はよしと次の間より赤拍子が吸物膳を持出し白拍子が盃洗を運ぶ體は物慣れたるに似たれども當節は此輩も外に本職（イヤ內職が）あつて座敷と云は〳〵假の看板その進退の輕忽なるは小笠原流とや名くべさ歟、去れども一座のお客には何れも懇意の大猫小猫、ヲオ暫く……ヘイ昨晩は……アレから旦那どうなすつたの……イヽエ知て居ますのよ……と各所各種の應答忽ち座敷は陽氣になり笑ひつ打興じたり。傍て心に一物を抱きたる軍師の表部大學は廿居が側に附添て四方八方に眼を配り耳を傾け醞辛長者にも氣脈を通はせ兎角に話を當區の仙居の事に引入れたれば一座も未だ醉は廻らず自ら候補の月旦評に移つたり。表部の目くばせに夫と悟つて鹽辛は廿居に向ひ「どうですな御主

人公、いつそ君が自ら候補者にお成で仙居にお逢なすつちや如何です、と一座に聞ゆる樣に態と大聲にて云へば、廿居は內心飛立ばかりに嬉しけれど殊更に氣の無い樣なる顏付をして「イヤモウ私ごとき者が者院に出ましては却て當區の名折に相成るから御免を蒙りやせう實は叔父の暗雲伯も仙居に逢てはどうだと勸た事もございましたがどうして〳〵外に旅々の學識家や實業家が澤山にあつて何れも候補者に名を出してござる中ゆゑ私し風情が及ばぬ事でござるやす、と空々しき謙遜辭退。それと傍から表部大學「イヤサ夫が御主人失敬ながら國家の爲に盡す志が薄いと申すもの、成ほど當區に候補者は十八人もござれども夫なら誰を選擧して我々が貴重なる參政の權利イヤ恐れ多くも上天より賜はつたる大切なる權利を委托して以て立法議政の重任に當らしめ樣と云ふ適當の人物がござりますか、彼の候補者は何にも聊かの才識あり學問あつて術數計略には尤も長じたる人物に相違ない僕は一言も彼の人々を誹謗は致さぬが、モシ僕にして當區に選擧權を有するならば奈何せん彼の人々に委托し樣とは未だ思ひませんネ（ヒヤ〳〵）其の思ふと思はざるとは僕が自由の權にして他人が干涉すべきに非ざるは、思はぬと云つて彼の人々に對して更に禮節信義を失ふ所はござらぬ、而して僕が選擧人にて有ならば、良しや御當人が承諾せずとも無理にも國家の爲に萬民の爲に全世界の爲に承諾して貰つて是非とも者員に成つて貰はうと欲する大政事家の大器量を有

する人がござる、諸君よその人は誰なりと思召すか、即ち當家の御主人にて我輩が常に泰斗と仰ぐ所の廿居仁太君閣下でござる（大喝采大拍手）と畢生の力を出しての席上演説さも立派に述べ立つれば。鹽辛は打うなづき「實に表部先生の御説の通りだ何も我々の代議士には身代も碌に無い癖に議論ばかりして居る新聞記者や法律家を見た様な人物を出すには及ばぬテ、だから廿居さん此は奮發して否でも者員にお成なさいナ、お前さんが成ると云ふ日にや當區内は皆様が入札しますぜ、斯く申す鹽辛は一家こぞつて投票仕るぜ、皆さんサウじや御座いませんかと調子を外さぬ鹽辛が皮切り。一座の面々は「左様ともく〳〵廿居様に限ります「是非ともお思ひ立ち成さいまして「きつとお請合申ますと「御馳走の利目は酒と共に善く即座の同意。廿居は占たりと小鼻を蠢して「夫ほど私を思召して下さいますなら候補者に相成ませうに依て何分とも御賛成を願ひます　四「夫で安心いたしてござる皆さん當區では實に此上も無い者員を見付け出して大慶で御座ると云へば一座も大慶主人は尤も大々慶「ソレ〳〵大慶の祝に元祿踊りはどふだ〳〵「ハイ支度は宜しう御座いますと次の間の唐紙をさつと明れば山猫の出ばやし音頭掛りの總踊り雜風景の御愉快に仙境の樂を盡したり。其中に表部は廊下にて廿居に向ひ「御主人安心し玉へ果して僕が策の如くに行はれたり

第四回　望梨之助君

套衣も中衣も袴も脱捨て其所あたりに取散らし、其身は素肌の上に隨分汚れたる褞袍の汗臭きを平氣で着川し、下にはメリヤスの股引の同じく垢染たるをはき、今しも外より歸りたりと見えて机の側に胡座をかき、團扇にてバタ〳〵と扇ぎつゝ、片手にて麥酒を手酌にてコップに注て一口にグッと飲み一息ついて、對座せる裕衣へコ帶腕まくりの壯士と物語りするは是ぞ當區にての候補と知られたる望梨之助君にて對座するは即ち蒼僚の倉志駒郎君なり。倉志は暫く望が面を見詰て大嘆息を爲し「先生この期に及んで僕は實に殘念でござる我黨は公明正大に堂々たる運動を以て雌雄を仙居の場に決せんと心掛たるに彼の反對の小人黨の奸物等が卑劣手段を用ひて陰險の惡計を施すはナンと奇怪千萬では御座らぬかと云へば。望も怒の色を顯はし「然り〳〵廿居の無主義黨は原來熱に趨り勢に赴く俗物共ゆゑ金銀を以て投票を買集るも敢て慮くに足らぬが憎むべきはかの頓田が所業じやテ、表面では政事主義だの施政の意見だのと尤もらしく吹立て新聞に演説に述べて置きながら今日に於て專ら我黨の事を讒謗し、ヤレ似雄塔は粗暴の振舞を爲すものなり腕力に由て脅迫する者なりなど、竊か惡口を吐散し選擧者と我黨とを離間し樣と巧むは實に奸惡を極むると云ふ者じや無い

か 倉「何にも左樣然のみならず此節に至つては懇親會と名づけて仙居者を招待し美酒を振舞ひ何分宜しくと投票を依賴し既に去る十七日の集會では出席したる輩の留守宅に一圓五十錢づゝの折を軒別に送つた事を慥に承知いたして居ます 堅「僕も其報道を聞込だが全く實說と見えるナ、して見ると今出羽遲勘平が鰹節の切手を配つたも大根津鮫内が來客の平の内に銀貨を二圓づゝ入れて置て其來客の中に反對の間牒が居ると覺り俄に生卵に引替た失策に兄たり難し弟たり難しだのウ 倉「イヤイヤ却て其より罪が一層深い樣だ、夫はそうとして時に先生此上の運動はどうなさりますネ反對が斯の如き奸策を運らすを傍觀して空しく勝を制せらるゝは愚の至りと思ひますぜ 堅「尤も其通りだが君も知る如く我黨正議の君子は固より窮するが當然なればモウ運動費の計略は殆ど絕たる今日に於て迚も尋常の手段では目的は達しられまいに由て斷然たる非常手段を用ひ樣かと思ふが 倉「夫だ夫だ僕も實は四五日前より其議を提出し樣かと存じて居た所に先生の御奮發は大に妙でござる、併し其の非常手段を用ふるにも少々の軍資が無くては差支ますが 堅「倉志君案じること勿れだ昨日本部より爲替で二十七圓五十錢屆て來たから少しも心配するに及ばぬよ 倉「夫は頂上の好都合でござる然らば斯々と、膝すり寄せ相談の最中にドシ〳〵と足音させて案内者も無く此の樞密室に來るものは樫野素徹喜、走井穴唐、御影倒四郎、大螺吹足の四人望が爲には股肱の勇士火の中でも水の中

でも飛込まうと云ふ顏色（其癖サアと云ふと中々サウで無いけれど）各々異形の風體にてガヤ〳〵話しながら入來り望、倉志兩人が側に座し遠慮會釋も無く大聲にて 樫「イヤ先生反對の奴原は實に怪からぬ擧動を致しちよりますテ我黨の事を誹謗したる投書を○○新聞に出させたは全く彼奴等が奸策に相違ないで御座る 堅「さうだらうと僕も疾に悟て居たが重々憎むべき奴共だがシテ今日の運動はどうであつた 樫「僕と御影の兩人は右の奸策を探り得たから直に其足で○○新聞社に押寄せた所が社長幹事の臆病者が不在だと云つて面會いたし居らぬが大方我黨の威力に恐れて裏口から逃出したでも御座らうと存じ去者は追はずと腹を据ゑ編輯の主任記者に面會を申込み逢て見たら、ナニ痩ぎすで色の蒼い弱さうな男、こいつ與し易しと我黨特色の談判を開き投書の出處を詰問し終に明朝の紙上に正誤謝罪と迄に懸合てお負に反對の奸策に出たりと書かせる事に取極て參りました 倉「ソリヤ兩君大出來でござつた、夫から大螺、赤井の兩君は 大「僕等は又方向を轉じて今日は○○の邊に出掛け反對の本陣を据たる近所に押寄せ賄賂の爲に志を反對に傾る輩の内で重立た奴等が宅へ軒別に押掛て十分に正義の存する所を說たです 赤「大螺君の申さるゝ如く黨派の正邪運動の勇怯は斯く〳〵だと奴等の百姓町人にも分る樣に說て聞かせ此通りに理を剖て說ても公等なほ聽ずとあらば是非に及ばぬ道理の達せざる所は腕力を用ふるも止むを得ざる事なりと少々嚇かして遣た

ら大に恐れて兎も角も仕りませうからと云ふ挨拶 犬「然らば調印いたせと迫らうかと存じたが雇て兩君の内命もあれば先づ夫位で運動を止て置ました 畧「大に御苦勞であつた、シテ今出羽が今夜は演說すると云ふ廣告を出したが實說かノ 犬「實說に相違ござらぬ既に通りの四角に廣告を張出して今朝の諸新聞に記載したる如く愈々午後六時より始むると公然吹聽してござる 畧「尤も今出羽ごとき輩が演說したとて敢て恐るゝに足されど不問に置ては策なきに似たり、エゝ倉志君どうした者であらうナ 倉「今日に於ては決して不問に置く可らず我黨得意の演說妨害策を行はねばいかぬ、ソコは僕が既に考て置て人數の手當もしてござる……コウ樫野君今夜の隊長は君その任に當り玉へ人數は例のノーく連を二十七八人ほど募てあるソレでもし不足ならば赤非君に援兵を連させて後詰に向けるから安心して十分に技倆を揮ひ玉へと命令して其部署を定めたり

第五回 雲往御臨君

茲は當區に於て第一の舊家と知られたる草分權太兵衞どのゝ住居。そよ〳〵と此の權太兵衞どのと申すは昔シ〳〵其昔シ奈良の朝の御時に當國の守の某朝臣か任滿て都に歸る時に最愛の妾の腹に生れたる田舍歷を其母と共に殘したるが先祖にて代々豪族と呼ばれ舊家の時には苗字帶刀御免あつて

系圖正しき家柄なり、寬文萬治の頃までは田島が五百町步山林が二萬町步あつて領主にも比しき勢であつたさうだが、代々此家には學者が出來て詩を作つたり文章を書たりせしが家の不幸となり當主の權太兵衞に至つては所持の財產も多からぬ程には相成つたれど何を云ふにも名家の末葉草分の惣本家なれば昔風の長屋門が關座敷納戸藏所土藏納屋廐牛部屋に至るまで巍然として甍を並べ假ひ只今では平民と云ふ肩書に零落ても當區內では猶草分の家にぞある。今日しも此の草分が家には當區にて重立たる古風の歷々が午後より三十人餘も陸續として案內に應じて入來るは法事にも非ず又別に祝事ありとも思はれず何さま當區に關つたる相談の寄合なるべしと窺へば案に違はず是も亦流行の候補者の一件にてありぬ。其仔細を尋ぬれば此の草分が乙の娘を嫁に遣したる先は同じく當區の舊き豪家にて其聟をば雲往御臨どのと申せり。此との は新田の小旦那と呼ばれて家產は遙に草分より富み殊に幼き頃より和漢の學問に心を寄せ年來だ三十に滿ざる頃より當區の物識りと稱ばれ今日にては此人の右に出るものなしと古風連に一方ならず賞翫せられて指折の人物とは相成つたり。此との何にもして耆員に仙居せられて且は世の中に廣く其名を揚げ且は己の器量をも檢舞臺で顯さんものをと土拍子も無き大望を懷き綱に此事を泰山な る草分に相談したるに草分は大に喜び

「夫でこそ流石に此の權太兵衛の聟なれ我家は忝くも吉備眞人の嫡流、貴殿は都良香の庶流、と もに是れ系譜正しき筋目なるに時節とは云ひながら氏も素性も慥ならざる匹夫のなり上りに幅を利され遺恨やる方なきに剩へ其輩の內より此區の耆員に出るものあつては實に以て御同樣先祖に對して相濟まぬ、此權太兵衛は學問も無く年も寄たれば仙居を爭ふ念なけれど貴殿はまだ四十未滿これからが勘辨盛りイザ耆員に成ると覺悟を極られよ權太兵衛必死になつて骨折らう、と內々の申合あ りければ草分權太兵衛は是より竊に同志の輩を寄々に募りしに興力の面々誰々ぞ、先づ第一には增長寺の阿闍梨高慢上人、次には古伊神社の祝玉垣明石中臣秡、皇學專門の掛卷賢、新陰流の師範たりし力石賴母、漢學者の聞えある向志鯉四郎を初として都合その勢三十餘人何れも宗徒の輩なりとぞ聞え中にも高慢上人、玉垣明石の兩人は兼ては宗敎の事にて仇敵の思ひを成したるが地獄の沙汰も金次第高天原とて黃金白金の光り無くてやは玄妙不思議の引力にて草分に一味して雲往の肩を持つ樣に成つたとは 京童の惡口、誠は兄弟內に鬩けども外その侮を禦く爲なりとは左の演說にて明かなりとは覺束なきものなり。高慢上人は今日を晴と召されたる御衣の袖を褰げ珠數を爪繰つつ一座に向ひ玉ひての玉く「ナント御一統の衆愚僧は原來佛に仕へ奉る身の上世の中の事は頓と貪著は致さぬが承はれば當區でも近々に耆員の仙居があると申す事じやが、ソリヤ何地の誰が仙

居に成つても差支あるまいが只々恐るべきは耶蘇敎じやうだが其奴が耆員に成つた曉には痛いかな悲かな千有餘年さしも繁昌したる三世諸佛の尊き法は忽に衰へて佛滅の末世となり攝取引接の善の綱は永く絕て阿鼻焦熱の苦みの聲は終に止る期あるべからず哀と云ふも中々に愚なり斯る一大事の時節には佛法の外護大檀那が責めて一人でも耆員に出て貰いたい事じや、愚僧は其人を指ては云はぬが、草分どの誰でござらうな敎て下さらぬか、佛法王法もとより一ツ其の功德廣大無邊でござらう」と乙に氣を入れて辯じたれば一座の人々皆感涙を流したり（實は汗を流したるなり）

玉垣明石は中啓を笏に取て咳拂を成し「今も阿闍梨がのしきものはあらじ、畏くも我國には千早振神代より神ながらの道と云ふがある中つ世に佛法傳道が傳はつて三ツ足の鼎の如くには成つれど末の流れは一ツにて神代の樣を變ねば卽ち神の御國とて有難き事ではないか、夫に何ぞやいかに西洋の風が流行ばとて下さまの靑人草が神の祭ことに口を容るゝとは怪しからぬ事である、尤も神代にも天の安の河原に八百萬の神を集めて神ばかりに謀らせ玉ふた事もあつたが夫は神さまの集會で西洋風ばかり眞似て肝心の日本の事を知らぬ嗚呼のえせもの、集會じや無い、じやに由て此の玉垣明石中臣の祓は大八洲の瑞穗の國の爲に當家の聟君で

おはすなる雲往御鷹大人に當區の耆員に成つて玉へと草分の翁に頼み奉る小男鹿の八ッ耳を振立て聞し召せと恐み恐み白す」と同じく趣意をの玉へり、是に繼て掛卷賢、向志鯉四郎、力石頼母の面々常より主張せる眞險一派の骨子たる極粹本尊の趣意を（極粹本尊と云へば白象に乘たる傾城姿の普賢菩薩で梅暦か虎の卷が經文で有さうに思はるれど此の本尊は中々左に非ず不粹を極めたる代物なりとぞ）銘々に並べ立て……神洲の元氣……尊皇奉佛……愛國敬神……君威は神權なり……政府は天與なり……處士の横議は亂階なり……其位に在ざれば其政を議せずなどゝ大理窟を並べて當世に不平を懷きたる溜飲を散々に吐散したる揚句が雲往御鷹を候補にして投票し樣と何の譯も無く相談を取極め銘々に受持て仙居者を說得すべしと無造作にも語り合へり

第六回　演說場の景況

新聞紙の廣告（但し演題は記者に囑み雜報の内に載せ貰つたるが是も無謝では有るまい）果して空しからず聽衆は午後一時より陸續と當日の演說場なる芝居小屋にと詰掛たり。尤も此の聽衆は兼て自黨の手下を以て驅催し或は晝辨當氷水を攝待に振舞からと用事があつても繰合せて來て下されいと頼み夫でも二の足を踏む者には人力車代を達引からと約し、イツソ現物で

ムゝ宜しいと迄に話が付て來たる連中も少なからざれば先づ中位の入りにてありき。但し土間の六七八の三側で十五圓ものに座を占たる六十餘人の見物（イヤ聽衆は）拍手連、三四の側の十間もの喝采連は會主の注意にて特別手當で招待したる面々とぞ見えし。其外棧敷高土間に居並たるは仙居の資格あるか無いかは知らねども種々の人物集まつて中には丁稚小僧などの雜つたるは是でも場所塞げの穴埋には成ると云ふ積なるべし。木戸口仕切場賣場を初として樂屋うち舞臺の左右は非常を戒めたる雇壯士その後備には出入の仕事師鳶の者鳶口あるは階子を持出し龍吐水まで飾たるは火事の用意か夫とも候補者の熱を冷す爲に頭から水をあびせる豫備なるか、木戸口の正面には日の丸の國旗を交叉して祝意を表し其右には西の内十三枚續の張出しを杉板の框にはり附けたり其文は左の如し

愛身政談演說會　本日午後一時ゟ　傍聽無料　氷水攝待

辯士　朽唐出放太君　炭山競太君　時世時節君

風並變多君　南高虻内君

本區仙居衆耆院員候補者

頓田山四郎君閣下

然のみならず警察署へは兼て書面を以て願を上げ臨監の外に別に當日場所内外の取締且つは演說妨害暴行の非違を制せんとて多人數の査公出張を乞ひたれば假ひ何なる壯士なりとも手を出すべうも見えざりける

當日の進退懸引は都て南高虻内が參謀となつて其昔治承の合戰に足利又太郎が宇治川を渡りたる時の口調に倣ひて指揮を下して云く「身なりの善きは淺敷に上げて風體あしきは遠くに居け、木戸口にて傍聽牌を篤と改めよ、裏木戸に締りを附て唯のものには出入をさすな、ノー〳〵聲を發しなば遠慮なくばす引ずり出せ、手向いたさば打伏せよ反對黨の荒漢に鼠木戸を破られな、常は出入に氣を附よ、頭領手合の合圖にてきつとヒヤ〳〵云ふべきだ、手を拍つ場合を誤つな、心得たるか人々と落なく示し合せたり。偖また舞臺の方を眺むれば正面には芝居の道具に用ひたる金襖を六枚に飾り其前の中央の所に置舞臺を二枚ならべて演說臺となし其上に五尺に三尺位なる机を置き萠葱羅紗の切を掛け硝子の水瓶にコップを添たり、演臺の右の方は警官の臨監場とて椅子を並べて着座あり、左の方は會主の椅子、新聞社の速記者を聘して書て貰ふ支度なにから何まで行屆き、大臣柱の左右には左の如く演題を左も立派には張出したり

者員仙居を祝す　朽唐出放太君
仙居者の心得　炭山競太君
卑劣の手段は我黨の行はざる所　時世時節君
腕力は仙居の大患なり　風並變多君
者員たる人は誰ぞ　南高虻内君
余は候補者たることを諾す　頓田山四郎閣下

却說も樫野素徹喜君は此演說を妨害せんと宗徒の手下二十人ばかりを引連て此場所へ押寄たるが南高が先見の爲にもろくも看破せられて其人數を一ッ所に座らせず彼所此所に別々に置たれば妨害の手段も甘く行れず如何はせんと樫野は獨り心を痛めたり

第七回　政談の騷動

鼎負連「ヒヤ〳〵〳〵　反對連「ノウ〳〵〳〵　頼マレ連（手を叩く音）　バラ〳〵〳〵　彌次馬「イヨ朽唐ヤー
舞臺番「東西〳〵　一味連「愛身塔萬歳〳〵　冷カシ連「辯士シツカリ遣れ

敵方連「ゴマかすナ知てるゾ 取締「お靜になさい妨げに成るワ「その公衆を瞞着するに由て訐て遣すワ「妨になる者を引ずり出せ「面白い引ずり出せるなら引ずり出して見ろ「見せなくてどうするものか、と取組み合ふ。ソリヤ騷動が初まつたと土間の眞中での大混雜、辯士は色を失ひ眞青になつて演臺の緣につかまり語氣の凜然たるにも似ずブル〳〵と慄えたり（護衛の雇壯士は氣の毒になりて、先生安心お仕なさい我が附て居りや大丈夫ですヨと云へば辯士は小音にて何分御保護をお賴み申ます）國家の爲に天下の爲に我黨の主義の爲に玆を先途と荒廻れども優勝劣敗は數の免れざる所なれば一人の力は數人の力に敵しがたく反對黨の妨害連の勇士は情なくも木戸外に押し出されて場中の風波忽に收まり再び快晴と相成つたれば辯士先生も再び壯快なる口調にて演說を初めたり。去れども妨害連は一人追出さるれば又一人顯れ出で新手を繰替て妨害を働きたるに由り演說を中止せしむる事こそ叶はざれ妨害は慥に夫だけの効果を與へたるに相違なしと隊長の樫野素徹喜は東の上の棧敷にて紙卷烟草を薰らせながらジツと堪へて見物したるぞ不敵なる

「エヽまだ申述たい事もござりますが、エヽ後に南高虻内先生が控へて居られましたお耳新しい說を述べ御機嫌を取結ばるゝで御座りませうから、エヽ私は是にて御免を蒙りまして、エヽ先づ演說の局を結ぶでアリマス」と挨拶して演臺を下れば見物は前座御苦勞とは譽たりけり。斯て南高は中

入前の演說で頻にこぢ附けドウやらコウやら當區の耆員は頓田君先生閣下に限ります此の人ならで外に其の人は有る可からずと云はざる可からざるなりと辯じて大太鼓を叩き立て喝采罵詈の間に座を退きたれば愈々是からが今日の眞打一枚看板の太夫頓田山四郎丈で御座いまづ太夫支度の間打囃させますと云はぬばかりの會主が披露に 連中「イヨ親玉待て居ました 同「しつかりお賴み申ますゼ 同「愛身塔の色男 同「成駒屋ヤ――、と喝采の中に頓田山四郎は演臺に上り十分に物體を附て凡そ一時間も演說に及びたり尤も此の演說の筆記は翌日の某新聞に載て餘り面白くも無いゆゑ此には略して載せずとして詰る所が「仙居人諸君ガ不肖ノ僕ヲ擧テ耆員タラシメン思召スナラバ僕ハ敢テ此榮譽ヲ辭センデアリマス併シ乍ラ僕ハ唐瓢ヲ買ハントテ卑劣ナル賄賂手段ヲ行フコトヲ欲センデアリマス（甘く言ふぜ）懇親會ヤ宴會デ自分ニ唐瓢シテ呉イト賴ンダリ菓子ノ折ヤ鰹節ノ切手デ愛顧ヲ買フトハ卑怯デハアリマセンカ其上ニ甚シキハ腕力ヲ以テ演說ノ自由ヲ妨タリ腕力ヲ以テ仙居人ヲ脅迫シタリ致スコトハ實ニ恐ルベキデゲス、僕ハ左樣ナ手段デ仙居ニ逢コトヲ好ミマセン僕ノ政治主義ハ云々……」と辯じたれば、譽るもあれば毀るのもあるは頓田が變の舌、と京童が謠ひたるも善く其情を盡せりと云ふべし

演說は是にて千秋樂と打出しに成り聽衆は敵も味方も散り、おれの下駄は是じや無い、我の蝠傘も

見えぬと群集雜沓の中にも頓田山四郎は會主の注進にて「ヤレ恐ろしや君子は危に近よらず政治家は壯士を相手にせず、と周章てふためき南高虻内その外の面々と共に姿を扮し風を變へて裏木戸よりコソ〳〵と逃出し我宿にも歸り得で其夜は何れへか身を潜めたり。斯とは知らず樫野素徹喜は同志の赤井穴唐と共に手下の壯士十餘人を引從へて樂屋に押し來り「會主に是非とも面會いたさう……ナニ辯士たる頓田氏と南高氏に對談いたさうと思つたに歸宅いたしたとナ……扨は風を食つて逃をつたかヱ、殘念千萬……と憤りの色を顯はし散々に罵り散し疊を蹴立て出往たれど此方の雇壯士は誰も相手には出ざりけり

第八回　大根津鮫内君

午前八時前よりして劇しき人出入。紺飛白の單物、鼠色のヘコ帶、黑絽のベラ〳〵羽織、赤い鉢卷の附たる麥藁帽子と云ふ書生風もあれば、フランネルの單物、紺無地の前垂と云ふ町人風もあり、西洋服の代言體もあれば、小紋の羽織の家主體もありて、出入の人物は千差萬別なれど入ると思へば忽に出て往く出たかと見れば差曳で飛で入る、大家の閉店一日前か蠣殼町で相場の亂高下の時に異ならず。此家の主人大根津鮫内どのは阿波縮の木綿浴衣に八反の水括を二重に廻して左の横腹の

所で一寸と結び、晝寢用に拵えたる長手の皮蒲團の上にどつかと座を占め、大坂製の皮枕を後の方にゴロリと轉がし、右の方なる長崎仕込の紫檀の唐机の上には憲法俗解、議員選擧法註釋なんど標題したる新版の書物を堆く積重ね雜誌新聞紙も其側に隊を成したり、尤も此四五日以來肝心の仙居騷ぎで更に手を附るに暇なしと見えて床の間の花も萎み一面に引散らしたる模樣なり、大根津は別段誂向の大なる氷嚢に氷の三四斤も打破て容れたるを天井から釣し下げて頭の上に載せ、眞赤な顏してウン〳〵と呻りながらも中々寐て居る譯にはゆかず、諸方よりの來狀或は仙居人の名前を認めたる帳面類を前に並べ忙はし氣に彼是と見廻し次の間に向ひ「ヲイ筆山氏親展狀は何本出來たかネ、と問へば筆山某とて年の頃は廿四ばかりの書生唐紙の間から面を出して、「ヘイ今朝からコウト」と扣の書付を見て「拾三通出來ました　大「ムヽ夫をどうした　筆「昨夜尊公の仰付られた通り足柄が今朝早く△印の附てある十通だけ持て二人曳で出掛ました　大「ヨシ〳〵其跡は　筆「モウ四通出來ますと飛澤が持て北部の方へ直に出掛る積で支度をして居ます　大「ソウか成りたけ早く仕玉へ時機が後れると無効だぜ　筆「ソリヤ心得て居りますと唐紙を締たるは更に手紙に取掛る爲なるべし此所へ忙はしく入來たるは大根津が爲には諸葛孔明こんどの仙居競爭に付ては初より萬事の相談を承はり是はコウ〳〵夫はドウ〳〵と問に應じて答へ智惠は舊家のグヂ〳〵に於るが如くに湧て出

て當意即妙に長たる木輪物四郎と云へる大才子「ヤア大將どうなさりました昨夜はサゾお疲でござヱましたらうと挨拶して座れば大根津は「先生今朝ッから君を待て居たぜ僕はアレからの例の東部の連中が後に殘つて君も知つてる通りに飲で居たらうが、サア酒が十分に廻て來て彼の老人の若井津守が僕に向つて、大根津君今晩の懇親會は實良ッた我が仙居區東西南北支部の重立た連中は皆滿足を得て歸つたゆゑモウ十に七八は大丈夫君のものだぜ殊に南部に於ては憚ながら私が控て居るに由て誰が何と云ても動かすものじや無い、此の前祝に是から直に北地に出掛けやうイヤ〳〵北地は敵の領内なれば新聞に吹聽の恐あり中立の巽にせうと言ひ出すと南部の連中が大賛成〳〵と云ひ出したのでトウ〳〵十三人づれで彼時から巽に押出し三時まで大騷をして四時まへにヤッと引に成つたと云ふ大散財サ僕は尻馬負三郎に萬事を賴んで直に歸つて見ると殆ど夜が明かゝつた所よ、一寸一寢入したが中々落付て寢て居られぬから六時前に起て手筈に掛つて居るが、此間から引た風が脱ぬ所に飲過したせいか熱が強くて頭痛がわれッ返る樣にする 大「ソリヤ困つたものですネ、氣を附て下さらないと私共までが困ります何でも來月の一日までは大事の所でございますぜ 大「ナニサ大した事じや無いワ、時に君は昨夜どうしたネ 大「僕はあれから西部の顔利連中が遊春亭に引上たと聞たから素知ぬ振で出掛て往て一座になり夫から一生懸命の辯舌を揮つて當區の候補は大根津其人

を外にして復あるべからずと功能を述べ立てソロ〳〵と利目の糸口を解て引張込だ所が大受サ、案じたるより皆が理解が早くて、ソウして下さりや何れにも致しませうナニ頓田にも甘居にも屹度唐瓢いたそうと堅い約束をした譯でも無く手附を取たと云ふ次第でも無いから宜しいと、先づ五分通りは承知の景色でござヱした、夫さへ聞や此方の用は濟だに由て歸らうとすると何が扨て飯より好な連中ゆゑ一寸二組附合玉へと勸められ平素ならば御免と云ふ所なれど此方にも大望のある身の上これも勤と思つて詮事なしに蒲團に座るとサア往なりに替環で三番たて投にされて大敗北サ、勿論僕がイザとなつて幻術を使ひさへすりや忽に敗北を恢復して利益を占るは容易なれど彼奴らが機嫌を損じては惡いと思つて體よく遊ばせて鴨になつて引上て歸りましたのサ、併し其お蔭で三十五の失敗は實に堪りませんよ埋合せが無いから…… 大「先生我慢し玉へ僕がその損は埋て上るヨ 大「ソリヤ有り難う夫じや恐入るがお立替の内に入れて置きますから宜敷 大「良しい〳〵ソコで愈々大丈夫と云ふ所が幾許に成るだらうと問へば木輪は懐中の手帳を出して大根津が前にある帳面と引合せ 大「コノ朱で圏の附てある分は大丈夫初ッから動かぬ口で昨日の所までゞ百十九ある七と朱で書たのが七分通り味方で是が五十七、五とあるが五分だけ此方に動いて來た口で是が六十三、三とあるが三分通り此方に氣がある連中で是が七十四…… 大「どうだらう良らうか 大「まだ良ない

テ中々安心は出來ぬ少なくても大丈夫な口が二百なくツちや枕を高くは寢られませんヨ併し昨夜の懇親會の御馳走と今日の手紙で此方に來る者が必らず七八十は有るに違ひない此節がら一瓢三圓なら宜相場ですからネ　六「平日なら一圓の價値も無いけれど此の場合になつちや仕方は無い奮發しようヨ何を云ふにも僕が愈々清婦湯の仲間入をして打て出やうと云ふ内相談がやッと三日前に出來たので競爭の手出しが少し遲かつたからどうも手後に成るが殘念だ　本「ナニ是位手が廻りや敢て遲きにあらずさ　六「先生は人の事だからソウ落附て居られ樣が若し此の仙居に失敗して見玉へ僕は妻子親類朋友に會する顏が無いゆゑ斷然切腹せにや成らぬぜ　本「若その時には僕も共に殉死いたして冥土までも誓つて尊公のお供を致す覺悟でござる木輪物四郎不肖たりと雖ども苟も德川家三河譜代の旗下三百年來の武士の果決して戯謔に盡力は仕らぬテ　六「さう先生が腹を据て助けて下さりや心丈夫だ、ソコで昨日先生が話した貝塚周仙の方はどうだネ　本「貝塚には今朝出掛に僕が寄て段々話したが果して彼奴が四十瓢ばかり持て居るゆゑ高直を持込で談判した所がそんなら後刻參上いたして御當人の大根津どのに直接に遇てお引合を致さうと申す事でござります　六「ソリヤ好都合だ早く來れば好に、と云て居る所に取次のものは手札を持て來て「ヘイこのお人がお出で旦那にお逢をと仰しやります、と差出せば大根津は其手札を見て、ナニ醫學師貝塚周仙とナ、サア奥座敷へお通し申せ

第九回　秘密の計略

倉志駒郎は凜然たる顏色を粧ひて表部大學に向ひ御同樣に平生の政治主義は正反對なれども從來知り合たる中なれば御互に此際卑劣手段は止に仕やうでは御座るまいか、足下が當家の甘居仁太君の爲に盡力ある事も僕が主義上よりして望梨之助君を助くる事も今日に於ては最早隱れ無き事實、勿論助くるも助けらるゝも公明正大の事件にして固より政治的の爭ゆゑ愉快極まると云ふべし、だが今や當仙居區にて顯れたる候補者は其數十八人なりと雖ども其の中で重立たる愛身塔の頓田山四郎似雄塔の望梨之助極粹本尊派の雪往御鷹と御當家の甘居仁太君で其他には、大根津鮫内、今出羽遲勘平ぐらゐに過ぎずで御座る、ソコで今日は是非とも甘居君に拜顏の上で請求いたそうと存じて罷出たが御不在とあらば足下に申述ぶると致さう、と仔細あり氣なる掛合振に表部大學は扨はお出なすつたと思へど、左あらぬ體にて「何にも貴說の如く御互に君子の爭なれば卑劣手段殊に腕力の脅迫策は僕の尤も忌む所でげすから極めて青天白日の運動を致すこと實に當仙居區の爲に賀すべしサ所で御談じの一條は、と問掛るに倉志は辭を改めて「イヤ別の義でも御座らぬが甘居君の主義を慥

に御明言ある樣に仕り度義で御座る、我黨とは原より反對なれど頓田は過日の演說に於て曖昧ながらも是が愛身塔の主義なりと演說を致し又我が望梨之助は昨日の政談に於て十分に個人的の政理を述て逐條に施政の目的を辯じたれば足下も定めて御承知であらう然るに今日に至るまで獨り甘居君に限つて一言も主義の在る所を仙居人に示されざるは如何の理由でござるナ 丟「併し足下、主義を明言せざるは甘居氏ばかりに非らず雲往、今出羽、大根津其外みな明言せぬのに獨り甘居氏のみを責られる譯は有まいが 合「イヤ他の輩は敢て論ずるに足らずだ甘居氏には足下が附て居るに由て主義の明言なくては相成るまいが 丟「所が甘居氏は公生明偏生闇と云ふ格言に則とり所謂公明偏闇を主義とするに由て前以て仙居人に表白すべき主義は別に御座らぬ夫故に公然たる演說も致さぬ次第 合「デモ夫では政黨の…… 丟「固より政黨の外に超然と獨立するに由て…… 合「然らば無主義と認めて宜しいか 丟「足下の認むる所に任す。……などゝ瓢簞鯰塗箸泥鰌の挨拶に流石の倉志も詮方なくてぞ歸つたる

跡見送つて表部は奥の一間に入來れば甘居は談判如何にと案じ居て急ぎ其次第を聽き「それなら是から中立の主義を演說しやうか、と云はせも果てず表部は押止めて「イヤ〳〵決して演說すべきの時に非ずでけす愛身似雄の兩黨を爭はせて漁夫の利を占むるが此方の目的だから成たけ弱い色を見

せて彼奴等に侮らせて置いて其間際に至つて勃然として起り始は處女の如く後には脫兎の如く運動が肝心で御座る、と諫め扨この先の運動はどうしたもので有らうナ、との問に應じて表部は「去ればサ僕が常々申す如く威力と金力とを以てし是を助くるに計略を以てするが仙居に勝を制する秘傳……甘「然らば萬事先生に……合「お任せなさいましと急ぎ二人引の人力車にて飛出し先づ鯰野郡司が許へと音信たり

表部は談話の後を續で「それだから郡司君是非とも貴君一骨折て下さらぬか……成ほど君の地位を以て干涉するは不可なりと僕も思ふ故にそりや止めるが君が一個人の資格で私交上の懇意よりして余は云々と信ずるに由て甘居氏を仙居するは尤も適當なりと信ずと云ふ工合で即ち君の思想を吐露するに何の差支も無い事だネ……ソリヤ承知君の名前では惡い他人の名前で立派に鹽辛宛の證書を入て置き玉へ假令摘發されても平氣サ……勿論々々暗雲伯は必らず君の盡力を喜んで推薦するに違ひ無い樹に寄らば大樹の蔭人に賴らば貴顯の髯で無くちや甘い事は無いよ……御同樣に此電信を外しては詰らないから。……と牡丹餅で頰端を叩かるゝ樣な話しに忽に鯰野郡司は一味となり「ソンナラ區內の口利どもに吹込で褒美の金は望み次第 丟「シー聲が高い

「オヤマア表部さんお珍らしいこと何して入らしつたのと女將軍の調子よき拶拶に表部はズッと上

り込み「時にお上（お上さんの略語）少しお前さんに折入て頼み度いことが有るが奥の離れは明て居るかネ 女將「ハイ明て居ますヨ 丑「ソンナラ離で。……と兩人は離座敷に赴き表部は四方を見廻し「時にお上、お頼みと云ふは實に甘居さんの事で、と云ひつゝ懐中より紙に包みたる目錄を出し、是は少しだけれどお土産の印に、と差置を見ればナンジャ金二十圓、女將軍は思ひ掛なき金子に益々ニコ〳〵と成り「どう云ふ譯でございますか分りませんが 丑「マア取て置き玉へ 女將「誠に有り難う、と帶の間に入れ「シテ私へ御用とは 丑「サア外でも無いが甘井さんを今度者員に出さうと云ふのだが堂しても動かない仙居人が、と懐中より帳面を出して「お上ネ、此の鼻下さんよ是さへ動いて呉りや其手下の連中が此通り廿七八人ある者が皆動くに違ひなしサ、其次には菊石さんネ是が又手下の二十人もあるが僕の手に乘らぬには困るテ、所が幸ひなるかな鼻下も菊石も此家のお客で毎晩の様に遊にお出だから茲は一番お上一はだ脫で働いて呉ないかお禮はきつとするから 女將「よろしい働て見ませう、菊石さんは極内だが此節はお酌のヒヨン子に大熱心サ、鼻下さんは御存の通り相替らずずる助にアツイ〳〵だから旦那貴郎アノずる助とヒヨン子に少し心附をしてやつておくんなさいましな。ソウすると私が兩人に吹込で貴郎ヨウ〳〵と言はせませう 丑「そいつは有り難いお上どうぞ頼むぜ 女將「きつと受合ますが貴郎兩人に幾許やつて呉ますネ 丑「ソウヨ首尾よく兩人が菊石と鼻下を承知させて其手下まで引込でくれりや兩人に百圓ヅヽ、 女將「私しには 丑「お前にも百圓 女將「きつと 丑「きつとサ 女將「だが頼む時に少し遣らないと極りが悪いが 丑「承知だソレ手附に百圓 女將「旦那誠に有りがたう大丈夫きつと遣て見せますよ

第十回候補辭退

者員仙居の期は一日々々と迫つて來るに從つて候補競爭の勢は一雨々々と烈しく成り菓子の折や鰹節の切手は既に陳腐の手段に屈し懇親會の招待も談話會の振舞も亦已に常套の計策と成り夫位の事では誰も肩を入る、者なきに至りければ候補者の心痛は各々一方ならず、大抵これ位も資本を卸したらば何の厨瓢の二百や三百は手に唾して取るを得べしと最初に立たる豫算はずつと狂ひ其の三倍四倍は愚なこと此勢ひでは見込の十倍も掛らうも知れず、此上は殘念ながら思ひ止まるか但しは乘掛つた舟だ往所まで艫付ろと決心するか二ッに一ッと云ふ場合とはなりぬ。初の程こそ十八人の候補は銘々に本陣を据て放差物を樹て居たれ今日では十餘人のものが凡は落城して相殘つたるは幅田（似雄）望（愛身）雲往（眞險）の三人が恰も鼎立の狀を成し中にも雲往は自から清婦湯の志願別動隊と云ふ色を見せては保守の門閥連を味方となし神儒佛の三道を以て宗徒と頼み兵粮には敢て不

足を告げざれども何を云ふにも當節の浮世の風には未だタント吹かれざる流行後れの連中なれば多數の程は如何あらんや覺束なし。是に變つて望梨之助は軍用金こそ不足なれ此十餘年このかた度々火の中に飛込だる樣な目に遇つて諸人に知られたる顔役その上たとひ仙居人の資格が有らうが無からうが迂論狹議を眞向に駁して誰にでもお相手に成らうと云ふ當區内の英雄豪傑が與力同心して有るなれ敵はざる其時は腕づくで參る決心仙居人の爲には中々以て薄氣味惡き候補者なり。扨また頓田先生は初から如才なく立廻り阿濃園伯の勢力にて大株一六と云へる當時流行の自稱紳士が後に控えて腰を押し其上に南高虹内參謀がチヨコ〳〵立働くゆゑか相應にお味方が有りさうな樣子なり。去れば當區内にても我區の候補は三人の爭ひに在りなど、風聞して彼の廿居仁太が事は打忘れたる如くに思へば愛身似雄眞險の三黨にても、ナンノ廿居の無主義が何程の事やあるべきと甘く見て侮たるぞ油斷なる。此外は例の大根津鮫内に今出羽運勘平の兩人が大勢の既に移つたるを悟らず惡軍師の煽動に乘せられ中原に鹿を爭ふ積りで暇を潰したり頭を下げたり氣を揉だり肝を冷したりお負に金を費やして他人に笑はるゝを知らざるは實に氣の毒千萬なりと云ふべし

大株一六は素より愛身塔の建立には損得の山緣とては無けれども阿濃園伯に引されて據なく頓田山四郎の腰押となり段々と注込で今では既に大枚四千圓餘の貸と成たれば最はや騎虎の勢頓田が敗北

しては原も利も無くして仕舞ふに極つたり何でも者員にした其上で拂はせるか予が爲に働かせて金にする外は無いと例の大きな算盤を取つての駈引、さらばモ一ツ追引を掛けるサと決心を極めての大肩入れ。今日しも南高の軍略に從ひ兎ある割烹店の奥座敷で今出羽運勘平を招ぎ三人にてヒソ〳〵話の最中なるが南高は今出羽に向ひ「成ほど先生も是まで苦心をして居ながら今日に成つて自ら名前を候補の内より退と云ふは成され惡くからうが併し其の成し惡い所を斷行するが即ち政治家の果斷では御座らぬか……ナンノ〳〵歐米諸國でも澤山に其例あり英國のフオックスはグラント將軍と候補を爭ひ少數なるべしと早く悟てスクラスボルグの選擧場より退たるは近代の美談、又佛國のガンベツタはモスコーの選擧に於て自分の投票を盡く敵方のビスマルクに贈て退たと千有餘載の今日まで黨派の鑑と成て有る先生も其例を御採用なさいまし……失敬ながら先生は少數と知れ切て居ますぜ……夫りや先生の切て出た時が殘念ながら遲かつた故サ今や開立の競爭の結果で若し似勇に勝を制せられては國家の秩序安寧を保つ爲に頗る掛念なり、と云つて若し眞險に多數を占められては我が進歩我が自由はどうなるで有りませうか……先生の主義は小異なりと雖ども我が愛身塔と大同と申さねば成らぬ座して反對に勢力を取られんよりは寧ろ主義の近い所を助くるが即ち英明の政治家豪膽の大器量では有ませんか……夫故に先生早く勝敗の機を察して候補を辭し「余に入るゝ

唐瓢は盡く頓田に入れよ余は感ずる所あつて頓田を助くる者なり」と明言なさるが仙居場で敗北するよりは遥に立派でけすぜ、……と利害を說き得失を辯じて唐瓢讓與の談判を開きたれども今出羽はどうし樣かこうし樣かと自分で自分の決心が附かず「成ほど御尤では御座いますが僕の方にも亦相談する向もあれば其の上で御挨拶を致しませう　㐧「イヤ夫りや先生に似合はざる御返答、時期は最早三四日の内に切迫して居ますに由て御即答下さりませ　今「デモ即答と申す譯には參りませんからと聽入さうも無き景色を見て大株は形を直して今出羽に向ひ　㐧「先程より私と南高さんと二人で段々御懇談を致し、申さば手を盡したと云ふものだが夫でも貴公は我々が仲裁をお聞入は下さらぬか……イヤサ御聞入が無くば是非が無い無理にとは申まいが左樣に相成る上は御懇意上の御話しは是切として改めて私より貴公にお掛合ひ申す筋がござる（と傍なるカバンより書類を取出し）此の貸金證文は如何して下さる期限は疾に切て居ますがとリせしが　今「成ほど期限は過て居ますけれど利息はチャン〳〵と毎月拂公へ運んで居りますから……　㐧「ソリヤ當然の事サ私の方では急に金子が入用だから是非とも今月中に元利そろえて御返金下さい夫が出來ずば直に抵當物をお渡しなさい……公證人の手を經て居ますからお否とあらば執行いたします……イヤサ貴公に人情が無けりや私の方でも表向にする丈の事サ、と退曳させぬ貸借談判

アハヤ事將に敗れんとする許に迫るを見て　㐧「ソウ大株さんの樣に仰しやつては是迄の御交際に傷が附て今出羽君も紳士の社會に面目を缺く次第コヽは何とぞ僕にお任せ下さいまし僕が然るべく取扱ひませうに由て。……と合鎚を打ち又もや話を轉じて候補の一件に移り、夫より凡四時間も彼是と掛合に掛りとゞの詰りが、大株は無手數で一ケ年の延期を聞入るゝ事に成り、其代りに今出羽の手にある唐瓢三十七枚は頓田に讓り渡すべし。今出羽は「僕ハ時勢ニ感ズル所アッテ奢員ノ候補ヲ辭退ス僕ニ唐瓢アルハ無益ナリ」と立派に廣告して頓田の爲に周旋すべし尤も是まで費したる入川の幾分を補ふ爲に頓田は差向き五十圓を今出羽に贈り愈々頓田が當仙の上で更に百五十圓を贈つて其費を償ふべしと云ふ契約書を取交す事になり今出羽は泣々是を承諾したり

第十一回　大競爭

㐧「上人々々此新聞を御覽になりましたか　高慢上人「イヤ未だ見ない樣だドレ〳〵拜見を、と懷中より眼鏡を取出してしつかと掛け新聞の廣告部内に朱で印の付たる所を讀むに

特別廣告

望梨之助君

本區ヨリ仙出ノ衆者院者員トシテ我黨ハ此望君ヲ仙居スベシ矣我國民ノ爲ニ自由ノ魁トナツテ大義ヲ唱ヘ民權ノ天賦ヲ論シ國事犯ノ爲ニ久シク獄ニ繫カレ次テ保安條例ニ遇テ退去ヲ命セラレ遂ニ立憲ノ今日アルヲ得セシメタルハ望君ノ力其多ニ居ル焉是故ニ望君ノ外ニハ當區ニ於テ者員タルベキ人物ナシトハ全區内ノ公議ナリト信ジテ我黨ハ是ニ疑ヲ容レズ若シ否ト云フ者アラバ邪說ナリト認メテ我黨ハ正論ノ及ヲ揮テ之ヲ紛擾トナスベシ矣因テ之ヲ豫告スト云爾

年　月　日

當區有志仙居人候補

倉志駒郎
大螺吹高
御彫倒四郎
樫野素徹喜
赤井穴唐

此外　有志數百名

「上人どうで御座います　「いや早言語道斷の次第じやの　「是でも無智の愚民は欺かれて此漢に唐瓢しまいものでも御座いませんぜ、と云ふに傍なる　「是は〳〵實に不埒千萬なる荒夷の振舞じやモウ捨置く譯には參らぬぞ此の玉垣明石中臣祓が燒鎌の敏鎌をもて斯る蒼蠅なす禍どもを切拂つて遣らねば皇のすべら尊の知し召す大御國の御爲に相成らぬ、トは云へ祓が一人で向つても彼奴等が惡氣みち〳〵たる狹霧をば村雲の如く吹掛るには力も及ぶまいテ……ナニ力石賴母どのが力を添て給ふとナ夫は天晴壯士の賴みある交りじやが、待たまへ〳〵力づくでは勝ても誠の勝にならぬには困るてナ、のウ增長寺の阿闍梨貴僧は如何思し召すか　「殊勝の御尋かな仙居の事から斯く瞋恚の焰を燃すさへあるに修繕の街に携はらんは勿體なし思ひ止り給へ〳〵、と切に諫れば玉垣は心中にて占たと思ひ　「然らば貴僧の御諫に從ひ思ひ止り申さんが去にても棄置んは如何なり兎やすべき角やあるべきと小田原評定の最中に候補の雲往御腮はいと愁ひたる面色にて息せき此座に來り挨拶もソコ〳〵せう昨夜一晩の中に世の中の形勢がガラリ變りました　「皆樣ま何と致したもので御座いまとで御座るナ　「サレバサ僕が今朝早く起て例の貝塚周仙が宅をわざ〳〵尋ね來て賴み置たる唐瓢の一件はどうで有う四十ぐらゐは慥に經つて居ますかと問掛て見るとアノ周仙の皺醬者めが澄した

面で、左樣サ愚老の手で先づ三十七八は已に一纒に固まつては御座るが尊公何程の謝儀を出し給ふか、イヤナニ愚老は一錢たりとも懷ろにする料見は毛頭ないが彼の仙居者は所謂俗物野鄙の代物だから無鹽斷食では話しが追付まいテ既に米國獨立の初めに當つて議員選擧を行ふた時に辨慶が唐瓢の制札を書て仙居人に示したる文に「此孔西洋に無き所なり若し一期切望の輩に於ては羅馬唐瓢の例に任せ一瓢を入れば一俵を贈るもの也」と書て大多數の唐瓢を得た事が米國國會病理論に載てあつて後世これを山氣の制札と名くとあるじや、此例に由て尊公唐瓢一ッに付き上米一俵をお出しなさい、イヤ〳〵三斗五升俵じやいかん三斗俵サなんの一瓢一俵は賤もので御座る尊公がお否とあらば外にも買手が澤山ござる愚老の方でも急ぎますから早く御決答を伺ひ度と實に驚き入たる彼が云ひ條 ×「ム、扨は彼奴欲に掛つて變心したよナ 玉「憎つくき貝塚 高「ア、淺ましき人心じや カ石碑 母「あの藪毒め一本參つて仕はさうか 高「止すべし〳〵マダ〳〵騷ぐ所では御座るまい 雲「夫では何と致したもので御座りませう 高「さればサ別に宜い分別も無いゆゑ仕方が無い本堂の寄進に附たと明らめて一瓢に一俵づゝ出すサ 雲「ソウしますと一寸五斗俵で四十俵、玄米で二十石、一石十圓の相場にすると二百圓に成りますが 雲「それだけ奮發せずば往まいてな ××「雲往さん此は奮發なさるサ四十俵や五十俵には替られぬから。……と諸人に勸められ、然らば夫と粗々相談が極たる所に入り來る人は草分權太兵衛あわたゞしく烟草入の前日より郵便端書を出して是御覽あれと示したり其文に云く

此頓田氏ハ當區ノ耆員ナリ當市ノ三事會員ナリ當國ノ府縣會耆員ナリ三タビ耆員ニ再選セラレ一タビ副耆員長ノ高座ヲ占メ衛生會員、公民會員、懇親會員、貧民救助會員、慈善會ノ世話人、お祭ノ先達ナリ當區ノ爲ニ盡力スルコト斯クノ如クニ候間此人ヲ耆員ニ仙居仕度御賛成御唐瓢ヲ切望ス謹言

年　月　日

當區耆員候補
頓田山四郎殿

（表書）草分權太兵衛樣

當區眞誠の有志者
凡三百六十五名餘

高「イヤハヤ此通りに功能書を廻はされては大變じや〳〵 草「私の宅に來る位だから外々へも滿遍なく配たらうネ 玉「勿論の事であらう 高「此上は此方でも新聞に廣告しやう 草「よからう 玉「端書

を郵便に入れよう 亭「よからう カ「引札を往來で撒せよう 亭「よからう ×「廣告屋を賴んで當區内を觸て貰はう 亭「よからう 亭「愚僧は信者を集めて言て聞せよう 亭「よからう 玉「やつがれも氏子を寄せて說得しよう 亭「よからう 玉「手下を大勢廻して敵方の固まりを崩させよう 亭「よからう 一回「入費は勿論一切出して貰はう 亭「尤もよからう 亭「何分とも宜しう 一回「よからう〳〵

第十二回 仙居の前夜

甲「イヤ是は忙しいぞ〳〵丸でお祭の宵宮と大晦日とが一緒に來た樣だぜ 乙「其筈よ今日は六月の晦日で舊曆の盆と同じ事だもの 丙「其上に今日は夏越の祓を行ふ日じや無いか 丁「其の祓の茅の輪を潜つて當るか當らぬは明日の仙居で極るだらう 甲「勿論の事だ 乙「だから何でも今夜が天下分目の所だぜ 丙「どうせ今夜は夜明しさ 丁「一休み休んだらサア又々唐瓢約束の催促に出掛やう」とは是れ獨り一家の騷のみに非ず當區内で候補者に名を出したる人々所謂頓田、望、甘井、雲往、大根津其外の輩は皆この景況にてありぬ、扨も御苦勞千萬の事どもかな

頓田山四郎は自から女關に出て「オイ〳〵貴公は何所に往て來た……ナニ南部の方を巡回して來たと、ドウダ帳面に附て居る丈は大丈夫かネ……何と云はるゝ今夜に成つて怪しい向がある……似雄塔の脅迫でか……フーあの甘居の手で表部めが攪廻したと……ヘエー入川を惜まずに出して手に入たと云ふのか夫は慥か……ソリヤ大變、此方も手を廻さにや成らぬぞ、と大騷ぎの眞ッ最中。南高虹内は二人曳で馳せ歸り 當「大將〳〵油斷は成りませんぞ我が無二の味方と賴みたる仙居者の中に裏切の輩が見える樣で御座るぜ 甲「僕も唯た今其注進を承はつたに山て大心配して居るが軍師どふ仕たら宜らう 炭山良太「どうで相手が卑劣手段を以て競爭する上は此方でも其策を直に川ゆるサ 丙「尤も〳〵此方でも力の及ぶだけは手を廻して見るが（卜頓田に向ひ）大將失敬ながら彼奴等が無暗に出す樣に出しては水の手が續きまいすまいてナ 卜田（情ないと云ふ顏附にて）ソウサ金づく沙汰では心底に任せんには困るネ 風蘭子「然らば腕力で脅迫するか 當「その事〳〵是れ窮策と雖ども此場合では試る外は無い、兼て此方でも賴んで置た雇壯士を利用するは此時だ 卜「イカにも左樣サ仙居人の宅に押掛て是非とも約束の通りに明日は唐瓢せよ變約なさば目に物見するぞ合點かと嚇かして從はしむべしだ 當「宜しい〳〵其手の手配は風並君と時世持節君とに委任するぜ 炭「夫から我輩は……… 卜「貴君は朽唐出放太君と申合せて敵方の連合を破ることに從事し玉へ 炭「シテ其の手配は

卜（炭山の耳に口を寄せて叫き）分つたカネ 一同「心得ました

舞踏廻つて此れは雲往が屋敷奥座敷の體。居並びたる例の雲往御愚に高慢上人、草分、玉垣、力石、

掛卷、向志の面々なるが世の中の風は今夜の内に斯く吹替つたりとは夢知らず「我々の勢力を以て「我々の德望に由て「我々の恩誼に對し「我々の舊交に因み「我々の周旋に應じ「我々のお顏を立て豫約の連中は必らず明日は雲往に唐瓢するであらう其外にも猶唐瓢が少々は有に相違ない「大丈夫〳〵安心すべし「先づ前祝に一酌いたさう「諸君も今夜は滿酌して十分に英氣を養ひ玉へ〳〵「ソコで明朝は寅の一點にお祭をして武運長久の祈を玉垣さんにお願ひ申す事にしたに由てお備もの丶用意をして置けヨ「ソウだ〳〵個樣な爭ひには孔雀明王の法を修するが宜しいとナ「成ほど〳〵左樣で有らうソンなら上人にお願ひ申して直に御修法の壇を設けて戴かう「明日の辨當は宜しいか「赤飯をふかすは早からうか「前祝だから宜しいなら赤飯に仕よう、それじや辨當も辨松に云ひ附るか「勿論のこと「ナニ三百人前はきつと入るゼなど丶中々忙がしき景色にてありぬ

又舞臺が廻れば望梨之助が住宅の場にて主人は大きやかなる眼を猶大きくして睨み廻し 呉「倉志君どうだヱ反對の奴等が卑劣には驚き入るぜ頻に我黨の事を讒謗したる印刷ものを仙居人に廻送するとは怪からぬ、官吏が斯る秘密出版を知らぬとは探偵吏は何を仕て居るので有う、不注意極るじや無いか 倉「實に警察の寛大なるは遺恨千萬出版條例などは十分に嚴に履行して貰はねば人民の自由が保て無いでござる夫は格別としてモウ此場合に至つては勢力の外に賴む所なしだ 呉「いかにも其

通りだが勢力をどう利用するネ 倉「ナニ別に思案を費すに及ばず、大螺、御影、樫野、赤井等に號令を授け壯士輩を引連させドシ〴〵と仙居人の宅に押込ませて談判に及び腕力で從はせるに限る其方が手取早いサ……ナニ〳〵愛身塔が我黨の眞似をしても何の利目が有るものか、尤も候補者に成うと思つて骨を折て折角地租十五圓の資格を拵へたに地價修正の天變に遇て其資格を失ひ不平を懷て居る連中は大抵僕が同意させて有るに由て此輩を煽動して今夜中に說き廻らせよう……大將氣を落し玉ふこと勿れ頓田と雲往は急に思ふ所あつて候補を辭すると云趣意で當人どもの手紙にして今夜の内に郵便に入れて遍く仙居人に配達させよう是また敵黨の策を破るの一計で御座る……御同意とあらば互に取掛らう諸君々々僕が草案を立るから大勢で手分をして淨書をして呉れ玉へ

又再び舞臺が廻れば甘居仁太どの丶奥座敷 日塚周仙「……イヤ〳〵往ませんネ抑も此事たる不佞が願つた譯では無く全く尊公の御依賴に由て然らば骨折て見ませうと不佞が應じた義でござるテ、夫を今夜の鍔際に至つて直切とは御人體に似合はぬと申すもの……是は御内々だが大根津氏からは一瓢に付て十〇づゝ出さうと云はれるし又雲往氏からは一瓢に五斗俵で二俵づゝとまで競て參つてござれど、不佞が先づ〳〵と控へて居てナ尊公さまの御都合を第一に伺ッて其上の事に致さうと存じて居ますが……ナニ不用とあらば宜しい不佞が直に他の候補者に渡す分の事でござる……夫は仕方が無

い、現に塵一ッ附て居ない立派な唐瓢が三十八と云ふもの揃つてあるから其爲に勝負の數が動くは當然の理じや御座らぬか、不佞を恨み給ふ事なかれサ……待と仰せあつても最はや午後九時に近し待つ事は出來ませんヨ……そんなら耳を揃て五百圓お出なされますとナ、天ばれ〳〵流石に愛國の精神感腹の至り不佞恐れ入たネ……イヤ只今お金を頂戴いたして今夜の中に分配いたさねば成りませぬ……然らは不佞よりお預り證書を差入れ置ませう……ソレ御覽じろ是で尊公さまの勝利大丈夫と定まつて見れば五束は賤いものですぜ……と今夜に至つて足許を見込み飛切の高直に賣たるは醫者は下手でも掛引は上手とぞ知られたる

貝塚が引返したる後に來たるは女將軍のお慶……「旦那御安心なさいましヨずる助とヒヨン子が大骨折でとう〳〵鼻下さんと菊石さんを說附て「ヨウ〳〵そうして遣つて下さいましなネー私も此のお上さんに賴まれたたからヨウ〳〵」と旨く持掛たのでお二人も承知して先程此書付を私にお渡しに成りましたヨ（ト帶の間より仙居人の名前四十二人ズラリと書てあるを出して渡し）へへ女の勢ひと云ふものは强氣ですネー……きつとお禮は下さいませうネ私には別段の骨折賃を……三日の晩の御馳走は私の宅で……有り難う……お客さんが五十人、藝者お酌が三十人よろしう御座います……表部「ヤレ〳〵是で安心した御主人公恐悅々々……ナンノ高いものじや無い此の二口で丁度八十瓢安いものサ……進では國家の爲にし退いては一身の爲めにす功名富貴の榮譽人生の一大快事……主人公明日から A maim. p. でぜ

第十三回　仙居の當日

其前夜は徹宵の騷ぎをして駈け廻り何でも敵手には負を取らせて我こそ仙居に勝利を占んなれと自定候補者の面々は手の屆くだけは稼ぎ散したるに夏の夜のならひとて程なく夜は明はなれて仙居當日の朝とはなりぬ昨日までは遺に人目を憚つて候補者の當人も周旋人も先づ目に立ぬ樣に走り廻つたれど今朝に至つては中々夫では追付かず「ナンノ余の方ばかりじや無い敵手の方でも遣て居るもの構ふ事が有るものか」と御互に表向の大運動勇ましくも亦た面白し。仙居場の表門の向ふ角なる氷屋の店を上下とも借切て陣を取たるが誰ござらう愛身塔の顏役若手の才子頓田山四郎閣下でござ。彼方の八百屋を惣仕舞にして本營となしたるが眞險一派の其中で極粹本尊の行者雲往御鷹大人の手と承はる。横町の人力屋は其店きたなしと雖ども其主じは賤業に似合はざる慷慨家にて夙に我黨に志を寄せたる賴母しき人物とあつて此に出張つたるは其名を知られたる似雄塔の望梨之助先生一際目立たる人數なり。扨また半町ほど離れたる溫泉を借切て本陣を据たるが是ぞ即ち甘居仁太君

の勢とぞ聞えし。北外大根津鮫内どのも小勢ながら別に本陣を設けて仙居の合戦いまや〳〵と待受けたる體由々しかりける次第なり

（雲往の本陣）草分權太兵衛は夜の明ぬ内より此所に來つて世話を燒き「オイ鈍助々々何をマゴ〳〵して居るか辨當の支度は出來てあるか……ナニ〳〵朝飯の辨當じや無いお晝の辨當だ氣の利ねエ奴だ……愚頭兵衛や其ケットを座敷一面に敷かせて下つし……ナニ烟草盆が足りないト予が宅から持て來て有はづだが……お茶とお菓子の支度をして置たか……モウ雲往が來さうなものだが何をして居るだらう肝心の當人の癖に……ナンダと疾に來て居る……二階で相談して居ると……ムヽソウ〳〵先刻に過つたツケ……笑ふ事は無いソ粗々ツかしい奴らだ、と一人で氣を揉だりけるが「ソウ〳〵予や仙居立會人であつたドリヤ出掛やう……ア、跡が氣になるなア、と心殘して仙居場に出掛たり二階では雲往御愚眼をグット釣し上げ揃張たる聲にて「エヽ掛卷君ソリヤ實に怪からぬ所爲でござるナ……夫では昨夜その郵便を入れて今朝配達させたと見えるが……玉垣大人のお宅へも今朝屆きましたか。と詰いて見たる一通は左の如し

拜啓然ハ小生儀當區仙居人諸君ノ推薦ニ由リ耆員ノ候補ニ鄙名ヲ掲ケ置候處熱々天下ノ形勢ヲ察シ人情ノ變遷ヲ見ルニ今日ハ是レ小生ガ盡力ヲ要スベキノ時ニ非ズ蓋シ機會ノ未ダ到ラザルニ當テハ英雄豪傑ト雖モ奈何トモスルコト能ハザルノミ矣依テ斷然候補タルコトヲ謝絶ス貴君ノ望ニ背クニ似タレドモ不得止ニ出ルト云ベシ貴君請フ他ノ候補者ニ唐瓢セヨ謹言

〇〇〇〇年〇月〇〇日

〇〇〇〇〇口貴下

前候補者 雲往 御麾

カ石組扣「實に怪からぬ所爲だが雲往君貴君が此樣な手紙をお出なすつた事はござるまいテナ 男「勿論く〳〵夢にも覺の無いこと 神樂言「ソレジヤ所業所業であらう向島墨田堤「變事中川論語道斷の次第、僕は仙居權が無いに由て僕の所へは參らぬが既に玉垣、掛卷兩君に屆た位では一般に配達したに相違ない雁吐全く破れて節操地を拂ひ好功希利の小人天下に充滿すとは痛哭に堪ざる事でござる玉垣の五「いか

にも其通り是が神ながらの道を守つたるすべら御國の有樣なるかア、人の心は飛鳥川頼み少なき浮世なりにけるな カ石「ソウ嘆息ばかりして居ても仕方が無い、ドウ仕やう、イツソ僕が力を以て彼等を糺彈し樣か 高俊上人「イヤ〳〵早まり玉ふな〳〵此の僞筆の手紙は全く反對の奴等が所爲に違ひ無しと知れてはあれど其證據をつかまへぬ内は掛合て見ても彼は一向に知らぬ事だと云て所謂水掛論に陷るじやコリヤ後日法律家を頼で智恵を假るとしてまづ差向きの處は仙居人の宅を手分をして直に廻つて右の手紙は僞筆じや敵手の奸策じや と斷つて其序に唐瓢に早く出て下さいと頼んだが好ワ 翠「いかにも其通りじや早く仕やう〳〵（望の本陣） 聚梨之助「倉志君手筈は好かネ 合「ズツと好だ仙居場の出入は盡く赤井氏が受持で一々僕に注進する事になつて居る 翠「シテ〳〵説得の方は 合「大螺、御影、樫野等が隊を引連て三方に分れ何でも仙居人を車に乘せ危なさうな者には相乘をして仙居場の門前まで引張て來るべしと命じて置きました 翠「ヨシ〳〵仙居場には入ば中で又々説得する、ダガ最後手段を仙居人に言て聞したらうか 合「勿論サ我黨に對して望君に唐瓢すると盟約して置ながら若し他人に唐瓢する事あらば汝等不測の禍を蒙るべし後悔すること勿れと昨夜から立派に斷らせ申した 翠「妙々實に其通りだ、と話しつゝ表の方を眺め「ヤア〳〵唐瓢に來たな……ハヽア唐瓢を濟して出て來た……誰だ……某に某々……歸りには此に寄る筈だが……オヤ横町にそれた……

…此の連中だ〳〵……オイ〳〵本陣は此だぞ……此だと云ふに……ヤア是や變だ溫泉の方に往たぜ……アレ〳〵氷屋に寄つた……下賤下郎め扨は變心しおつたなア（頓田の本陣） 頓「其通り〳〵是が即ち背水の陣だネ……どうだらう結果は、どうだらう 南高「氣遣ひ玉ふナ大丈夫…… 頓田「風並君人力車は好かネ手が廻つてるかネ 風並「帳面の豫約者には皆車を廻しました 南「催促を出したか 哲庫出放太「僕が今朝早く巡廻して夫から炭山が第二度、時世が第三度目を廻つて、是から三人が一度に出掛る所でございます 頓「御苦勞〳〵と云ふ所に一味の連中が唐瓢して歸り道に立寄るを出迎へ「ヤア大きに御苦勞さまで……大きに有り難う……先づ二階にお通り下さいまし……一寸一杯差上たい三陣みな斯の如し甘居が入用構はずに出掛たる溫泉場の本陣推て知るべし、參謀連はフロックコートのお揃ひ、周旋人は一列に羽織のお仕着せ、下廻りの向は揃の半纏で酷い賑かなる景氣であつたと知り玉へ

第十四回　唐瓢の開函

仙居長どのは鹽辛を骨たる閻魔の如き顔付にて正面の椅子に腰を掛け威嚴に構へたり、其左右には

仙居立會人七名思ひ〳〵の出立にてズラリと並び我等は苟も仙居人の代議士なりと云ふ氣取で乙に横風な面をなし、誰が高點で有らうが差搆ないと思へる中立の先生は退屈さにコクリ〳〵座睡を初め、又候補に掛り合の有る人は書記が讀上る名前を聞く毎に喜んだり案じたりして安からぬ思をなせり

諸候補者は兼てより此開函が一大事、のるかそるか二ツに一ツ、其の勝負を聞かぬ内は飯も菜も咽に通らず、この數夜枕に就てもまんじりともせぬ大心配、御酒でも少し參らずはと飲で見ても醉が出ぬと云ふ有樣なれば其心配はお氣の毒千萬これも畢竟我々人民の爲を思召しての御心配ゆゑ仇おろそかには存ぜぬが別に御禮を申上る程でも御座るまいか唐瓢を調べ初ると兼て諸方の候補者が入れ置たる見張のもの忍のものは各々連絡を通じ一時ぐらゐづゝに取次を置て傳達をなす注進は恰も櫛の齒を引が如く蠣殼町で米相場が亂下する時に本場の立會を仲買の門口にて呼ぶと一般なり。

……注進「百五十八瓢でござい 頓田「ムヽ望は 注「百飛で九ツ 頓「それから廿居は 注「百九十瓢 頓「エヽ余より多いか 注前「なにかの間違じや無いか 頓「早く聞直して來さつし……二度目の注進「十一時半の中休までの所では大根津が四十一瓢 頓「ムヽソレから 注「雲往が百十二瓢 前「ヘエー夫から 注「望が百三十五瓢 頓「中々あるな夫から 注「貴君が二百二十六瓢 頓「(笑を含で)ハヽ夫れから 注「廿居が

二百十三瓢でございます 廿「ソウだと廿居から見ると内の大將が十三瓢多い……な大將恐悦々々山が見えましたぜ 頓「どうだ大丈夫だらうか 前「大丈夫とも大丈夫金の脇差クルツプの大砲風蕉髮太「クルツプの大砲は妙だ 炭山賤太「クルツプの大砲ならば宜けれどもくるうと云ふ字が氣に掛るネ 前「つまらねネ事を氣にするぜ、エヽ大將廿居の手で金に厭せて働いても大將が大多數ですぜ、ソコで三時頃に成ると惣數が知れるとして今日は直に祝宴を催さにや成るまいか 頓「内々當込亭に注文して置たヨ 前「夫は御手廻し先づ前祝に大將驕り玉へ〳〵 頓「晝飯はまだゞネ……オイ〳〵八内かの山薯屋に往て急で鱣の荒い所を三圓だけ燒て持て來いと云へ……ナニいつもの鱣飯じや無いワ、氣の利ねエ奴だ

愈々午後に成る、候補者の胸は益々ドキ〳〵して一日千秋の思をなせり。話し替つて當區の或る所では劇場を借受て慈善會の芝居の催し昨日の仙居會に比ぶれば遙の大入大景氣 甲「ヤア朴木さん御見物かネ 乙「左樣サ慈善の事だから 丙「オヤ〳〵度外衛門さんに平助さんお揃ひで 丁「ヨウ是れは〳〵時に昨日の仙居にお出掛なすつたか 甲「イヽエ據ない用が出來て參りませんでした 乙「大さう賑であつたさうですネ 丙「さうださうな 乙「夫じや皆さんも出掛けずかナ 丙「お前さんは 丁「私も矢はり出なかつたのサ實は、廿居、頓田、望、雲往、大根津の五人銘々から賴まれて 丙「さうだ

らう當人に周旋人と御免の勸化が本堂の建立見た樣に忙しい所に押込で來て　乙「何でも私を唐瓢して呉ろと其の煩いことは　甲「丁度昔の滑稽本にある一人娘に婿八人、どうも治りが付か無さネ　乙「彼方を立れば此方が立たず用でも無い事に恨まれても詰らぬと思つて實は方外さんと二人で昨日の一番滊車で大磯と出掛たヨ　乙「智恵は誰でも同じだネ私は向島の方へ往て葬方に戻つて來たぜ　丙「私は釣に　丁「私は墓參りに……　甲「ハヽヽヽヽイヤ何でも障ぬ神に祟なしサ店先で壯士にでも大聲で議論をされて御覽じろ實に商賣の妨だからね……五圓や三圓のお禮にや代られねエから新聞豆子「是は當區選居者員簽仙者次點者の唐瓢數を載たる〇〇新聞の號外附錄、本紙とも慣がたつた一錢五厘」と賣り步行く、サア唐瓢の員數調は濟だが點數はどうだと右往左往の大騷動その結果は左の如し

三百四十五點	登仙者　甘居仁太（無主義）
三百〇六點	次點者　恒田由四郎（愛身）
二百二十二點	同　望梨之助（似雄）
二百十八點	同　雲往御照（眞險）

八十三點	仙居唐瓢總數ノ內棄權シタルモノ
七十九瓢	
合計千百五十三瓢	

（大根津の宅）「オヤ旦那どうか成つたか……サア大變旦那〳〵旦那ヨー……氣を慥にお持なさいヨ……早く水を持てお出つたらお出なネ……旦那ヨー〳〵と呼ぶ聲に大根津鮫內は漸々息を吹返して　大「モウ大丈夫だヨ……頭が痛い〳〵急いで棒庵先生を喚に遣つて呉い、ウン〳〵〳〵（頓田の宅）見舞の人「イヤ何とも何とも御挨拶の致し方も無い次第是迄手を盡して御覽なすつた甲斐もなく御愁傷のほどお察し申上ます……實にお力落しの譯で、と左ながら死者を吊する悔みの口上に主人の頓田は一滴の涙も出さず齒を噛〳〵て我慢をしながら左も無き顏色を粧ひ　甲「イヤ皆さまも御丹誠下すつたが案外の結果でどうも仕方がございエやせん　乙「實に怪からぬ事で當區は的切貴公に違い無いと思つて居ました　甲「誠に有り難う實は私が油斷のゑでけす今日と成ては仕樣が有やせん……是じやァ初度の者院が思ひ遣られますチ、國家の爲に嘆くべしさ

斯様に失望の體なれば雲往が宅の悲嘆述懐は嘸かしと思ひ玉へ、此悲しみに打て變つてお目出度は廿居仁太どのゝお屋敷「ヘイお目出とう「ヘイ恐悦「誠に結構「お手際が顯はれて「實は愉快千萬「天晴の御功名「此上も無き御勝利「天下の豪傑「今日の大政治家「數年の内には耆院の首領「黨派の總裁「總理大臣とお世詞の競爭に主人の甘井仁太は大得意の大悦喜いよ〳〵男振が俄に一倍も二倍も善くなつた樣な氣持になり直に「なんの予に人望があつて予が人物だから仙居に逐つたのだと云ふ面付をして人に對しては故と左まで苦しく無い振を見せても顏の締は忽ちに解てニコ〳〵

第十五回　登仙の祝宴

杯舞ひ觴飛びドヨメキ渡る酒宴の一座、恰も是れ將軍戰に勝ち敵を擒にして凱歌を奏するの夕宰相民を治め化を敷き昇平を賀するの曉、大得意大滿足大愉快大全盛主人に取つては世界の快樂を一ケ所に集めたる心地せらるべし。今度の戰に於て始終張良孔明の任に當り謀を賄博の裏に廻らし勝を仙居の上に取り天晴軍師の擧を揚たる表部大學は故さらに邊幅を修め睫行して上客暗雲伯の前に進み頓首稽首して「御前誠に恐悦で御座いますドウゾ御杯を頂戴仕りたう御座います……私も

當家の主人公が抑も候補に名を掲られたる曉より及ばず乍ら其事に心勞いたし競爭の烈しかりし時には殆ど寢食を廢して奔走いたしましたが此の結果を拜見すれば前日の苦勞は卽ち今日の快樂で御座います、と得意の追從に暗雲伯は滿面に笑を含み「實に今度の勝利は足下の骨折サなんの甘居ぐらゐの者が一人の力で中々望を達する譯にはいかんテ……マア一ツ呈やうと杯を指たまへば表部は頭より五寸ほども上に拜受して半飮さして「なんの私の功にあらず是全く主人公に當區内の人望が招がずして集まつた故で御座りまず、と表面には功に誇らざる風を粧ひて隣席なる甘居仁太に向ひ「ヘエ御主人公尊公の御榮達は是から直ですぜ衆耆院の大會議に内閣諸公が議案を提出すると國擧、自智の諸派は合從して之を贊成する、似雄愛身の諸派は連衡して是を攻擊する議論正に酣にして内閣の運命將に此の一案に定まると云ふ場合に及び尊公が議長と一聲高く呼で演壇に上りエヘンと一ツ咳拂をして汗拭でチンと鼻をかみ諸君よ諸君と靜々と例の雄辯を揮つて公明正大不黨不偏の名論をお吐なすつてド、此案は斯くの如き理由あるを以て全廢すべしとか可決すべしとか修正すべしとかお述なさると二百名の耆員その數多しと雖ども誰か尊公に敵し得べき忽ちに大多數で貴說の通に決する斯樣な事が五たびも十たびも度重なるに從つて耆員の名望は益々尊公に歸する、傍聽が感服する、新聞紙が稱贊する、世間が奉まつる、女が慕る、寫眞が賣る、猫が戲れつく、犬が吠

る、按摩の眼が明く、居ざりの腰が立つ、イヤハヤ古今未曾有の大騒ぎ此人こそ即ち我輩の頭領なりと諸君員が全會一致で奉戴する、サア衆君員の向背は盡く尊公の料見次第となる、此上は尊公自ら出るに非ざれば蒼生を奈何せんと云ふ所から一躍して内閣總理大臣にお成なさる正二位勳一等に叙せられ大綬章を賜はり特旨を以て貴族に封ぜられ伯爵に叙せらるゝこと遠くて五年近くて三年の中にあり貲に功名の極點と申すものナントえらい物じや御座りませんか……イヤ是は仕たり嬉しさの餘りに獨りで饒舌廻して恐入つた、イザ御主人公 改てお杯を頂戴〳〵 と云ふに甘居は得意極まり「どうして〳〵先生の仰しやる樣には中々參るまいが僕も君員に顔出しをする以上は及ばず乍ら働く積りサ……イヤ今度の競爭は隨分酷かつたネ、一時は遖の僕もどう仕樣かと思つたヨ先生が此で猶發せねばと力を附て下すつたから押込で遂に勝を奏したが是や實に先生の力サ 丙「否々左に非ず いかに作者が面白い趣向の劇を書ても肝心の俳優が善く無りや更に其妙なしと云ふが如く僕が燒モキ思つても尊公の名望智識學問才力が備はつて居ねば仙居の勝は占られませんヨ 甲「ナニさうでも無いが併し先生その氣味は大ありサネ（大得意） 丙「大ありとも〳〵反對黨の奴等が色々の奸策を廻らしたを著々破つた成は大手際サ 甲「夫にしてもどうしてか 丙「隔内の六かしさうな連中が敵方の肩を持つと聞た處から鹽辛さんがム、良々一切予と附合ぬ氣

ならどうでもしろ予も其料見がある、と寄合の席で言はれましたら 甲「サア何が扨是まで鹽辛長者どの、世話になつたり金を借たりして居るものが皆大心配で 甲「其晩に寄合を附て今度の唐瓢は貴君の御指圖次第、……仕ますに依て御勘辨を願ひますと詫て來た時は氣味が好ことで御座りました で 甲「先生は實に奇正兩道の策に富で居るナ 丙「有難う御座います、所が策には富で居ても一身を處するの策には窮し果てゝ…… 甲「知つて居るゝ〳〵余が萬事心得て居るに由て今度甘居を助けた御禮には足下の一身は必らず附て進ぜよう安心し玉へ、エ、甘居それまでの所は汝よく鹽辛に相談して表部が不自由の無い樣に…… 甲「委細承知いたしました 丙「實に御前の思召は心魂に徹して有り難うござります、婦を愛するは多く士を愛するは少なしと古人が申ましたが御前は士を愛するの君子人を識るの英雄——併し初度の國會は餘程懸念ですゼ……なぜと仰しやつても衆議院の方は先づ天下の人物を網羅したりと假に認めた所が奇傑院の方は案外の結果じや有ませんか……第一伯爵（暗雲を指して云ふ）に五仙の唐瓢が少ないと云ふが不思議……イヤ夫ばかりじや御座らぬ反對ながら阿濃園伯も少數また千柿伯乾鮭伯の如きも少數と云ふは驚くべき事です、斯樣に第一等の政治家が此の仙居に漏るは決して賀すべき事に非らずと存じますネ……ジャに由て懸念少なからずと申

すは是や世間の公議です。……と辯じ居る所に取次のものは來て何か廿居に呼く廿居は表部に向つて小聲にて 曰「貝塚周仙が祝に來たと、夫に例の女將軍が先刻から來て次で働て居るがどう仕やうネ 曰「貝塚周仙醫學師は外樣ながら今度の功臣直に此へお通なすつて宜しう御座います、又あの女將軍の働は勳一等の價があるて、(と暗雲伯に向ひ)御前ア〇〇亭の女房、あれが今度は奇策を廻らして働きましたで是に呼まして御盃を賜り度ござりますが……然らば仰に從がひまして、と女將軍を呼べば女將軍は臆する色なく御前に出で、へイ御前誠にお久しく、へイ一ツ頂戴……時に御前申上たい話がありますヨ……オヤ彼奴の再勤をモウ御存じ、恐れ入ましたネエ

第十六回 落第の述懷

梅雨の例とて一昨日より降出たる雨はビショ〳〵と降續き風さへ西より北に廻りて俄に冷氣を呼び戻し單衣の上に袷を重ね夫もマダ寒いゆる袷羽織の汚れたるを引ずり出して着やうと云ふ季候にて夕暮は何となく物さびしきに、二三日前まで許多の人出入に聲も夜も目を廻す程に忙がしかりしに引替て昨日からと云ふものは內輪の外は誰も來ず、來るものは借金の催促ばかり、榮枯忽に變じ歡盡て悲みとなる世の景況こそあじきなけれ、と云へば大惣らしい實は元の李陀彌に成つたれば何も不思議は無い筈なり

主人の頓田山四郎は退に世故を經歷して酢いも甘いも嘗盡したる丈あつて泣たい所をじつと堪へ我慢に我慢をして胸中の苦みを押隱し左あらぬ體にて落付き澄しフランネルの浴衣の上に大島紬の書生羽織を引かけキリンビールを手酌でガブリ〳〵と飮ながら居合せたる時世時節と炭山競太に向ひ

曰「諸君見た樣にそう一概に落膽しては困るぜ人間萬事塞翁が馬一起一倒は是れ政治家の常態と云ふものじや無いか三百人の者員に一仙居區で二人づゝの候補者ありとすれば即ち三百人の登仙者に三百人の次點失望者が無くては叶はざる道理況て當區の如きは候補者が十八人あつて其中に尤も盛に運動したものが五六人あつて見れば登仙は難く失望は易しと云ふが數の然らしむる所じや夫故に僕は失望したとて實に何とも思はんネ 曰「ソリヤ先生はソウで有ませうが僕は實に慚愧に堪ません ぜ夫も相手が立派な政治家ならば貴ての事だが誰あらう凡庸愚昧の廿居仁太無主義無定見の孺子を して名を成しめたは甚だ以て殘念でござるテ 曰「ソウで無いて、彼の望梨之助の如きは平生より例の急激主義で個人的の思想のみを專として更に國家的の思想に乏しいに由て我黨とは稍々反對に立つと雖も彼も亦た政治世界では一個の人物と云ふて可なりサ、僕が競爭で望にでも負たなら殘念でも有うけれど、ナンノ高が廿居の愚物に唐瓜の多數を占められたからとて眞逆に僕を以て廿居に下

る人物とも世間で評すまいじや無いか　與ソリヤ誰もソウは評しませんが我輩が待に待たる初度の國會に先生の顔出しが出來ぬと云ふては頗る肩身が狭いテ　甲「成ほど諸君の如く不肖なる僕に心を寄せたる人々がソウ思つて下さるは忝ないが、是がお互に政治の主義を公に仙居人に告げ我もし登仙して壇場に立たば財政は斯の如くすべし外交は云々軍政は云々と目的を演說して仙居人にサアどうだ兩黨の見る所は正しくこの通りで御座るが諸君は夫いづれを擇ぶ乎と公然意見を發表したる上で少數に陷らば是れ當區に於ては未だ我黨の意見が行はれざる所なりと定まるけれど、ナンノ彼の甘居如きは意見のイの字も曾て一言たりとも發した事は無く僅に表部大學が淺源なる八百屋學問でゴマカスのを腹心と頼み壇員に成らうとは先づ其心得方が抱腹絶倒サ、併し他日開場の時に至つて世上の嘲を受け當區の名を穢すが氣の毒だが是も當區仙居人が自ら招ぐ禍だから自業自得で固より我黨の罪に非すヨ、マア愚痴を言はずと一杯傾け玉へ　與「有がたう御座いますが、併し先生この先尊公は政治上に喙を容ない御了見ですか　甲「ナンノ〳〵頓田山四郎尚も一身を以て國家の進歩と幸福との爲に犧牲に仕やうと覺悟を極て居る人物、倒る、處まで往く心得だが、ナニモ政治を論ずる壇上は敢て耆院ばかりでは無い演說に新聞に幾らも意見を吐露する場合が在る、且つ初度の耆院は未だ十分の技倆を逞くする場所に非ず第二回第三回の改仙が肝心の時だらうぜ、夫に見玉へ内閣は原案を取て動かず耆院は實地を行ふ可からざる決者をして押通す氣風に成て相互に讓り合ひと云ふ事を好まざるに付き或は耆院解散を見ることが二三年の内には屹度あるぜ、サア其時に至つて眞正の政治家が初て仙居に現はるゝだらう又現はれて貰はねば相成らぬじや、其時が憚ながら斯く申す頓田山四郎等が盡力すべきの時だと思ふネ　甲「何にも御尤千萬、なれども先生御自分の方向はどうお附に相成ます積でござるナ

甲「サレバサ僕が思ふには前にも申述た如く新聞演說は益々盛になるゆゑ御同樣に其方を内職に稼ぐとして本職は銘々是まで仕慣れた事をして十分に働かうぜ、今までこそ吏權黨に緣引が無ては幅も利かず得益も取れなかつたが、ナニ是からは耆員の勢力を利用して存外の大儲をする事が有るぜ、幸ひなるかな我黨の主義のものも少數なれども耆席に列なるし又懇意の向も他より仙出されて居るに由て愈々と云ふ機會には諸黨の連絡を手傳てどつちに轉んでも損の往ない樣に働て甘い汁を吸はうじや無いか、ドウダ是から錢儲の緒が開けて來るのだぜ　與「面白うござるネ成ほど先生は策略に富でお出なさるヨ、南高がソウ云て居ますぜ機を見て早く變ずるは先生の長技なりと　甲「馬鹿を云ふぜ、ソリヤそうと南高はどうしたらう　時「先刻大螺吹高から手紙が來て直に出掛た樣ですぜ　甲「ハテナ何の用だか　與「察するに彼の黨では今度甘居が行なつたる奸策を一々摘發して法廷に公

けにすること、次に仙居人へ贈賂嘱托を行つたこと、他人の文書を僞造したる事ども都て證據を取て公にする積だと云ふから其打合かも知れませんヨ

「面白いネ〳〵僕や雲往が俄に候補を辭したなどゝ云ふ書面を配達した事などは實に詐僞の重罪だネ、僕は僕の手から摘發するは否だが若し他人が摘發するなら異議は無いぜ、事によつたら助くるネ、特に音信贈遺を以て唐瓢を買ふなどゝは者員仙居の神聖を汚す次第で怪からぬ事サ（自分の事は勿論棚に上て）其人に對しては忍びざる所あれど公衆の公益公道の爲には摘發するが當然の義務なり權利なりと云ふものじやテ、良々南言が歸つたら話を聞た上で僕も贊成しやう」「そうなつて貴て腹癒をしてお遣なさい餘り忌々しいから……時に先生例の立替はどうか成ませうか、私も實は他から一寸と日歩で借た金ですが……ヘエどうも成ませんか……ソレじや私が的面に困ります……困つても仕方が無いとはソリヤ先生酷いじやござりませんか……何とか私の分だけは工夫は有りませんか、と泣聲を出して口説けども頓田は平氣な顏で「先づ當分はどうもならん

第十七回　勸告狀

乾鍚伯は退に當今第一流に位する政治家その主義は現内閣に反對し其の議論は個人的の思想に出るをもつて流行の國家的思想とは氷炭相容ざるを以て動もすれば時論の攻撃に當り世に行はれずして十餘年このかた閑散の地に退き既に今度の奇籌院の五仙にも首尾よく少數なりしとは雖ども慷慨悲憤の壯士敢行急進の論客には泰斗と仰がれ其說の流行社會より排斥せらるゝ程それ程の度數を以て扼腕社會の人望は益々一身に集まれり。今や世間は者員仙居の後の祭に祝ひやら悔みやら猫も杓子も大騒をして居る中に乾鍚伯は悠然として當區の郊外なる別莊の綠蔭深處に凉暑と世塵とを一所に避け來訪の友を相手として盃を清流の中に洗ひ世間には如何なる風が吹か我關せず焉と云ふ氣風を示したり（其心底は何と有らうか知れねども）今日は希らしくも來客なしと見えて乾鍚伯は書齋の安樂椅子に寄掛り今朝配達の新聞紙を讀み飽て漸く將に華胥の鄕に遊ばんとし玉へる折しも家從は靜に戸を叩きて伯の椅子の邊に來り名刺を出し「只今この西藤武藏之助が伺候いたしまして願ひは拜謁の上にて重大の事件を言上仕り度と申ますが。……と覩へば乾鍚伯半分ばかり考へて思ひ當ると云ふ樣子にて「宜しい是へ通せと命ぜられたり

家從の案内に從つて乾鍚の書齋に入來る西藤武藏之助と云ふは年の頃二十八九ばかり顏の色は淺黑く痩形にて鼻は俗に所謂段鼻にて先は鉤の如くに尖り眼は金壺眼にて小さけれど惡く光り口は自由を得て十分に左右に廣がり齒は遠慮なく前に突進し歯は任他主義を主として勝手に生へたり衣服は

る人物とも世間で評すまいじや無いか　甲「ソリヤ誰もソウは評しませんが我輩が待に待たる初度の國會に先生の顏出しが出來ぬと云ふては頗る肩身が狹いテ　甲「成ほど諸君の如く不肖なる僕に心を寄せたる人々がソウ思つて下さるは忝ないが、是がお互に政治の主義を公に仙居人に告げ我もし登仙して壇場に立たば財政は斯の如くすべし外交は云々軍政は云々と目的を演說して仙居人にサアどうだ兩黨の見る所は正しくこの通りで御座るが諸君は夫いづれを擇ぶ乎と公然意見を發表したる上で少數に陷らば是れ當區に於ては未だ我黨の意見が行はれざる所なりと定まるけれど、ナンノ彼の甘居如きは意見のイの字も曾て一言たりとも發した事は無く僅に表部大學が淺源なる八百屋學問でゴマカスのを腹心と賴み耆員に成らうとは先づ其心得方が抱腹絕倒サ、併し他日開場の時に至つて世上の嘲を受け當區の名を穢すが氣の毒だが是も當區仙居人が自ら招く禍だから自業自得で固より我黨の罪に非すヨ、マア愚痴を言はずと一杯傾け玉へ　乙「有がたう御座いますが、併し先生この先尊公は政治上に喙を容ない御了見ですか　甲「ナンノ〳〵頓田山四郎荷も一身を以て國家の進步と幸福との爲に犧牲に仕やうと覺悟を極て居る人物、倒るゝ處まで往く心得だが、ナニモ政治を論ずる壇上は敢て耆院ばかりでは無い演說に新聞に幾らも意見を吐露する場合が在る、且つ初度の耆院は未だ十分の技倆を逞くする場所に非ず第二回第三回の改仙が肝心の時だらうぜ、夫に見玉へ內閣

は原案を取て動かす耆院は實地を行ふ可からざる決者をして押通す氣風に成て相互に讓り合ひと云ふ事を好まざるに付さ或は耆院解散を見ることが二三年の內には屹度あるぜ、サア其時に至つて眞正の政治家が初て仙居に現はるゝだらう又現はれて貰はねば相成らぬじや、其時が憚ながら斯く申す頓田山四郎等が盡力すべきの時だと思ふネ　乙「何にも御尤千萬、なれども先生御自分の方向はどうお附に相成ます積でござるナ

甲「サレバサ僕が思ふには前にも申述た如く新聞演說は益々盛になるゆゑ御同樣に其方を內閣に稼ぐとして本職は銘々是まで仕慣れた事をして十分に働かうぜ、今までこそ吏權黨に緣引が無ては幅も利かず得益も取れなかつたが、ナニ是からは耆員の勢力を利用して存外の大儲をする事が有るぜ、幸ひならかな我黨の主義のものも少數なれども耆席に列なるし又懇意の向も他より仙出されて居るに由て怠々と云ふ機會には諸黨の連絡を手傳てどつちに轉んでも損の往ない樣に働て甘い汁を吸はうじや無いか、ドウダ是から錢儲の緖が開けて來るのだぜ　乙「面白うござるネ成ほど先生は策略に富でお出なさるヨ、南高がソウ云て居ますを云ふぜ、ソリヤそうと南高はどうしたらう　時「先刻大螺吹高から手紙が來て直に出掛た樣ですぜ　甲「ハテナ何の用だか　時「察するに彼の黨では今度仙居が行なつたる奸策を一々摘發して法廷に公

けにすること、次に仙居人へ賄賂囑托を行つたこと、他人の文書を僞造したる事ども都て證據を取て公にする積だと云ふから其打合かも知れませんヨ

「面白いネ〳〵僕や雲往が俄に候補を辭したなどゝ云ふ書面を配達した事などは甚に詐僞の重罪だネ、僕は僕の手から摘發するは否だが若し他人が摘發するなら異議は無いぜ、事によつたら助くるネ、特に音信贈遺を以て唐瓢を買ふなどゝは着員仙居の神聖を汚す次第で怪からぬ事サ（自分の事は勿論棚に上て）其人に對しては忍びざる所あれど公衆の公益公道の爲には摘發するが當然の義務なり權利なりと云ふものじやテ、良々南言が歸つたら話を聞た上で僕も贊成しやう」「そうなすつて貴て腹癒をしてお遣なさい餘り忌々しいから……時に先生例の立替はどうか成せうか、私も實は他から一寸と日歩で借た金ですが……ヘエどうも成ませんか……ソレじや私が的面に困りますが……困つても仕方が無いとはソリヤ先生酷いじやござりませんか……何とか私の分だけは工夫は有りませんか、と泣聲を出して口説けども蛔田は平氣な顏で「先づ當分はどうもならん

第十七回　勸告狀

乾鍚伯は退に當今第一流に位する政治家その主義は現内閣に反對し其の議論は個人的の思想に出るをもつて流行の國家的思想とは氷炭相容ざるを以て動もすれば時論の攻撃に當り世に行はれずして十餘年このかた閑散の地に退き既に今度の奇簇院の五仙にも首尾よく少數なりしとは雖ども慷慨悲憤の壯士敢行急進の論客には泰斗と仰がれ其說の流行社會より擯斥せらるゝ程それ程の度數を以て扼腕社會の人望は益々一身に集まれり。今や世間は着員仙居の後の祭に祝ひやら悔みやら猫も杓子も大騒をして居る中に乾鍚伯は悠然として當區の郊外なる別莊の綠陰深處に避暑と世塵とを一所に避け來訪の友を相手として盃を清流の中に洗ひ世間には如何なる風が吹か我關せず焉と云ふ氣風を示したり（其心底は何と有らうか知れねども）今日は希らしくも來客なしと見えて乾鍚伯は書齋の安樂椅子に寄掛り今朝配達の新聞紙を讀み飽て漸く將に華胥の鄕に遊ばんとし玉へる折しも家從は靜に戸を叩きて伯の椅子の邊に來り名刺を出し「只今この西藤武藏之助が伺候いたしまして願ひは拜謁の上にて重大の事件を言上仕り度と申ますが。……と窺へば乾鍚伯半分ばかり考へて思ひ當ると云ふ樣子にて「宜しい是へ通せと命ぜられたり

家從の案内に從つて乾鍚の書齋に入來る西藤武藏之助と云ふは年の頃二十八九ばかり顏の色は淺黑く痩形にて鼻は俗に所謂段鼻にて先は鉤の如くに尖り眼は金壺眼にて小さけれど惡く光り口は自由を得て十分に左右に廣がり齒○は違感なく前に突進し骨○は任他主義を主として勝手に生へたり衣服は

白の竪縞の木綿浴衣の上に鼠色なるヘコ帶を締め藍縞の單袴の裙短なるを着て水淺黄の手拭の午後一時半許なるを右の腰に挿みたるは一目して一個の有志たるを知るべきなり。抑この有志は誰ぞ西藤武藏之助と云ふ名は曾て政治社會にも官員紳士學者耆員物識等の流行兒にも聞たる事なきに乾鯣が其書齋に通して談話せらるゝは如何にと疑を容るゝ輩もあらんが、去る社會にてこそ名を知られぬ有志の俠氣論客の仲間では當節日の出の立もの氣力 腕力 辯力の三力に富み苟も志の決する所は斷行して顧みず自由の爲めに何時にても一身を差出さうと云ふ豪傑（其實如何は誰も保證せざれども）即ち任俠義會の主幹にてぞある

西藤武藏之助は身體をグット反身にして椅子に脊骨を當て兩の腕をシカト組み机上に廣げたる姓名錄を孔の明くほど睨み詰て 西「……只今申上げたる通の有樣であるに由て僕輩は是を傍觀する事は出來ません天下の爲には斷然これを論じて公議の裁判に訴へる決心でござる……抑も我黨の有志は其主義の如何を問はず眠仙耆院論の初まつたる時よりして是を贊成し天下の爲に帝室の爲に國家の爲に人民の爲に政權の爲に自由の爲に何でも全體なら是より鳴物入りになる所なり一日も早く耆院聖事の美擧を見んものとこの武藏弓馬の家に生れ來て一命を民權に奉り。屍を書生の中に沈め。下宿の二階に起伏しあかす壯士の單衣に添し破袴。かたしく暇も茄子の蔕。或時は繩に掛り。監倉に

身をまかせ。又ある時は三錢の。工夫も出來ぬ雪の夜に。芋少しある夕飯に。箸取る音や煤ランプ。とかく凌ぎし甲斐もなく。都の内には置かれずして。三里の外に逐出され。おちら此方と吟よひしが。世は末世に及ぶと雖ども。日月未だ地に落玉はず。今度の仙居こそ、有り難けれと思ひしに。此の登仙は何事ぞと思召す。人才は遼遠萬里の雲に覆はれ俗物奸商世にはびこり。左しも尊き耆院をば。名利の巷と成さん事の。口惜う候。アラ恨しの世の中や〳〵と。つひに泣かぬ西藤が。一期の涙ぞ馬鹿げたる。伯爵おん手を取り玉ひ。「イカニ西藤。その述懷は去事ながら。足下は如何計らうべう存ずるか。「さん候此上は彼是申すも無益なれば。奇簇院へ仙出の輩は申すに及ばず。衆耆院へ登仙の儕輩に至るまで一々に其人物を問合せ正統公平の人は飽まで保護し。佞奸邪智の輩へは辭職を勸告し。聽ずとあらば我等が意見に從へと切羽詰の談判を遂うずるにて候「近頃殊勝の御覺悟。承はれば辭職の勸告と仰ありしが。勸告狀の草稿御所持なき事はあらじ。朗讀いたされよ是にて聽聞申さうずるにて候。何と勸告狀の草稿を讀めとよや「いかにも「心得申して候。素より勸告狀のあらばこそ。帶の中より下宿屋の書出し一卷とり出し。勸告狀と名づけつゝ。高らかにこそ讀上けれ。「夫つら〳〵惟れば。門閥吏權の鼻の先は。利慾の雲に隱れ。民權自由の長き論。敵すべき人もなし。玆に馬鹿ものゝ味方おはします。御名をば生姜方外と申し奉る。最愛の富貴に溺

れ。名利の情止み難く。食慾の御涎乾く時なし。思を仙居に翻して。當區者員に登仙し玉ふ。斯る靈場の穢れん事を歎き。西藤坊武藏非常の憤懣に涙を流し。腰押の仲間を勸めて。此の登仙を辭退せん事を。紳士に勸告す。一言半句反對の輩に於ては。現世にて無理の脅迫に掛り。來世にては數千障碍の上に座せん。奇妙稽首敬て白すと。天も響けと讀上たる。勸告狀聽聞の上は疑あるべからず。去ながら事の序に問ひ申さん。世に有志の姿樣々あり。中にも壯士は。いかめしき姿にて政治議論はいぶかしけれ。是には謂あるやいかに。「その由來いと易し。夫れ壯士の法といつば。民權自由兩部を旨とし。紳士豪商を踏荒し。世に害をなす佞人奸物を退治して。現世貧民の肩を持ち。或は難業苦行の功を積み。天下泰平の冀望を持す。故に內には文明開化の德を脩め。表には野蠻の相を顯はし。惡徒外道を威伏せり「シテ又袴を腰に纏ひ。壯士の形にありながら。帶に挿みし手拭は如何に「手拭ヘコ帶は壯士の用具にして。腰には鐵骨の扇を帶し。手には赤樫のステツキにて大地を突て威張り散し。市中市外を縱橫せり「西洋人は小さき杖を携ふるに壯士が樫のステツキに五體を固むる謂はいかに「事も愚かやステツキは。西洋英吉利の豪傑コロンウエルの持給ひし靈杖にて。民權自由の功德を籠め。ダントンいまだジコビン倶樂部に存りしころ。其の信力强勢を感じて持たまへり「シテ又壯士に傳はりしは 西「斯る靈杖なれば。我黨の壯士これを持して世間を徘徊す「頭に戴くシヤツポは如何に「是ぞ愚智の看板にして。十二錢の古物を買て之を戴く「着たる浴衣は「洗ひ晒しの三河木綿」腰に纏ひしヘコ帶は「醬油で煮染た樣だと申す「扨また兩つの泥下駄は「上下の兩院を跨ぐ心なり「出で入る息は「アカンの二字「佞奸邪智とは如何なる義にや。序に問ひ申さん。何と〳〵「佞奸邪智は紳士の深秘にして語り難き事なれど。疑念を晴さん其爲に說聞せん。夫れ自稱の紳士といつば。所謂表面修飾內心貧慾者の九字なり。正に論ぜんとする時には。正しく立て面を見ること三十六分。利慾の話しを持掛て。其心底を探り。共に儲ケを謀る時は。剛慾邪心立所に顯はれずと云ふ事なし。實に胸中を察するの明鏡。其德廣大無量なり。肝に彫付け人に語るな。穴賢〳〵大日本の神祇諸佛菩薩も照覽あれ。百拜稽首おそれみ〳〵謹みて申すと云々斯の通り（イヨ成田ヤー〳〵、 頭取「東西紙數に制限が御座りますれば先づ此回は是れ切り

拍子木「チヨン〳〵〳〵幕）

第十八回 慰勞會

甲「ソリヤ詰らんじや無いか 木輪物四郎「所が詰るテ實は此事に付て僕は大株さんにも草分さんにも意見を述た所が大贊成で何時でも出席し樣し又入費を應分に負擔し樣との事で御座つた（其實ドウダ